

324-249

文學士 蜷川龍夫著

日蓮聖人傳

興文館藏版

44. 6. 22

丙寅



日蓮上人の自覚の  
ありかたは如何なるに  
接するに當りては  
人として其の如く  
日蓮上人の理想を



立正  
安國





## 序

夫爲史者不有人禍則有天禍、豈可不畏懼而輕爲之哉とは、韓退之の劉秀才に答へて、史を論ずるの書に言へるの語なり。史傳や難し、韓文公にして既に此の辞あり。吾人今爰に、教界の大偉人を傳せんとす、豈に臨淵履氷の思無くんばあらざるなり。

日蓮は我が佛教史上に活躍する唯一の奇傑なり。霸氣満々たる渠が一生は實に奮闘的生涯にして、その宗教的覇業は吾人をして、痛絶快絶を叫ばしむ。念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊てふ四格言は、渠が天下に號呼せし宗教改革の宣言にして、渠が往くところ、破邪顯正の叫聲を聞かざるなく、渠



が居るところ、法難の従はざるなし。先年故高山樗牛博士、一たび日蓮の研究を提議するや、我が思想界の大勢は、聖日蓮に向つて傾注せられ、世人は競うて日蓮が奮闘的經歷を知らんとせり。古來日蓮の傳記その書多しと雖ども、何れも事を靈怪に托し、跡を神秘の裡に葬りて、大偉人の眞面目を損せざるもの殆んど稀なり。吾人これを慨する、茲に年あり、乃ち正確なる日蓮聖人傳を綴り、以て日蓮を研究せんとする。同士の頌たんとす。然れども吾人は淺學非才、この大偉人の眞面目を傳ふるの史筆を有せざれども、また退いて黙するに忍びざるを以て、吾人が研究し得たる日蓮聖人傳を印行して、江湖君子の叱正を乞はんとす。

明治四十四年四月

著者 識

# 日蓮聖人傳

## 目次

- 第一章 序説……………一
- 第一節 日蓮以前に於ける社會の大勢……………一
- 第二節 日蓮以前に於ける佛教の大勢……………二
- 第二章 年譜……………三二
- 第三章 少壯時代……………四六
- 第一節 家系と誕生……………四六
- 第二節 登山と剃髮……………五一
- 第四章 修養時代……………五八
- 第一節 鎌倉の遊學……………五八
- 第二節 叡山の遊學……………六〇
- 第三節 南都の遊學……………六五



第四節 伊勢の宗廟に詣つ……………六六

第五節 蓮長の歸郷……………六八

第六節 鎌倉再度の遊學……………七一

**第五章 開教時代……………七三**

第一節 清澄山の獅子吼……………七三

第二節 華房の説法……………八一

第三節 鎌倉の説法……………八七

第四節 第一の諫奏……………九八

**第六章 法難時代……………一三〇**

第一節 松葉谷の法難……………一三〇

第二節 伊東の法難……………一三三

第三節 小松原の法難……………一四一

第四節 元使の來朝……………一四五

第五節 龍口の法難……………一五六

第六節 佐渡の法難……………一六三

**第七章 隱退の動機……………一七三**

第一節 赦免狀到來……………一七三

第二節 最後の諫奏……………一七六

第三節 身延の隱退……………一七八

第四節 池上の入滅……………一八四

**第八章 日蓮の後繼……………一九八**

第一節 六老僧の傳道……………一九八

(一) 大成辨阿闍梨日昭……………一九八

(二) 大國阿闍梨日朗……………二〇二

(三) 白蓮阿闍梨日興……………二〇二

(四) 佐渡阿闍梨日向……………二〇三

(五) 伊豫阿闍梨日頂……………二〇三

(六) 蓮華阿闍梨日持……………二〇四



餘録

第二節 日像の京都弘通……………二〇五

第一章 日蓮宗の發展……………一

  第一節 十界の漫茶羅……………一

  第二節 觀心本尊鈔……………九

第二章 日蓮宗分派の起原……………三三

  第一節 勝劣派の起原……………三三

    (一) 興門派と其派祖……………三五

    (二) 本成寺派と其派祖……………三八

    (三) 妙滿寺派と其派祖……………四〇

    (四) 八品派と其派祖……………四二

    (五) 本隆寺派と其派祖……………四四

  第二節 不受不施派の起原……………四五

第三章 日蓮宗の法脈相承……………四八

# 日蓮聖人傳

文學士 蛭川龍夫著

## 第一章 序説

### 第一節 日蓮以前に於ける社會の大勢

茫々たる六經は萬機の圃なり照々たる前史は萬機の鑑なり機を知るは夫れ神なるかな事の起る起るの日起るものならんや其の來るや漸進す雪崩れに似たり其の進むや緩行す星の歩みの如し急進せざるなりされども一刹那も休止せざるなり常人は知らずその起るに及んで始めて驚く只天下の樂みに後れて樂しみ天下の憂に先ちて憂ふるもの之れを知る

我れ本邦史を讀んで承久の亂の章に至る毎に未だ嘗て卷を掩うて拱手熟考せずんばあらざるなり嗚呼事の遂に爰に至りしものそれ其の基因とす



る所のもの果して何ぞ忽ち案を叩いて大悟して曰く機を得れば仇讎變じて腹心となり機を失へば昵親反して勁敵となる承久の亂の起りしもの夫れ機を失ひたればなりと。

承久の亂の起る機を失ひたればなり北條之れを失ひたるにあらず朝廷之れを失ひたるにあらず而して其の機を失ひたるもの實に遠く奈良朝の時にありしなり即ち土地國有制を廢して其の私有制を採用したる時にあり初め孝徳天皇大化二年正月詔あり曰く

在昔天皇等ノ立テラレシ子代ノ民處々ノ屯倉及別臣連伴國造村首カ所有セル部曲ノ民田莊ヲ罷ム

と是れ日本國法の沿革上最も著明なる一段落を畫したるものにして即ち伴造國造等の私民たりしを廢し日本全部の民衆を以て日本國家の臣民となし臣連等の私領たりしを廢し日本全部の土地を擧げて日本國家の領土とするに至りし是れなり。

此の一大改革は實に中大兄皇子(天智天皇)と中臣鎌足との手になりしもの

にして予は本邦史を讀んで爰に至る毎に中大兄皇子と中臣鎌足との人と爲りを想見せずんばあらず上古蒙昧の時に當て此の大業を爲す才徳遠く萬人に優るものあらずんば能はざるなり。

後文武天皇の大寶の律令に至りて更に上足の進歩をなしぬ是れを班田の制となす是ぞ本邦經濟史上千古十方に誇るべきの一章なりと云ふべきなり。

由來美制は行はれ難く惡法は起り易し奈良の朝元正天皇の御宇にいたりて懸田の制は起れり聖武天皇天平年間に至り遂に再び土地の私有を許しぬ。

是に於て權門勢家競ひて公民を驅役し懸田を務め私懸の田爰に益々多きを致せりこれらの私田は國司の治を受けず賦稅輕く調庸無しされば民争ひて之れに趨き公田荒れて朝廷の疲弊を來せり。

之れより先推古天皇の朝賜田の制ありて佛師太子博士遣唐使に土地を與へたりしが後壬申の功臣にも土地を與ふるに至れりかくてこれ等は遂



に長く私有とはなりぬ。

又た功田の制起る。即ち國に勳功ありしものに與ふるに土地を以てしたりしなり而して一世二世あるひは三世に傳ふ。然るに法令弛びて子孫之をも奉還せざるに至れり。

是等の弊は宇多醍醐の朝に至りて益々甚しく、延喜格を以て之れを禁せんとせしが、滔々の勢は止まず、藤原道長の時に至りては藤氏の私田天下に遍く、其の富裕まことに皇室を過ぐるに至りぬ。所謂莊園即ち是れなり。

此莊園は諸郡に錯雜し、國司は以て之れを治むる能はず、領家領主なるもの起りて之れを治むるに至れり。即ち庄毎に庄家を立て、庄務を行ひ、庄倉を置きて庄の租税を納め、庄司は専ら土地を治め、領家は其の輸物を納る。かくて朝廷に輸するの地益々減じ、朝廷より課するの戸愈々失し、租庸調の制は名のみを存するの姿となりぬ。大寶の令、班田の制、遂に跡を失して莊園いたる所にあり、朝廷疲弊し豪族跋扈し、日本は爰に一大改轉の時機とぞなれる。此の時に當りて郡司は朝廷の郡司にあらず、國司は中央政府の國司にあら

ず、公租は之れを横取り、莊園は之れを恣にし、郎黨を養ひて豪族とはなりぬ。是れ即ち後世武家の起因なり。

さるに藤原は邯鄲の夢を紫雲殿の櫺干に食り、長劔を御苑の花に嘆ず。天慶の亂は起れり、刀夷の賊は對馬を侵せり。前九年の亂は起れり、後三年の役は起れり。遂に保元平治の大亂は起りけり。千羽の舞は以て此戰亂を治むべからず、藤原の長袖は是に至りて奈何かせん。即ち是等の戰に出でしものは豪族なりき。之れと輸贏を決せしもの、また豪族なりき。源氏と云ひ、平氏と云ふ。是れ實に當時に於ける二大豪族に過ぎざりき。

豪族天下に跋扈するに至り、なほ時に國司は諸國に居り、土地の幾分は其支配を受けたりき。之を公田と云ふ。されば、國司の支配内にある莊園は其の國司の統治の下にあるべきなるに、事實は然らず。身豪族より起りて國司たるもの、外は之れを制するの力無し。故に自ら其の任地に行かず、目代まんだいを下向せしめて之れを治む。之を以て土地は其の所有者の自由支配に歸し、地方統御全く亂れ、王命を用ゐざるもの、其の間に出没するに至れり。噫、また是れ天



命なりと云つべき歟。

源氏の豪族、源頼朝を鎌倉に開くや、先づ守護地頭を置けり。守護は國司の權力の及ばざる諸家の所領に對し謀反人、殺害人、及び盜賊を捕縛し並せて大番と稱する京都勤番の士を催促するの職を有す。地頭は初め平氏の門族が其勅領に置きし收稅役の名なりき。頼朝は之れを以て公務の官職となし、古の郡司に代りて郡郷の莊園を收稅し其の幾分を以て封食とせり。此の如く守護は司法の權を握り、地頭は財政の權を握り共に頼朝の家臣を以て補せり。而して頼朝は自ら六十六國總追捕使總地頭となれり。是に於て政權全く頼朝の掌中に歸せり。ます鏡に曰く

この時を諸國の總追捕使といふ事うけたまはりて地頭職に我が家のつはものどもをもしあつめける。この日本國の衰ふる初めはこれよりなるべし。

元龍悔ひあり、源家も僅かに三代の榮花を鎌倉山の松蔭に残しこゝに北條氏の世とはなりしも北條氏は本陪臣にして自ら將軍の職を襲くべからず。

されば北條義時乃ち姉政子と謀り皇子を擇びて將軍となさんとせしが後鳥羽上皇之れを許さず。是に至りて攝政藤原道家の三子頼經を京師より迎へて將軍となしぬ。

初め頼朝の妹、藤原能保に嫁し一女を生む。此の女藤原公經に嫁して又た一女を生む。道家納れて頼經を生めり。されば道家は頼朝の姻親なり。義時が頼經を迎へて將軍となす。此れまた箇中の消息ありしなり。時に頼經年甫めて三歳、實權全く北條氏に在り。

此の時に當りて爰に一大事變こそ起りたれ。之れを承久の變亂となす。初め源頼朝其の家臣を以て諸國の守護地頭となし其の職を傳へしめてより莊園全く幕府に牽制せられ。復た朝廷の意の如くなる能はず。公郷の私領は守護地頭の干涉を蒙り領家は之れを支配すること能はざりき。衣食足りて禮節を知り、倉庫充ちて榮辱を知る。朝廷は遂に幕府の權力を削がんとせり。時に白拍子あり、名を龜菊と云ふ。院中に召仕へし。故を以て攝津の長江倉橋の二庄を與へられぬ。ざるに其の領の地頭、領家を箠にして私權を逞にす。



龜菊憤りて地頭の政易を乞ふ。義時肯かず。是に於て後鳥羽上皇、順德天皇と謀らんと欲し、位を仲恭天皇に傳へしめたり。史に後鳥羽上皇を本院と稱し、土御門上皇を中院と申し、順德上皇を新院と申す。

此の年後鳥羽上皇詔して北條義時の官爵を削り、兵を五畿七道に徴す。事洩れて鎌倉に聞ゆ。政子義時大に怒り、兵を擧ぐ。義時の長子泰時十八騎を率ゐて鎌倉を發す。諸將繼いで至る。其の兵十九万人と號す。東海、東山、北陸の三道より進む。皇軍美濃尾張越中に出で、三道の軍を拒ぐ。皆利あらずして宇治勢多を守る。皇軍僅かに一万七千餘人なり。皇軍の將たるもの公卿武士にして進退叶はず。幕軍は關東精銳の武士なり。勝敗の數初めより明かなりしなり。泰時進んで京師に入り、六波羅を衝いて餘黨を追捕し、公卿の之れに與みせし者を捕へ。或は斬り或は流し、悉く其の所領を收めぬ。仲恭天皇は幼にして何事をも識らざりしが、順德天皇の皇子なりしを以て位を後堀河天皇に禪り、九條殿に幽せらるゝに至れり。噫、江山恨あり。三宮の惣後鳥羽上皇は隱岐に順德上皇は佐渡に、土御門上皇は土佐に遷させられ、畢んぬ。殊に後鳥羽上

皇御遷居の御有様こそ痛ましとも痛ましの極みなれ。

みちすがら雪かきくらし風ふきあれ、ふじきしてこしかたゆくさきもみえず、いとたえかたきに御袖もいたくこぼりてわりなきことねほかるに  
うき世にはかゝれとてこそむまれけめ

ことほりしらぬわが涙かな

せめてちかきほどにあづまよりそうしたりければ、後にはあはの國にうつらせ給ひにき。さてもこのたび世のありさまげにいとうたてくちおしきわざなり。中略をのがちりくゝにさすらへいそのとまやに軒をならべてをのづからことゝふ物とてはうらにつりするあま小舟しほやくけふりのなびくかたをも我ふる郷のしるべにばかりながめすとさせ給、御すまゐどもはそれまでと月日をかきりたらんたにあすしらぬ世のうしろめたさにいと心ほそかるべし。まいていつをはととかめぐりあふべきかぎりだになく雲の涙けぶりのなみ、いくへともしらぬさかひによをつくし給ふべき御さまともくちおしといふもをろかなり。このおはします所



は人ばなれ里とをきしまの中なり。海つらよりはすこし引入て山かけにかたそへて大きやかなるいはほのほばだてるをたよりにて松のはしらにあしふけるろふなどけしきばかりことそきたりまことにしばのいほりのたゞしばしと、かりそめにみえぬる御やどりなれど、さるかたになまめかしくゆへつきてしなさせ給へり。みなせどのおほしいづるも夢のやうになん。はるくともみやらるゝ海のてうばう二千里の外も残りなき心ちする、いまさらめきたりしほ風のいとちたく吹くるをきこしめして

我こそはにるしまもりよあきのうみの

あらしよに又すみのえの月やみむ

けふこそよそにあきのしまもり

(増島守鏡)

あはれ、北條氏のこと、是に至りて遂に云ふに忍びざるなり。是時ぞ降魔の劔は天の一方に現れたる折伏の槍は地の一隅に起りたり。

「自昔至今、王法に奉作敵者、何者か安穩なる。狗犬が吼獅子其履無不破、修羅

が離日月其箭還無不中其眼遠例具置之。近は我朝に代始て人王八十餘代之間、大山の王子、大石子丸を爲始、二十餘人王法に奉爲敵一人として素懐を遂げたるもの無し。皆頸を獄門に被懸、骸を暴於山野。關東の武士等或は源平、或は高家等奉、捨先祖相傳之君、伊豆國の爲民、義時が下知に隨ふ故にかゝる大難出來る也。

第二節 日蓮以前に於ける佛教の大勢

淫弊の雲、拘尸那城の叢を掩ひ、湛寂の風、娑羅雙樹の技を拂うて、より爰に千有五百年、磁城の島遙に法雨に霑ひ、金刺宮遠く佛日輝く、佛教の傳來實に欽明天皇十三年十月にして、皇紀千二百十二年なり。

ベタニ云へり、人は現代に於て、恐神的動物なり、崇神的動物なり、過去に於ても此の如くなりき、未來に於てもまた然らんと、宗教の起因實に爰にあり。



渺茫たる廣原を望み蒼々たる穹天を眺むる時誰か自然の妙觀に打たれて讚美の歌を發せざらんや自然の美自然の調是れ果して何者の所爲ぞ人力のもて企及し得べきものにあらざつて超人間の存在を豫想せんとすこれぞ神の觀念の發生なる斯くて多くの神を想ふものは多神教徒となり一神を認むるものは一神教徒となる既に多くの神宇宙にありて存するを想ふ天漠々たり地濼々たり天神無からざるべからず地祇存せざるべからず生や恍々なり死や茫々たり生にして靈ありとなす死にして靈無からざるべからず況んや山に神あり水に神あるに於てをや人や何處よりか來り何處にか去る天よりや生れけん地よりや湧きけん祖先崇拜の起るは爰にあり拜天教の起るは爰にあり天を拜し祖先を崇む人の祖先は天神にあらざりしか解すべからず知るべからず天神遂に祖先と合一するに至らずんばあらざるなり天は清明なり地は混濁なり頭は清く足は汚れたり土なり神なり君なり之を以て日本の太古を考ふ蓋し當らずと雖も遠からざるべし太古吾人の祖先は天より降り來れりとせり天は神のあるところなり旭光

燦々たり神の靈威にあらずや月色皓々たり神の聖姿にあらずや印度の大日如來我が天照太神は蓋し諸神の主たるべきなり竊かに思ふ神武天皇の皇祖天神を鳥見の山に祀りしもの蓋し箇中の神秘解くべきものなしとせんや太古の祭政一致また知るべきなり政治とはまつりごとなり祭事なり日本に於ける租税の淵源は祭祀に捧げし供物なりしを見れば太古の政體は宗教政治にして太古の國家は宗教的國家の醇の醇なるものなりしや明けし政治既に此の如く國家また此の如し而してその拜する所のもものは天神にあり此の時に當つて宇宙の玄妙を談ずる佛教の輸入し來るに於ては我が思想界の擾亂知るべきなり

此の擾亂せる思想界の統一者として一俊傑こそ現はれたれ之れを聖德太子其の人となす既戸皇子廿四歳の時高麗の僧惠慈百濟の僧惠聰來りて三論成實二宗を傳ふ太子就いて學び元興寺を建つ次いで四天王寺を建て専ら佛陀の訓戒を奉じて慈悲の淨業を修せり敬田院悲田院療病院施藥院は即ち其一端なり太子自ら施藥悲田療病の三院の事を以て國家の大



基督教法の最要となせり。佛教は斯くの如くにして厩戸皇子の力によりて日本化せられ、我が社會上有力なる地位を占むるに至れり。後ち法相俱舍二宗來る。奈良朝は佛教興隆の時代なり。就中聖武天皇の御宇は實に其の盛なるものなりき。この時に當りて二大宗は傳來しぬ。一を華嚴宗となし。他を律宗となす。嵯峨天皇弘仁十年最澄四頓の戒壇を敷山に建てんことを奏す。弘仁十二年敷山に戒壇を築き。國家鎮護の道場となせり。時に一大思湖は溢れ出てぬ。之を本地垂迹論となす。初め元正帝の靈龜二年越前國麻布津の八、秦澄といふものあり。趣智山に入りて白山を望む。一夜梵に仙女を見る。仙女云へらく。

日本秋津島は本是れ神國なり。國常立尊は最初の國主にして六代を経て吾に至る。吾は伊弉美尊なり。今は妙理大菩薩と號す。此白山は我國の主たりし時の都城なり。天照大神は我子なり。忍穗耳尊は我孫なり。其子瓊々杵尊は天照大神の敕を受けて此土に住居し始む。と依りて奏して伊弉美尊を祭り、妙理大菩薩と號す。これよりして白山妙理

權現と云ふ。是れ即ち本地垂迹論の始めなり。後、聖武天皇の東大寺を建て、大佛を鑄造せんとするや、我國の神國たるの故を以て天平十三年僧行基をして伊勢神宮に行き伺はしむ。祈禱すること七日。神殿開けて聲あり。

曰く。

實相眞如の日輪は生死長夜の暗を破り。本有常住の月輪は無明煩惱の雲を拂ふ。吾れ遇ひ難き本願に逢ひて暗夜に燈を得たるが如し。受け難き寶珠を稟け。海を渡るに船を得たるが若し。

と。その事信ずべからずと雖ども傳へて今に存す。聖武天皇再び橘諸兄をして使せしむ。歸奏の夜、天皇夢に天照太神に見ゆ。太神形を現じ、告ぐるに左の如くなりしと云ふ。

本朝は神國なり。神明を欽仰すべし。而して日輪は即ち大日如來なり。本地毘盧遮那佛なり。衆生之を悟つて當に佛法に歸依すべし。

是に於て東大寺の大佛を鑄ぬ。中央毘盧遮那佛は天照太神の本地にして左側の觀世音は天兒屋根命。右側の虚空藏は太玉命。而して鎮守權現は八幡大菩



薩を表せしなり。此の思想は奈良朝の佛教に通して存在せしものなり。されど其の大成に至りては平安朝の佛教者にして其の代表者は即ち傳教大師最澄及び弘法大師空海となす。

最澄、姓は三津氏近江國滋賀郡の人なり。桓武天皇延暦二十三年秋七月遣唐使菅原清心に従ひて唐に渡り、天台山國清寺に行いて道邃に逢ふ。道邃は天台智者が七世の法孫なり。道邃乃ち最澄に告げらく、道を弘むるは人に在り、人能く道を持す。吾が道の化行するは今其の時なるかなと、並ひに菩薩三聚の大戒を付す。最澄は更に佛隴寺の行滿、龍興寺の順曉などに遇ひて教を受けたり。後延暦二十四年歸朝して西土得る所の天台密宗の諸教文を上る。弘仁元年春、豊前の宇佐八幡に詣て法華經を講す。神託あり。曰く

法味を受けず、久しく歳華を歴たり。今聽く、微言何を以てか徳に報みん。我法衣有り、願くは願達を表せん。

乃ち齊殿を啓いて紫衣二領を得たりと云ふ。是れ即ち本地垂迹説にあらざとせんや。先きに行基太廟に祈りて神託あり。太神は即ち釋迦牟尼佛なり。今

や最澄、宇佐八幡に法華を講じて此の事あり。本地垂迹の説益々盛ならんとす。

最澄は願戒論を著せり。中に曰く、

稽首するに十方は常寂光なり。常住して内に三身佛を證す。

譬首するに十方は眞如性なり。妙法は一乘、眞如の教なり。

稽首するに十方は内眷屬なり。大智大悲大三昧。

と。又た守護國界章を著す。中に曰く、

有爲の報佛は夢裏の權果なり。無作三身は覺前の實佛なり。

と。以て法華經は釋尊の正宗なるを明し、南都の名僧道澄、勤操等十四人と帝前に對論して之れを破り、法華宗の門下となす。是に於て日本國內一乘に歸せり。

天台宗は法華經を以て所依の本經となし、一代の諸經を判す。伊人法師の義例に云く、

一家の教門、用ふる所の義旨、法華を以て宗骨となし、大智度論を以て指



南となし。涅槃經を以て之れを助け。智度論の一心三智を以て觀法となし。諸經を引いて信を増し。諸論を引いて助成す。觀心を經とし。諸法を緯となし。以て部帙をなす。

と。部帙とは三大五小の書典を云ふ。玄義、文句、止觀の三大部にして、五小とは光明文句、光明玄義、觀音玄義、觀音義釋、觀經疏の五部なり。

日本天台即ち傳教天台は支那天台即ち智顛天台の本義と稍其の趣を異にす。即ち最澄のそれは禪密を加ふ。是れ最澄の經歷として當に然るべきなり。最澄の支那に渡るや、順曉に就いて眞言を受けしなり。宜なり。其の法嗣義眞、慈覺等顯密論に大悲示現大日尊とあるに迷ひ。遂に後世台密てふ變宗を生じたるなり。これぞ後世叡山に一大論議の起る濫觴なり。

空海姓は佐伯氏にして讚岐の人なり。初め勤操に従ひて虚空藏經を受け。後三乘十二部經を學ぶ。延曆中遣唐使藤原葛野麿に従ひて入唐し。青龍寺の慧果につきて金胎兩部大法秘密印信を受け。又た般若三藏に就いて華嚴六波羅密經を受く。居ること三歳にして歸朝し。桓武帝の詔を奉じて密乘を弘布

せり。平城天皇大同七年始めて道場を紀伊國高野山に開く。此の地や丹生津姫の神地に係る。因りて空海聲言して神託を唱ふ。乃ち一寺を建つ。之れを金剛峯寺と云ふ。此の宗の立意は一切の諸法皆是れ大日如來。眞如は我身。佛法は我體なりとなすにあり。故に妙樂大師は云へり。此の教を離れて永へに成佛の路なしと。要するに眞言宗は汎神教にして現象即實在論なり。自我發展としての倫理教なり。これぞ後世天台と混じたる一大原因たらずんばあらず。而して叡山の學堂、大日經と法華經との差異に關し。一大論争を起したる所以なり。此の論争の渦中に投じ。論難其の雄辨を振ひしものは即ち日蓮上人其の人なり。

嗚呼。平安朝の佛教は高きかな。之れを費し來りたる傳教弘法の二師は大なるかな。さるに弘法尙ほ此の大宗教を説くこと疎に。徒らに弘法の速かならんを欲し。本地垂迹説を唱へ。加ふるに加持祈禱の技を以てして迷信を買ふ。汎神論なるが故に狐も佛なり。蛇も佛なり。これぞ迷信の行益々多くして。愚民徒らに其の路に迷いし所以なる。噫。高遠の道は入り難し。一步過れば其の



行くこと計るべからず。あはれ、南岳天臺の花は一心三觀の園に咲かんとし  
て、羨みぬ。眞如實相の月は十住心の水に澄まんとして止みぬ。斯くて眞言の  
秘密は加持祈禱の衣に隠れ、天臺の妙宗は國家鎮護の門に潜みぬ。  
時こそあれ、藤原の花は淫佚の風に靡ひ、左近の橘、右近の櫻、また遊蕩の雨に  
濕ひ、世は全く花姿柳態の巷とはなれり。保元の亂は起れり、平治の亂は生ぜ  
り。かくて世は源平時代となりぬ。爰に一宗教は起れり、之れを融通念佛宗と  
なす。實に崇徳天皇の天治元年なり、思ふに世のかく泥濁せし所以のもの、全  
く道念の堅固ならざるにあり、道念の堅からざるは明かなる宗教觀念の無  
きにあり、法相や善し、天臺や美なり、されども教理複雑に過ぐ、これ迷信の生  
ずる所以にあらずや。されば時代は爰に教理の簡單なる宗教を渴望せり。況  
んや兵亂相次の時なるをや、何ぞ況んや、殺伐又た殺伐、人世をして修羅界た  
らしめたる時に於てをや、之が弘通者は聖應大師良忍上人なり。  
湘竹涙は零つ、笛を吹くの士、鐵衣夢は冷かなり、花に宿るの人、紅顏翠黛遂  
に須磨一陣の海風に散りしが如き、浮世にありて、あに無常悲愁の感に打た

れざらんや、厭世の情起らざらんや、此の時ぞ一、大宗教家は起りぬ、これを四  
光大師法然上人となす。  
法然姓は漆氏、一に源空と云ふ、美作國稻岡の人なり、法然初め功德院の皇圖  
に就きて台教を受け、又た黒谷の睿空に従ひて密乘及び大乘律を稟け、凡そ  
大藏經律論其の他章疏一として涉獵せざるなし、善導の釋書、源信の往生要  
集を得て大に悟る處あり、乃ち此の宗を弘む、實に承安四年なり、時の攝政藤  
原兼實、法然を延いて淨土の事を問ふ、選擇本願念佛集を作つて呈す、所謂撰  
擇集なるもの是なり、其の中に曰く、

當に知るべし淨土の教、時機に叩て行進すべし、念佛の行は水月に感じ  
て昇降を得。

と、聖道門即ち一代經論の戒定慧を捨て、淨土門の念佛一行を修し、專修念佛  
彌陀の本願によりて、往生安樂の素懷を得るにあり。

されども法然は自力教を識りしなり、信ぜしなり、只た此の彌陀本願の他力  
教こそ是好良藥と信じたりしなり、されば法然の心中確かに即身念佛の然



ありしなり。若し夫れ法然が作州御消息なるものを見れば、蓋し思ひ半ばに過ぎん。此の消息は法然が作州にありし時、其の母の病の厚きを聞きてまゐらせたるものなり。

御病中の身には苦痛もあらせらるゝものにて候。上は大聖世尊より下は惡逆の提婆をはじめとして高官下賤福者貧者に至るまで無常の殺鬼は遁れがたし。朝に紅顏艶なる人も夕には白骨となれる身なり。しかれども念佛の基を悟り給はゞ、死するの生ずるのと申す事は無く候。安心の本を知るとは此身地水火風空五行の假りものにて皆あつまりものなり。譬へば竹材木釘壁石瓦にて家をつくる時は家と云ふ一字なれども其家の中には亭主女房諸道具あつまり有がごとし。人の身も先づそのごとく十界が納りあるなり。其主を心といふ。其心の原を佛性と申し候。其佛は不生不滅なるが故に無量壽といふ。是は人の身の主にて此身を離れては譬へば水中に月のあるが如し。此身意はあみだの造出し給ふ身意なれば全く我と申ものはこれなく故に他力と申す事にて候。眼にもものを見るも耳に聲

を聞くも、鼻に匂をかぐも、口に五味を知るも、身に寒熱を覺るも、意に想のあこるも皆已身の阿彌佛の仕業にて全く我はなきものにて候。しかればこの五輪五体の身を受しは佛になる假の家建なれば或は曇く或は覺悟すれば或は苦しく或は楽しく苦樂は此身を受けし暫くの役目なりと覺悟すれば左のみ苦しきこともなし。此身唯夢、幻、泡、影、露、電の如し。心に思ふことは水の泡、影ほうしのごとく觀念して是に心をとゞめず愛着せず常々無量壽佛を主として修行し給はゞ終に無量壽佛と我と別ならざることを決し給ふべし。經の中にも生者必滅、會者定離と説き給ふ。かたちあるものは滅しほろぶるものにて候。えば死するは死するにまかせ、生ずるは生ずるにまかせ、御あてがひ所作、家々の業をよくつとめ、飢きたらば飯を食ひ眠りきたらば睡眠し、念佛安穩にくらす人こそ無量壽佛にひとし。無量壽佛も阿彌陀佛も外にはあはしまさず、自心本心の異名にて候。我心を離れて別に佛はなく候。如斯此信心決定したる人が誠に娑婆に居ながら活佛にて候。是をうたがわぬを他力の信心と申候。涅槃經に曰く大信心は佛性



なり佛性則如來なりと説給へり。如斯信心する人は活如來にて譬へば明  
 日家の焼くるをしりて焼けぬ所へ宅換して置くがごとし。娑婆に住なが  
 ら穢土の聖衆と申ものなり。人の身の主は無量壽佛にて候。則ち我等か本  
 心は無想無念にて變ぜぬ心なり。此佛心十方を照すを光明と申候。此光明  
 の中に住んで居る我にて候故に觀經に光明遍照十方世界念佛衆生攝取  
 不捨と説き給へり。佛心は慈悲のみ。其清淨なること晴天に雲のなきがご  
 とく限りなき事は天の廣大なるがごとく是を光明遍照と申すなり。これ  
 は人々に備る大信心の本躰にて候。前にいふごとく地水火風を假にひす  
 びし此身なれば佛より皆假りものと心得。病あらは藥灸治をなし大切に  
 して無病に暮すべし。譬へば一夜の宿も雨のもるは最もくろし。生死煩腦  
 の大雨も佛性和光の風ふけば自然と晴るゝなり。唯心の淨土と申は正し  
 き心にこそあり己身の彌陀と申は無量壽佛を開き奉り己れの身が直に  
 彌陀なりといふ事にて候。善導大師曰く極樂は十萬億土の西にあり。悟れ  
 ば則ち此處を去ること遠からずと。阿彌陀佛は此躰の主にておはしませ

ば安置すべし。譬へば佛は燈火のごとく衆生は其影のごとしと承知すれ  
 ば衆生とて別のものにあらず。氷と水との如し。さて今にも臨終來らば病  
 苦にまかせ。死は死にまかせ。身心は本佛にまかせ。一念も動き給はねば顛  
 倒散亂することもし。佛とは涅槃の異名にて涅槃とは不生不滅不老不  
 死の事なり。是を無量壽佛と申して限りなき命の佛といふことなり。其功  
 徳を阿彌陀佛と申し候。其佛が我々に備り居ると申し候。念佛一聲に八十  
 億劫の生死罪障を消滅すと申せども無量壽佛を知らずしては假令頭頂  
 に火をはらひ。脚下に汗を流し。一日に鉦鼓六ツ七ツたゝさわるほど念佛  
 すとも信を知らずして申さば往生おぼつか無し。縱令一文一句しらすと  
 も教と佛語と合體し大信心にいたらば一聲にて即得往生すべし。無常の  
 すがたかたぶかさるうち急き發心して安心せらるべし。あなかしこ。あな  
 かしこ。

それ時勢は英雄を作るとかや。此の殺伐の時に當りて此の宗を起すべく法  
 然は現れたるなり。されば其の説く所や時に「作州御消息」の如きありと雖ど



も、これ其の弘教の要にあらず、而して他力本願の一神教こそその秘要なれ。「血」と「涙」とを以てなれる此の戦事の時、此の悲觀の情は起る。悲觀の人以て心を慰すべきもの、それ他力本願の極樂淨土教か、これを遂に一大新宗教を起すの基たらずんばあらず。

此の時更に一俊僧は宋より歸り來れり。此の俊僧こそ千光國師榮西禪師にして禪宗を弘通せり。榮西は明庵と號す。備中國吉備津宮の人なり。仁安三年宋に渡り、歸朝の後衆に示して曰く、

我禪宗は單傳心印、不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛ナリ。其證ハ經論中ニ散ズ。中今其一ニヲ以テ我等ニ諭サンカ。華嚴經ニ曰ク「初メテ發心ノ時、便チ正覺ヲ成ズ」ト。淨名經ニ曰ク「心淨ケレバ佛土淨シ」ト。楞伽經ニ曰ク「如來ハ清淨ノ禪ナリ」ト。大般若經ニ曰ク「第一ノ義ハ文字アルナシ」ト。法華經ニ曰ク「唯佛ト佛ト乃シ能ク諸法ノ實相ヲ究盡ス」ト。又曰ク「諸法寂滅ノ相ハ以テ言宣スベカラズ」ト。涅槃經ニ曰ク「如來ハ常ニ住シテ變易アルナシ」ト。解節經ニ曰ク「自ラ無相ノ法ヲ證セントセバ言說ノ四事ヲ離ルト」ト。文

珠問經ニ曰ク「此法ハ不思議ニシテ心意識ヲ離ルト」ト。起信論ニ曰ク「言說ノ相ヲ離レ、心緣ノ相ヲ離ルト」ト。智度論ニ曰ク「般若波羅密、實法不顛倒、念想ノ觀ハ已ニ除キ、言語ノ法ハ亦タ滅ス」ト。

禪に二種あり。如來禪及び祖師禪是れなり。如來禪即ち教禪を以てせば、金剛般若經等を所依の經となせども、祖師禪に従へば、教外別傳、不立文字にして所依の經論なるものあらざるなり。

かくて鎌倉佛教の全盛時代は來りぬ。南都平安の佛教は帝室の佛教にして天皇の尊信深く、鎌倉佛教は武門佛教にして、親府の崇信深かりき。

承久の亂後、北條氏の威權盛なるの時、後堀河天皇は位に即き給ひぬ。此の時また一佛教は下野國高田に起れり。之れを淨土眞宗となす。實に元仁元年なり。淨土眞宗の弘道者を誰となす。曰く見眞大師親鸞聖人、其の人なり。親鸞は法然の宗を承け、天下の機を攝して、妻帯を許して、巧に其の弘教をなせり。淨土眞宗は淨土宗と其の所依を同うす。只だ親鸞の著教行信證六卷を以て、指南とするを異にするのみ。法然は時に大乘教化を致して、已心の佛性を指示



したれども、親鸞に至りては全く他力本願を専とせり。  
教行信證に曰く

夫レ眞實ノ教ヲ顯スモノハ大無量壽經是レナリ。斯ノ經ノ大意ハ彌陀廣  
ク法藏ヲ開キ哀ヲ凡小ニ致シ、功德ノ寶ヲ選施ス。釋迦ハ世ニ出興シ道教  
ヲ光闡シ、群萌ヲ極フテ惠ムニ眞實ノ利ヲ以テセント欲ス。是ヲ以テ如來  
ノ本願ヲ説クヲ經ノ宗致トナシ、即チ佛名號ヲ以テ經ノ體トナスナリ  
と。これ親鸞は釋迦を認めて、以て如來の本願を説けりとなせるなり。  
此の時支那より禪僧の瀕々として來朝せるあり。而して更に禪宗は鎌倉の  
宗教界に活歩するに至りぬ。

先づ道隆は來りぬ。道隆は蘭溪と號す。西蜀の人なり。淳祐六年商舶に乗じて  
大宰府に入る。我が寛元四年なり。道隆の鎌倉に來るや、執權時頼之れを尊信  
し常樂寺に居らしめて法を問ふ。遂に歸依して雉髮し最明寺に隱す。後ち一  
刹を作りて住せしむ。巨福山建長興國禪寺是れなり。之れを鎌倉五山の第一  
となす。一寧は來れり。宋の臺州の人なり。永仁六年我が商舶に乗じて來る。後

寺に住す。

子墨來れり。宋の臺州の人なり。一寧と共に來る。後ち建長寺に住す。

祖元來れり。祖元は宋の慶元府の人なり。無學と號す。蒙古軍の來りて寺刹を  
擾すや、溫の雁蕩潛を過る。兵之れを知りて襲ふ。衆徒みな逃竄す。祖元唯だ獨  
り兀坐す。蒙古軍即ち刀を頸に加へんとす。祖元動かず。一偈を述べ、曰く

乾坤無地卓孤筇、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、

電光影裏斬春風、

と。來りて圓覺寺に住す。これぞ鎌倉五山の第二にして瑞鹿山圓覺興聖禪寺  
なる。

鎌倉五山の第三は龜谷山金剛壽福禪寺にして其の開山は千光禪師榮西な  
り。正念は來れり。正念は宋の永嘉郡の人なり。大休と號す。咸淳六年夏商舶に  
乗じて來る。金峰山淨智禪寺に住す。之れを鎌倉五山の第四となす。

第五は稻荷山淨妙禪寺にして開山は退耕和尚なり。

鎌倉の禪高田の念佛、これ鎌倉時代の宗教にして殊に禪は首府鎌倉に行れ、



幕府之れを奉ず、神や空教なり、念佛や、厭世教なり、此の時代宗教は心あるものをして益々厭世家たらしむ、況んや天臺の徒既に淫佚の水に漂ひつゝあるに於てをや。

西行は出てぬ。

いつのまになかきねふりの夢せめて、

あとろく事のあらんとすらん。

とかこち。

露の玉きゆればまたもあくものを、

たのみもなきは我身なりけり。

と歎じ、

消えにける本のしつくをおもふにも、

たれかはすまのつゆの身ならん。

と悲む。

鴨長明は出てぬ、行く川の流れを見て人の住み家を思ひ、方丈記を記して其

の悶を遣りぬ。

吉田兼好は起れり、一個厭世哲學は徒然草を生ぜしめ、

「天よりや降りげん、地よりや湧きけんと笑ひ興じつ。」

と筆を擱げぬ。

嗚呼武門の専横僧徒の腐敗世は厭世の風を生じて宗教文藝一に風流の玩具とはなりぬ、三論法相華嚴何の處にか其の教理を見ん、天臺は真言と混じて臺密の變態を生じ、俱舎は其の跡絶えて律は只たその形骸を留めぬ、思ふに日本佛教は上世に於て寧ろ真なりき、悲田院施藥院の社會事業もありき、降て寺田殖を僧兵起るに及び餘弊ます、甚しく爰に宗教改革の氣運は來れり、此の氣運に乗じて現はれし、一人傑こそあれ、之を聖日蓮其の人となす、一宗を起す、之れを日蓮宗となす、實に後深草天皇の建長五年四月廿八日なり。



## 第二章 年譜

貞應元年——(一才)二月十六日(西曆千二百二十二年)房州長狹郡小湊に生まる。父母之れを善日麻呂と名づく。

天福元年——(十二才)五月十二日初めて郡の清澄山に上り、法印道善に投じて臺密を學ぶ名を藥王麻呂と改む。

嘉禎三年——(十六才)道善に依りて薙髮受戒し、名を蓮長と授かり、是生と號す。(後自ら日蓮と更へたり)焉に在りて既に事相教相に通じ、正に游學の志あり。

仁治三年——(廿一才)將に鎌倉に適かんとして、路に武州程ヶ谷に宿り、淨土偏執の宿主を開諭し、爾も自ら鎌倉に至りて淨土を然阿に學び、又た禪律の碩學に就きて其の宗義を問ふ。房州に歸りて清澄寺に寓し、戒躰即身成佛義を著す。

寛元元年——(二十二歳)復た鎌倉に行きて、叡山の尊海に遭遇し、因りて相携

へて叡山に赴き、東塔に圓頓房に住し、後兼ぬて横川淨光院に盤たり。(掛錫凡そ十二年)又た臨濟の圓爾曹洞の道元、宋より歸へれるを聞き、往きて其の道を問ひ兼ねて普國の風俗を探る。

寛元四年——(二十五才)泉涌寺に往きて、宋僧道隆に見みひ、及び寺藏の宋本書を借讀し、己にして又た三井寺に遊學す。

建長五年——(三十二才)春、房州に歸らんとして、道を勢州に取り、間門淨明寺に宿して天照宮を拜し、而して清澄寺に歸りて室を寺傍に構ふ。四月二十二日、三昧に入り、廿八日、三昧より出て、起ちて旭日に向ひ高く法華の題名を唱ふ。實に本化迹、日弘法の初なり。斯日大に緇素を會して法華の題目を鼓吹し、又た四個の格言を建つ。五月、鎌倉に往き、居を名越の松葉谷に卜して、本代別頭の教を張る。十一月、台家の翹楚成辨受戒す。(是れ開化の初にして後に日昭と云ふは是れなり)斯歳、所禱經を著す。

建長六年——(三十三才)四月二十八日、三十神を小壇に勸請し、榜に經題を書



して、掲げ祭りて護法神となす。蓋し嚮に敷山に在りし時、靈應を感じたるを以てなり。六月二十六日、自から愛染不動を圖して、肥を上頭に書き、以て門人に與ふ。十月、總州平賀源有國の男、吉祥麻呂來たる。十六才にして得度す。是れを月朗と爲す。是歲總州に遊び、蹄路飾鹿浦に於て初めて富木常忍に會し約束する處あり。

建長七年——(三十四才)、註法華經を著はす。

康元元年——(三十五才)、大士鎌倉に在り、四條頼基、右衛門大夫宗仲等來たりて檀越となる。

正嘉二年——(三十七才)、正月、駿州に往きて沼津驛に宿し、經を誦して八大龍王に供じ、去りて岩本實相寺に入りて大藏經を閲し、又た衆の爲に妙經を講じ、二月、一代大意を著はし、又た、一念三千義三篇を造る。

○正元元年——(三十七才)、守護國家論、及び念佛(五篇)權門無得道義(三篇)を著はす。

文應元年——(三十八才)、四月、法界因果を著し、五月、唱題鈔を造る。七月、松葉谷

の窟中に在りて、有名なる立正安國論を著はして、十六日に宿屋光則に因りて之れを前の執權北條時頼に献ず。八月二十七日、所謂松葉谷の法難あり。是歲、五時圖及び雜著六篇を著はし、又た總州に遊びて、富木氏の新堂に於て說法し、會谷教信等來たりて檀越となり、又た台徒某受戒す。之れを日興となす。

弘長元年——(四十才)、二月、武州恩田に往き、吉田の大祝兼益と會して神道の秘奥を問ふ。五月十二日、平長時、大士を豆州伊東に窟す。之れを伊東の法難と爲す。十三日、大士和田の房室に移つり。伊東朝高の狂疾を醫して、釋尊の立像を得たり。所謂隨身佛と稱する者即ち是れなり。

弘長二年——(四十一才)、宗教(二篇)上行口傳(一卷)を著はす。

弘長三年——(四十二才)、二月二十二日、時頼、男時宗と議して、牒を出だして大士を赦す。是に於て門人日乘、或は日朗と云ふ、牒を傳へて至り、大士反へりて再び松葉谷に窟す。是年駿州松野氏の子某來たりて得度す。是れ即ち日持なり。



文永元年——(四十三歳)七月二十九日、宗教一策成る時に法華真言の優劣を論せる者なり。八月房州に歸へりて先考の墓を展し、母氏を省して衙門の情を慰む。時に母年七十餘、爾るに一日暴かに病みて死し、復た蘇りて壽を延ふると爾後四年。九月、華房の蓮華寺寓じて宗教一策を著はし念佛無間を確論す。十月、州の男、金人實信の子某祝髮す。之れを日向とす。十一月十一日、小松原に在りて景信の毒刃に遭ひ、弟子鏡忍及び工藤氏之れに死し、大士身を以て免かる。所謂小松原の法難是れなり。

文永二年——(四十四歳)斯歲、總州よりして常州を經、野州に亘りて普ねく教化し、轉宗歸法する者多し。

文永三年——(四十五歳)正月、法華題目を著して伯母に贈り、以て其の台宗を執して峻めざるを論す。

文永四年——(四十六歳)復た總州に往き、諸地を遍歴して若宮に至る。而して高木氏の子祝髮す。之れを日頂と爲す。

文永五年——(四十七歳)閏正月十八日、高麗起居舍人蕃阜等、蒙古の書を齎して來たる。官議して其の辭命禮を失せるを以て報せず。大士、四月五日に書を法鑑に與へ。八月二十一日に書を光則に寄す。皆國難に關する者なり。十月十一日、書を執權時宗に獻じて、諸宗の僧侶と法門の是非を官廳に於て論せんとを請ふ。其の他書を寄する事、緇素凡そ十所、是れ皆法識上よりして國運を憂ふる者なり。

文永六年——(四十八歳)甲州吉田に行き、手書の妙經一本を富嶽の半腹に埋め、以て後昆流布の地となす。人因りて其の所を經嵩と呼ぶ。斯年、蒙古の國使、黑的書を齎して對島に來たる。官命して之れを拒かしむ。黑的塔二郎彌二郎の二人を擒へて歸へる。

文永七年——(四十九歳)教信に回書して其の年中佳節の故事を問ふに答へ且つ、大進を遣して其の行事を示し、又た、秀句十勝、眞言天台勝劣を著はす。

文永八年——(五十歳)六月、大士極樂寺の良觀と祈雨を角し、靈山崎に於て之



れを折伏す。七月、僧行敏に書を送りて又た之れを屈辱す。爰に於て行敏、真觀等大士を官に讒誣すると盡せり。八月二十日、官、大士を召して之れを驗問す。九月十二日、執權時宗、其の宰賴綱をして大士を囚へて龍の口に斬らしむ。然るに奇異ありて之れを免る。十五日を以て改めて大士を佐渡に謫す。十月九日、寶塔偈の口諺を記し書を併せて日朗に與へ。十日を以て出發す。二十一日、越後の寺泊に著し。二十七日、解纜して二十八日、佐渡の松崎に著し。十一月朔、大野、戸陀林中の一小宇に籠居す。而して斯時よりして遠藤爲盛、人阿佛券と稱す。其の妻千日、共に歸順して能く大士の生命を恙なからしむ。

文永九年——(五十一才)、正月十六日、僧、阿生、信越、奥羽に檄を飛ばして諸宗の僧を集め來たりて大士を踏伏せんとす。而して大士悉く之れを説破す。二月、時宗の兄六波羅時輔反し、鎌倉大に争闘して天下の名士多く害せらる。時宗感ずる處ありて大士を免せんとす。斯月、大士開目鈔を著して四條氏に示す。四月七日、石田郷、一谷に移り。八日夜

半に本門戒を唱へて最蓮に授け。十五日に受職法門成る。時に鎌倉に一婦婦あり、五月兒を携へて千里跋涉して來訪す。大士之れを慰勞し、二十五日に書を作りて其の旅舎に贈り。法號を命じて日妙と云ふ。七月二十一日、前に著す處の眞言修法を日昭等に贈りて書副す。斯歲、入宗異目を著す。

文永十年——(五十二才)、正月二十八日、最蓮か所業を問へるに答へ。因りて前に著す處の祈禱經及び祈禱共文を併せて之れを教す。二月、佛法血脈を著し。四月、觀心本尊鈔を著して太田氏等に與へ。五月、如說修行を著す。閏六月十一日、題佛未來記を著し。七月八日、十界勸請の本尊を著す。實に本化大曼荼羅の最先なり。尙ほ斯年當體義及び宗教一策、並に禱事を著す。

文永十一年——(五十三才)、二月、執權時宗君臣等、異夢を感じ遂に相議して大士を赦さんとし。十四日を以て赦牒を日朗に授く。十五日、大士瀧頂口傳を著す。三月七日、日朗佐州小木濱に著し。翌八日の夜を以て大士に



之れを奉呈す。十三日、大士諸徒に別を告げ、澁牛を經、眞浦津よりして解纜し、十五日越後の柏崎に上陸し、同二十六日に至りて鎌倉に安著す。四月八日、頼綱の第に至りて國難を説き、妙法を宣説する事元の如し。後、時宗、大士の英膽達見に伏し、五月二日王府に聞して護法の牒を授く。然れ共、大士は其の他宗を禁ぜざるを以て悦ばず。竊に隱退の志あり。十二日、彌々甲州身延に隠れんと決し、鎌倉を辭し、酒匂を過ぎ、十五日大宮、十六日内房、十七日に彌々波木井に入る。二十四日、法華取要成る。斯月、大士、朗、興二子を従へて、州の修驗者、喜智を折伏す。六月十七日、南部氏所營の新居に移つる。之れより前、蒙古既に大元と號し、斯歲三月、彼の主忽必烈、鳳州の經略使、忻都、高麗の軍民總督、洪茶丘に命じて日本を伐たしむ。十月五日、彼の二帥來たりて、佐須浦に逼り。六日對壹二島並に銳肥を攻め、里民を虜獲して還る。十二月、大士顯立正意立正觀を著す。

建治元年——(五十四才)、二月、總洲平賀源忠晴其の子万壽麻呂を携へ、日朗を

作して來たる、大士大に之れを重視し、名を經一麻呂と與ふ。時に年才、斯月、蒙古の禮部侍郎、杜世忠等三人書を齎して、太宰府に至る。府之れを鎌倉に送る。六月、撰時鈔を著す。八月二十一日、身延配成る。之れを四條氏に示す。十一月、玄旨を一紙に書して、經一麻呂に賜ひ、以て傳法の信となす。斯才、小室の善智來たりて、大士を毒害せんとし、果たさずして、遂に無二の徒弟となる。之れを日傳と爲す。

建治二年——(五十五才)、正月八日、妙經要文を以て、經一麻呂に口授す。四月十五日、蒙古の使長州室津に至る。七月二十一日、報恩鈔成る。法即道善先に已に遷化せるが爲なり。八月、長州人、蒙古の使を鎌倉に送る。九月七日、官議して、蒙古の杜世忠等凡そ九人を斬りて、由井濱に梟首す。十月朔日、小觀の大意を記して、日進に示す。十一月二十二日、又九觀門一策を記す。是歲、眞言見聞を著はす。

建治三年——(五十六才)、四月、下山の邑連兵庫光基の爲に、宗教一策を著す。是歲、日進僧龍象を説破せるとよりして、四條頼基難に罹かる。十二月、雪



草堂を隠して之れを傾く、大士擅力を藉らず、徒弟に課して以て修復す。是歲聖密の爲に宗教一策を記し、更に妙經二十層大事を記して駿州の大内安清に示す。

弘安元年——五十七才、二月、内房の一老嫗神祠に賽せるに因り、來たりて謁を請ふ。大士辭して面せず、其の神佛の序を失せるを以てなり。三月三日、駿州の三澤某、書を大士に奉じて、其の文永の年に佐州に謫せられてより、其の教化の前の持説と異なるをば疑問す。九月二十日、本尊問答成る、手書の本尊を併せて之れを淨顯に贈る。是歲曼荼羅を書して日向、日持に授く。

弘安二年——五十八才、七月、武州淺草金龍山の法印寂海、富木氏に就きて宗義を叩き、大に驚き來たりて受戒す之れを日寂と爲す。十月朔、末法弘代の大事を書して以て門人に示す。又た、諸佛總勘文を著はす。是月、門弟日興等二十四人、讒に遭ひて地牢に降たさる。十二日、門人日法靈瑞を感じて、良材を得、大士の像を刻して後世に貽さんとを請ひ、像成り

て大士自ら點眼す。

弘安三年——五十九才、三月、官、嚴崇等が讒陷を信し、巖に地牢中に下だせる中の首魁三人を戮す。大士之れが爲めに深く作禱し、且つ、徒弟に諭す處あり。五月、蒙古來寇せんとを議す、前に屢々來書に報せずして、反りて杜世忠等を戮せるを以てなり。八月、殊蒙古大に四方に命じて日本討伐の兵を募る。十二月、八幡鈔を著す。又た、是歲樂王得意を著す。又た日持、法華問答を撰したれば、大士閱して大に褒美し、之れを自撰と爲す。後に遷滅無常の事を記せる時も亦た然り。時宗、蒙古の兵將に來たらんとするを聞き、筑前の古城を修し、兵數十万を置きて之れに備へ。又た山東の諸將をして帝都を守らしむ。

弘安四年——六十才、正月、蒙古復た右丞相阿剌罕、左丞相范文虎並に折都、洪茶丘等に命じて兵十万に將として日本に攻來たらしむ。四月、大士、三大秘法の梗概を書して太田氏に示す。五月、蒙古の艦艦三千艘、數々海西に寇し、海西の諸將兵を進めて力戦すと雖も支ゆると能はず、九州



の人皆阿、讚、豫、土及び中國に走りて天下騒動す。然れ共颶風大に起り、賊艦全滅し生還する者僅に三人。十一月二十四日、天台會を以て、身延山久遠寺(縱横六丈)を開堂す。蓋し、延山の幽邃にも拘らず、大士を欣仰して集まり來たる者甚だ多く庵室狹隘を告ぐるを以て、別に一室を構へたる者とす。是歲、大士自ら宮木常忍の像を刻して傍に安じ、常忍亦た手づから大士の像を刻して終身之れを奉ず。并は、大士常に自から上行に比し、常忍に擬したるに由る。斯く二像、更互に點眼せる者故、後に之れを更互の影像と稱せり。

弘安五年——(六十一才)西曆千二百八十三年正月廿九日、祈禱經の口訣を記して六子に示す。四月手づから寶塔會を圖す(大士素より書畫に良く、又た尤も書に工なりとす。是秋、大士中風に罹かり諸徒來會して看護す。九月、大士所思を告げて武藏國池上に赴く。此時、南部氏乗用として、良馬を贈り、又た男某をして隨從せしむ。八日出發、十八日池上宗仲方に著。其の二十五日、安國論を講じ、了はりて三七日中に滅度すべしと

を豫示す。十月三日、親から本迹大要を書し、立像佛安國論並に官牒の二本を併せて日朗に授く。八日上足六人を定め、日興に命じて之れを書せ令む。所謂、昭、朗、興、向、頂、持、是、れ、に、し、て、之、れ、を、六、老、と、稱、す。十日、註法華經を日昭に付し、又た肉牙二枚を賜ひ。十一日、經一麻呂に祝髮を命じ。十二日、悉く諸子に遺訓し。十三日、入寂す。世壽正に六十有一、法臘四十六、山林に茶毘す。十六日、遺骨を收取して瓶に藏して壇に奠じ、一七日、畢はりて之れを延山に送る。二十一日、諸子啓行して二十五日、延山に至り、往年所刻の影像を以て堂に安ず。

弘安六年——正月、別に一堂を營みて遺骨を安じ、遺弟等輪次に之れを守る。



## 第三章 少壯時代

## 第一節 家系と誕生

阿武隈山系の枝南に折れ、鹿野石尊、鋸山の一帶、魏峨として聳え、妙見山の一角、天空に聳るの處、太平洋の波、北に届して、激浪岩を噛み、潮沫天に跳り、船飛び帆驚くの地、之れを安房國長狹郡小湊村となす。

續日本紀に曰く、神龜元年三月、詔配流遠近の程を定め、伊豆、安房、常陸、佐渡、隠岐、土佐、六國を遠と爲し、諏訪、伊豫を中と爲し、越前、安藝を近と爲すと、安房國は配流の地なりき、而して遠島に屬しき、由來英雄貧賤に生ず、此の刑流の村豈に人傑を生ぜざらんや、曾我祐成の弟時致は伊豆に生る、仁田忠常また伊豆に生る、足利義澄、朝夷、知明、また伊豆に生る、僧陽生、伊東禪師、源延順、忍繁、紹禪師、僧太寧、無敵禪師、光國禪師、皆伊豆の地に生る、而して鎌倉時代の代表者源頼朝は伊豆に成育し、北條時政は伊豆の北條に生る、伊豆の對岩、安房國刑流の漁村、小湊の地、豈に鎌倉時代の代表者を生ぜざらんや。

由來偉人の出生、固より其の系譜を問ふべきにあらず、漁夫の子、何の恥づる處ぞや、刑徒の子、何の愧つる處ぞや、漁夫の子、刑徒の子にして、初めて偉人たることの益々偉人たるべきなり、徒らに祖先の高きを呼び、父の勳功を説くもの、是れ小人懦夫の事のみ、自成の人、Self-made man、これぞ偉人たるの要素なる。

聖日蓮曰く、

日蓮は日本國東夷東條安房國海邊の旃陀羅の子なり。

と旃陀羅とは Sendaria にて印度語なり。アリアン人が印度を征服したる時、之れに抗したる、印度の土人にて、後ち奴隸スラフとなりし種族の名なり。印度に五階級あり、第一を波羅門(Brahmin)、第二を刹利(Kshatriya)、第三を吠舍(Vaisya)、第四を首陀羅(Sudra)、第五を旃陀羅(Sendara)となす。婆羅門は僧侶及び執政者にして、刹利は武士、吠舍は商人、首陀羅は農民、旃陀羅は奴隸にして、一般人民と交際するを禁ぜられたり。後世我が國の穢多に似たるを以て穢多となすもの多し。されば日蓮が旃陀羅の子なりと名のりし、其の大見識、大勇氣實にかく



てこそ人格の益々大なるを覺えずんばあらざるなり。

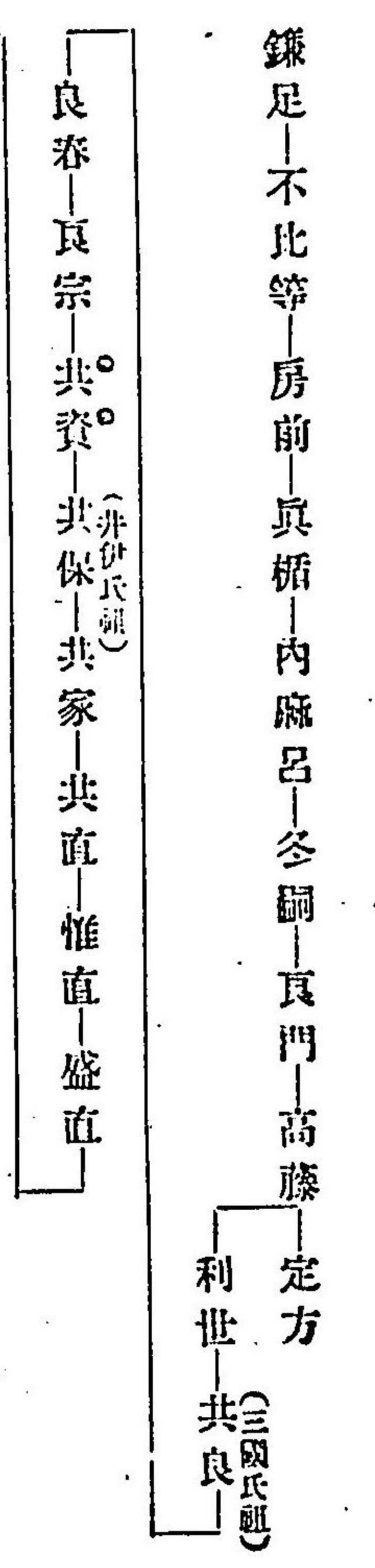
日蓮は坊名善日麻呂、父を貫名次郎重忠といひ、母を梅菊といふ。後堀河天皇の貞應元年二月十六日初めて呱呱の聲を安房國長狹郡東條小湊にあぐ、其の祖先は大織冠鎌足なり。鎌足の子不比等に四子あり。武智麻呂、房前、宇合、麻呂にして之れを南北式京の四家と稱し。四家の中、北家ひとり後代に榮ふ。房前の子大納言眞柄、その子左大臣内麻呂より、左大臣冬嗣、中納言良門を経て贈太政大臣高藤に至る。高藤に二子あり。長は定方、次は利世、或は云ふ右兵衛佐利世は良門の子なりと。利世、其良を生み、後右衛門佐良春、筑前守良宗、備中守共資、累代相嗣ぎ。一條天皇の正暦年間、共資始めて洛陽の天地を去つて遠州敷智郡村櫛に住し、遠州の國司となる。永延元年正月朔旦、社司某井谷八幡宮の傍を過ぎ、井中に孤々の聲を聞く怪みて、その聲を索むるに、一兒ありて容貌秀清なり。即ち抱いて家に還り、慈育することこゝに七星霜。共資之れを聞き奇として養ひ、以て己れが子となし、其の女を以て之れに配せり。十五歳に及び、首服を加へ、名を共保と呼べり。共保その初め、井中より出たるを以て

井伊と稱す。是れ井伊氏の祖なり。井側に一慮橋子あり。因つて衣服の紋となす。其の子備中次郎共家あり。九郎共直、新太夫惟直、赤佐太郎盛直を經。盛直に三子あり。長は次郎良直、次は赤佐三郎俊直、これ奥山氏の祖。次は貫名四郎政直なり。政直遠州山名郡貫名の郷を領す。故に姓となす。政直二子あり。行直、直友、石野氏の祖と云ふ。行直の子重實、其の子重忠、三十歳の時、平氏の餘黨富田基度、三浦盛時等伊賀伊勢の兩州に起り、同國の守護山内首藤刑部經俊を襲ふ。軍不意に發つて經俊防ぐこと能はず。士卒皆狼狽たり。基度盛時勝に乗じ日永若松高角富田の數城を搆へ、威を震ひ、鈴鹿の險に據りて往還を塞ぐ。其の時京都の守護源朝雅、畿内近國の兵を發して之れを撃つ。基度盛時防ぐこと能はずして大敗し。遂に誅戮せらる。日蓮の父貫名次郎重忠、此の謀に與りて若松城に據れり。故に兵亂平定の後、その罪により安房國に流竄せられたり。

但し此の貫名重忠の安房に移住せしにつき異説紛々たり。載せて、年譜攷異にあり。一日親族争所部故、一日與北條時政有隙故、一日黨阿野全盛故、一



曰平氏餘黨故不知孰是とあり。  
 更に日蓮の母系に就いて考ふるに、母は清原氏にして舍人親王五十世の末裔山崎左近從五位兼良の女なり。或はいふ、畠山の族、大野吉清の女、名は梅千代、或は梅菊と。重忠と梅菊との間に五子あり、長を藤太重次、次は某、次は仲三重、仲次は善日、末は藤平重友、これ藤平氏の祖なり。善日は即ち日蓮上人の幼名なり。註畫譜に蓮師姓三國氏云々とあり、蓋し共資の曾祖父共良は少納言たり。この時いかなる故にか三國を以て氏となせるによるならんか。今日蓮の系譜を圖示せば次の如し。

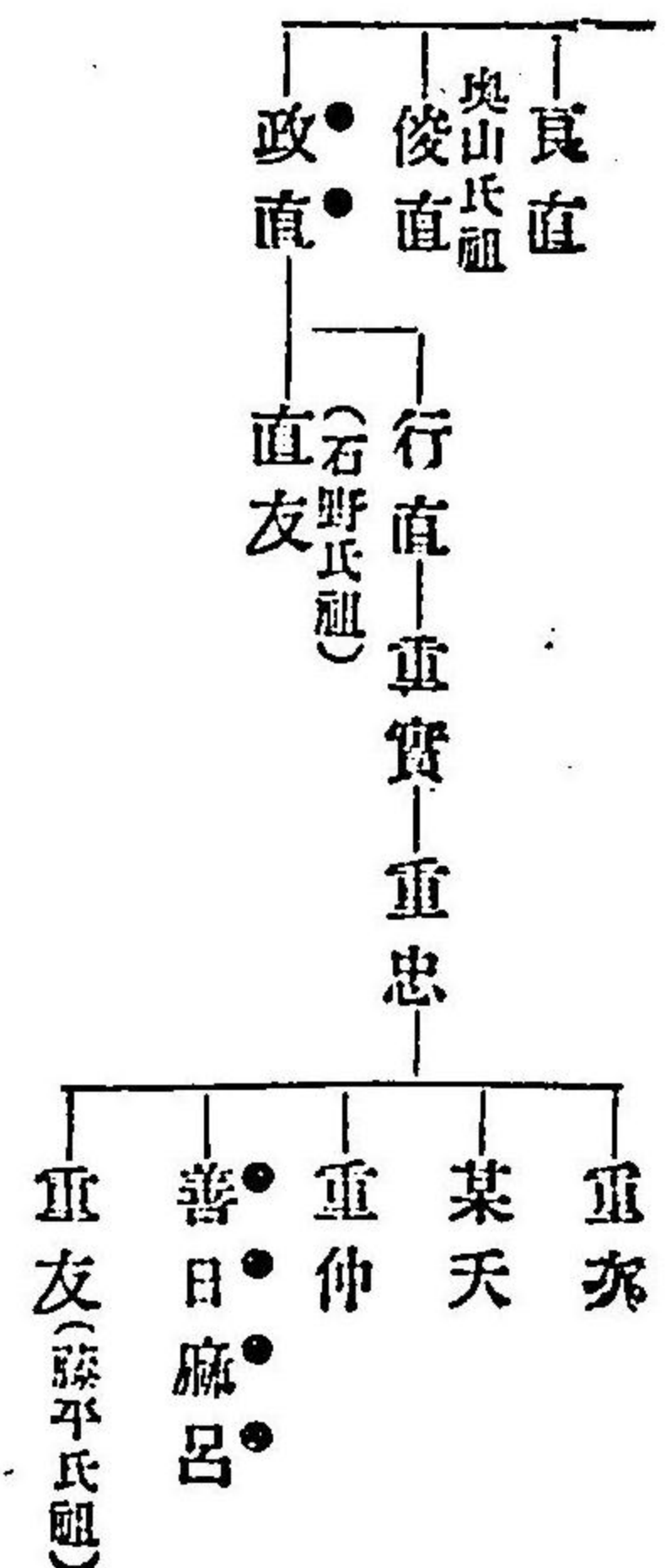


此の如くして

「況んや、日蓮今生には、貧窮下賤の者と生れ」と叫ひしこそ、その大平民の發魄、天地と共に亡ひずと云ふべし。

### 第二節 登山と剃髮

小湊の西北程遠からぬ處に臺密の古刹あり、千光山清澄寺と云ふ。爰に善導密師と呼ぶ臺密の學燈あり。父の次郎重忠、善日磨を教へばやとて天福元年五月十二日歳十二と云ふに、伴ひて清澄寺に登り、名を藥王麻呂(一説には經王麻呂)と更め、内典外典を研究せり。藥王麻呂年十六歳にして學徳一山を歴し、年老の同宿徒弟一人として其の右に出づるものなし。之れに於てか道善





小湊に往き、重忠夫婦に請ふに、藥王麻呂の出家得度のとを以てす。重忠夫婦即時之れを快諾せり。道善欣舞雀躍、藥王麻呂に此の旨を告げ、剃度の進を設けて鬚髮を剃除し、頂相を圓にして、その名を是生、その字を蓮長と號らる。此の藥王麻呂出家年齢につきて四説あり。一に云く十二歳、二に云く十七歳、三に云く十八歳、四に云く十六歳なり。今予は見る所ありて、十六歳説を採れり。蓮長道善房によりて眞言の業を受け、事相教相の蘊奧を極め、入壇密印灌頂悉曇悉く面授に決して漏す所なし。蓮長熟想ひらく、今我れ因縁ありて眞言の教を稟け、大日如來金剛薩埵龍猛龍智金剛智不空慧果鐵塔の相承綿々として今に到る。然れどもその密授に至りては、多く金剛智不空の私語、吾が邦の弘法慈覺更に亦た私語を加へて交々顯密を争ふ。蘇悉地經は金剛手、軍荼利夜叉の爲めにこれを説く。佛説と云ふに、あらず。また菩提心論は或は龍樹の造るといひ、或は不空の作と云ひ、その異説紛々として、信を置くに足るものなし。且つ佛教諸宗各其の旗色を異にし、互に法義の眞偽を争ひ、利益の大を競ふ。これ何事ぞと、密かに釋尊本懷の存するところに迷ひ、之れを道善

に問ふと雖ども、終に能く其の意を満すこと能はず。蓮長の疑惑彌凝りて氷解するに、よしもなし。即ち清澄寺の山頂なる虚空藏菩薩の祠に百日の參籠を企て、以て菩薩の冥助を請はんとして、虚空藏に祈願すること再度に及び、其の後大藏に入りて一切經を閲讀せるに、其の中に無量義經あり、取りて之れを讀むに至りて

「われ先に道場菩提樹下にして、端坐すること六年にて、既に阿耨多羅三藐三菩提を得たり。かくて佛眼を以てこれを見るに、衆生の性欲種々あれは、強ひて正法を説といへど、或は耳に入り、或は入らず、入らざる時は、これ空言なり。故にその時に應じ、種々にして法を説くに、みな方便力を以てす。この間四十餘年、いまだ眞實を顯はさず。この故に衆生得度差別ありて、無上菩提を得ることなし。譬へば水の垢を洗ふが如し。この水あるは井、あるは池、あるは河、あるは江、あるは溪、あるは海、皆悉く水にして、よく垢を洗ふといへども、その水の性に依つて、洗ふ所齊しからず。されば衆生煩惱の垢穢を洗ひ、去



るに及びても亦た斯くの如くなれば、初中後の差別あり。初は中にあらず。中は後にあらず。その説文辭は同じけれど、義に於て各異なり。との文辭に接して、積日の疑雲一時に晴れ。是れより碩學の門をたゞき、佛界の公道を發揮して衆生に示し、迷路を開き、天下の妄想を新にせんと決心し、其の志を以て師の法印に告ぐ。道善法印大に呵つて曰く

〔無量義經はこれ法華經の序分なり。その法華は顯教にして無明の域を出てたるもの、祖を欺き、師を欺いて逆路伽耶陀に墮することなかれ〕

と、逆長の志確乎として動かず。唯たその師資の禮を重んじ、黙々として再び口を開かず。かくて仁治三年、逆長年二十一歳、遂に師の許を得ず。密に清澄寺を出奔して鎌倉に遊學せんとせり。逆長は斯くの如く師の命に背きて出奔し、且つ其の後に至り、全く師授に反き、口を極めて眞言を詆誹して、法門上の敵となりしも、彼れが一生の間個人として道善法印に對して毫も敵意を挟みたることなく、常に自ら諸宗の教義を知り分くること、虚空殿菩薩と本師

道善房の力によると云へり。建治二年、道善の没するや、日蓮身延山にありて之れをさし、即ち「報恩抄」三卷を撰述し、弟子日向、日實の二人を遣して清澄寺に贈れり。今その報恩抄を讀み來れば、何人か日蓮が師に對する師恩の感慨の厚きに敬服せずんばあらず。次に此の「報恩抄」を贈付せるときの書翰を掲げん。

與清澄寺書

無親疎法門ト申ハ心ニ入レヌ人ニハイハヌ事ニテ候ゾ御心得候ヘ、御本尊圖シテ進候此法華經ハ佛ノ在世ヨリモ佛滅ノ後正法ヨリモ像法ヨリモ末法ノ初ニハ次第ニ怨敵強ナルヘキ由ヲタニモ御心得アルナラハ日本國ニ是ヨリ外ニ法華經ノ行者無キヨシハ皆人存知シ候ヌベシ道善御房ノ御死去ノ由去月祖承之自身早々ト參上シ此御房ヲモヤカテツカハスヘキニテ候カ自身ハ内心ニ存セストイヘトモ人々ニハ遁世ノヤウニ見エテ候ヘハ何ニトナク此山ヲ出デス候此御房ハ又内々ノ申候シハ宗論ヤアランヌラント申セシユヘニ十方ニヤカテ經論等ヲ尋シユヘニ國々寺々ヘ人ヲアマ



タツカハシテ候ニ此御房ハスルカノ國ヘツカハシテ當時ヨリ來テ候ヘ又此文ハ随分大事ノ大事トモヲカキテ候ヘ詮ナカラシ人々ニキカセナハアシカリヌヘク候又設サナクトモアマタニナリ候ハ、ヒカサマニモキコエ候ヒナハ御タナコノタメ安穩ナラス候ハンカ御ヘト義淨房ト二人是御房ヲ讀手トメ山ノ高ミ森ノ頂ニテ二三遍又故道善御房ノ御墓ニテ一遍讀セサセ給テハ御房ニ預サセ給テ常ニ御聽聞候ヘ度々ニ成候ナハ心付給事候ナン恐恐謹言

七月二十六日

日蓮花押

清澄御房

與淨顯義淨書

其後ナニ尋モウチタエ不申承候サテハ建治ノ比故道善房聖人ノタメニ二札カキツカハシ奉リ候ヲ山高キ森ニテヨマセ給テ候ヨシ悦入候タトヘハ根フカキトキハ枝葉カレス源ニ水アレハ流カハカス火ハタキギカイレバタエヌ草木ハ大地ナクシテ生長スル事アルヘカラス日蓮法華經ノ行者ト

ナリテ善惡ニツケテ日蓮房トウタハル、此御恩サカラ故師道善房ノ故ニアラスヤ日蓮ハ本草ノ如ク師匠ハ大地ノ如シ彼地涌ノ菩薩ノ上首四人ニマシマス一名上行及至四名安立行菩薩云々末法ニハ上行出世シ給ハハ安立行菩薩モ出現セサセ給ヘキ歟サレハイネハ華果成就スレドモ米ノ精大地ニヲサル故ニヒツチオヒテ二度華果成就スルナリ日蓮法華經ヲ弘ムル功德ハ必ス道善房ノ身ニ歸スベシアラトウトタウトヨキ弟子ヲモツトキハ師モ佛果ニイタリアシキ弟子ヲタハヒヌレハ師弟地獄ニオツトイヘリ師弟相違セバナニ事モ成スヘカラス委クハ又々申ヘク候常ニカタリアハセテ出離生死シテ同心ニ靈山淨土ニテウナツキカタリ給ヘ經ニ云示衆有三毒又現邪見相我弟子如是方便度衆生云々如前々申御心得アルヘク候賢々々

弘安元年戊寅卯月日

日蓮花押

淨顯房

義淨房



## 第四章 修養時代

## 第一節 鎌倉の遊學

蓮長清澄に學ぶこと七年、固より聰明の性なり、騁馬遂に槽檻に伍すべからず、大鵬あに斥鷃の伴ならんや、遂に二十一歳の年、西風北に回つて千光山峯、漸く霜を見るの時、南都北嶺に學ばんとて、清澄寺を出てぬ、これを折伏の雷音を始めて此の堂に起さん門出とは誰か此の時知るべしやは、  
 愜がしき小湊の煙、慕わしき清澄の森、いつしか影は消え失せて上總下總を經、武藏隅田川待乳山のほとりに着けり、見渡せば郊原四方三百里、草秋風に動ひて野寺の鐘聲悲しく、日西山に入て荒野宿るに處無し、偶、見る遙かなる彼方の光一點、即ちたとりて行けば一家あり、こゝに宿を乞ふ。  
 宿に兒あり、佛の木像を以て玩具となし、また主は法華經をもて、破隔紙を繕ひき、蓮長大に驚き問ふに、聖像をもて翫びとなし、聖經をもて隔紙を張ること勿體なきにあらざるやを以てせり、亭主平然として答へらく、我れは淨土

宗の流をくみつゝあるものなり、我が宗に於て聖像となすは阿彌陀佛のみ、聖經といふは三部經のみなりと、蓮長眉をひそめ、俗書だに捨つべからず、況んやこれ佛經にあらずや、小乗と云ひ、大乘と云ひ、等しくこれ佛說なり、先づ往いて淨土の奥義を學はんと、翌日鎌倉に至り、光明寺に入れり、光明寺は淨土の談林にて、能化を良忠と號し、また然阿と呼ぶ、蓮長これに謁し、修行の爲めに來れりと云ふ、良忠諾して其の宗に於て旨とする處の書、撰擇本願念佛集を授けて之れを熟讀せしめたりと云ふ、然れども此の事につき異說あり、即ち良忠が中國より始めて入洛せしは、寶治二年にして、仁治三年即ち蓮長が鎌倉に赴きし年より後るゝこと六年なり、北條經時が建立せる蓮華寺に、北條時頼の請に應じ、良忠の赴きたるを更に之れより三年の後なり、此の時始めて光明寺を改むれば、蓮長鎌倉に入るの時、然阿の此に居るべき理なく、また光明寺のあるべき理なしと云ふ說あり、又た蓮長鎌倉に入りて念佛の法門を大阿なるものに學びたりと云ふ說あれども、大阿の傳明かならず、また鎌倉に大阿あらず、議するに足らずとなす說あり、今略記して參考に供

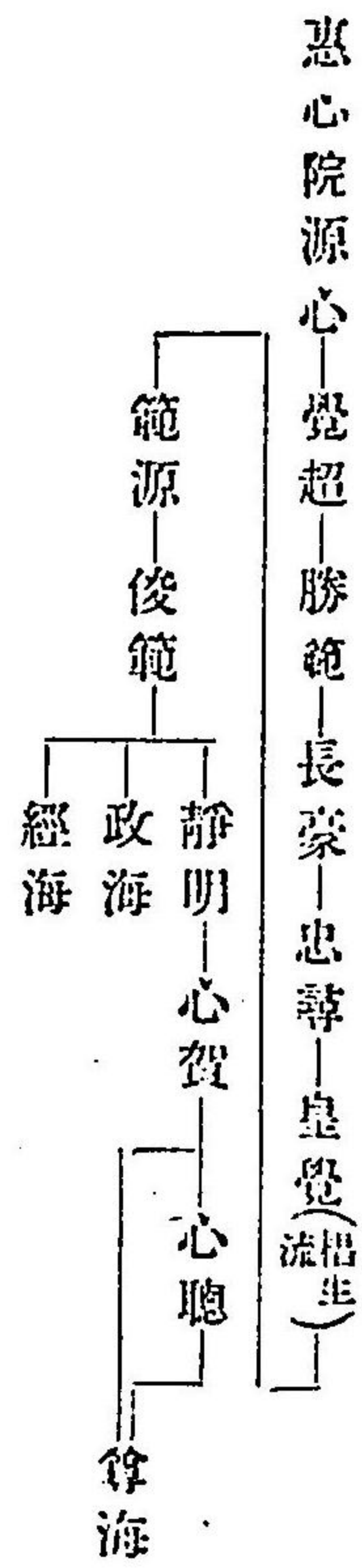


斯くて鎌倉にありて淨土宗を研究すること暫くにして、再び房州に歸り、清澄寺にありて「戒体即身成佛義」を著せり。之れ日蓮上人の最初の著述となす。暑して「清澄山日蓮撰」といふ。一説によれば此の著文永三年なりと、文永三年は仁治三年より二十四年の後なり。又た云く日蓮撰は蓋し寫誤にして、遊長撰とあるべきかと。後また鎌倉に赴きて、叡山の尊海事ありて此の地に來れるに邂逅し、遂に隨ひて叡山に登れり。

### 第二節 叡山の遊學

遊長更に比叡山に登り、天台の蘊奧を學はんとして、寛元元年、二十二歳にして遠く笈を洛陽に負へり。高祖年譜によれば、遊長の叡山に登れるは二十一歳にして仁治三年となせり。されど予は「今統記」に従ひたり。比叡山は延暦年中桓武天皇の勅願によりて傳教大師の草創せる所、印度の靈鷲、支那の天姥と鼎足相並びて有名なる靈地なれば、遊長大に喜び、長く此の靈地に住して、大に佛典を研究せんとして、日夜讀書に餘念なかりき。此の時叡山に六人の

碩徳あり、尊海、心賀、靜明、心聰、經海、政海といひて學徳一世を風靡せり。遊長深く此等の碩學と交を結びて大に信認せらる。後此等碩徳の盡力によりて東塔の圓頓坊に住し、兼ねて横川の淨光院(或は定光院に作る)を管す。此の比叡山の六碩徳は惠心の末流にして所謂相生流なるものなり。其の系統を圖せば次の如し。



寛元二年遊長二十三歳時に一時の講筵ありて、其の講主「法華大日二經同異」の辨を擧げたり。遊長心中大に之れを怪めり。以爲らく、それ法華經は醍醐の極説、大日經は生蘇の權謀、何ぞその同異を論ずべきものならんや。これ當山の開祖傳教大師の意に乖けりとなし。以て尊海に問ふ。尊海告げて曰く否也。在昔慈覺大師入唐して金胎兩部の大法を傳へ、細かに印契を受けてより、吾



山三觀三密を旨とし、車の輪の如く、鳥の翼の如し、傳教大師は顯教の妙味を施し、六宗の鹿食を賑はすといへども、秘密醍醐の説に至りては、暇なくして止みたり、顯密俱に兼て祖意大成なるは、唯だ自覺の功なりと、即ち東台兩密の同異を説き、金剛頂三蘇悉地三經の疏を出して之れを示す、遊長これを取りて讀むに書中盡く傳教の素意に反せり。

〔金剛頂經疏〕にいはく、

所言頂者是最勝義、又尊上義、謂此金剛教、於諸大乘法中、最勝無過上故、以頂名之、故雲阿闍梨釋云、金剛頂者如人之身、頂者如人之身、頂最爲勝、此教於一切大乘法中、最爲尊上、故名金剛頂也、又金剛頂者、不是喻、名一切衆生心法界中、從本具足、金剛堅固最尊義、則於理體、諸法興起、故法華經云、是法住法位、今正顯說此秘密理、故云金剛頂也、又如金剛不可壞、此經亦爾、不等外道邪魔等之所殞壞、一切法中極實法故、如金剛寶中之寶、此經亦然、諸經法中最爲第一、三世如來譬中寶故、如金剛戰具中勝、此經於諸經中、而爲殊勝、若覺此經不歷劫數破煩惱賊、早成佛故也、

又九蘇悉地經疏に曰く、

問、何等名爲顯教耶、答、諸三乘教、是爲顯教、問、何故彼三乘教以爲顯教、答、未說理事俱密故也、問、所言理事俱密者、趣如何、答、世俗勝義、圓融不二、是爲理密、若三世如來身語意密、是爲事密、問、華嚴維摩、般若、法華等諸大乘教、於此顯密、何等攝之耶、答、如華嚴維摩、摩訶等諸大乘教、皆是密教也、問、若如云、皆是密者、與今所立真言秘密有何等異、答、彼華嚴等經、雖俱爲密、而未盡如來秘密之旨、故與今所立真言教別、假令雖說少密言等、未爲究竟盡如來秘密之意、今所立毘盧遮那金剛頂等經、咸皆究竟盡如來事理俱密之意、是故爲別也。

慈覺大師の言概ね以上の如し、然るに傳教大師の言を見るに、云はく、

謹案普賢菩薩勸發品曰、爾時普賢菩薩白佛言、世尊、於後五百歲濁惡世中、其有受此經典者、我當守護、當知、法華真實經、於後五百歲必應流傳也、

又云、

亦復與其陀羅尼咒、得此陀羅尼故、無有非人能破壞者、當知、爲護法華經、真言與持者自身常守護、他宗所依經、都無此勸發、天臺法華宗具有此勸發妙法、真



言他經所不說、

又云、

我日本國、圓機既熟、圓教遂興、正像稍過已、未法太有近、法華一乘機今正是其時、

其の他語代則像終、未初尋地、則唐東、羯西、原人則五濁之生、鬪諍之時、經云、僧多怨嫉、況滅度後、此言其有以也、又云、他宗所依經、諸經之王等、有一兩句文、當分爲王故、不名轉輪聖王、已顯眞實法華經、知是轉輪聖王也、又云、他宗所依經、未出九易局、天臺法華宗、惟居六難頂、誰有智者、不分別經文哉、淺易、深難、釋迦所判、去淺就深、丈夫心、又依憑佛說、莫信口傳、又云、凡住持佛法、有智丈夫、誠須知、唯自宗義、而若有邪義、指示後學、不可誑惑、雖他宗義、若有正義、取用可傳、此則智人也、又云、藥王、今告汝、我所說諸經、而於此經、而於此經中、法華最第一、當知釋迦世尊立宗之言、法華爲極金口、校量深可信哉、又云、法相宗人、屈法志華義、令歸唯識、雖贊法華經、還死法華經心也、

之れによれば、傳教大師は唯法華一乘を最上乘となす。然るに慈覺師資の義

に違ひ、反りて顯密一致を以て大に相承の旨を亂る。眞に墮獄の罪人なりと、蓮長之れより密かに傳教大師の素意に基き、慈覺智證の異流を排し、天臺復古の意頗る盛なり。蓮長密に其の旨を尊海に談るに、尊海眉を擧めて曰く、今この一山慈覺大師の末徒多し。敢て口外する勿れと、私かに其の藏する秘書を與へて之れを讀ましむ。蓮長快々として樂まず。將に去らんとせしも、尊海強いて留めければ、其の志に絆されて、復た暫く足を駐めたり。

### 第三節 南都の遊學

寛元四年蓮長年二十五歳、三塔の經疏既に讀了しければ、是れより園城寺、江州三井寺に往いて、智證大師の家風を問はんとして、叡山を下りて三井寺に入り、その奥藏を探れり。留ること暫くにして去れり。此の時宋國より歸朝の僧道元あり。教外別傳の宗を傳へて深草にあり。曹洞宗を唱へたり。又云、圓爾も宋より歸り、稻荷山の傍に住みて、臨濟宗を唱へたり。蓮長二高僧に謁して教を受け、その後更に去つて泉涌寺に入れり。此の寺は俊苜の舊跡にして、唐地將來の書籍多し。蓮長こゝに入りて研學し、更に南都の七寺に遊學して佛



教の奥義を極めんとし、先づ興福寺に入れり。南都の七大寺とは、一には添上郡の東大寺にして三論華嚴を以て本となす。二には同郡の興福寺にして法相宗なり。三には同郡の元興寺にして三論宗なり。四には同郡の大安寺。五には同郡の西大寺にして、内に密教を持し、外に律宗を興し、旁唯識に涉れり。六には平群郡の法隆寺にして三論の微旨を受け、盛に空宗を弘む。七には添下郡の薬師寺なり。蓮長此等の寺に入りて其の教旨を研究せしも未だ以て意を満すに足るものなかりき。之れより更に紀伊の國高野山に登りて眞言の奥義を極めんとして赴けり。一冬をその山に送りて、後更に東寺に遊び、法華堂の別當眞廣に昵み、これに就いて東寺仁和寺の藏書を一閱せり。また眞廣に紹介せられて冷泉藤爲家卿に謁して敷島の道を學べり。かくて建長元年二十八歳にして再び北嶺に歸り、定光院に住して摩訶止觀の訣を稟けたり。

#### 第四節 伊勢の宗廟に詣つ

斯くせる中、蓮長一たび本國に歸り、父母師友を訪づれ、然る後に身命を法華經に奉ぜん」と志を決し、それより山王の宮に詣て、傳教大師の廟を拜し、且つ

尊海に別を告ぐるに、尊海大にその訣別を惜みしも、素志捨つべくもあらざりければ、遂に山を下りて洛に出てしに、五條の橋邊に天王寺屋と云ふものあり。其の家主淨本なるもの蓮長の人格を見て、いたく之れを尊敬せり。蓮長此の家に滯留して年を越え、建長二年の春を迎へたり。蓮長年二十九歳なり。蓮長淨本の紹介によりて四天王寺に到り、聖德太子の舊記を索めて日夜怠なく閱讀せり。未より雄山八幡宮に詣し、木幡山を過ぎ、琵琶湖の沿岸に出てたり。これより道を枉けて勢州に至り、紀年録によれば伊勢に詣てしは建長五年なりと。但し統記には二年となせり。天照太神の廟を拜す。蓮長間の山に宿すること百日、沐浴盥漱して殿に上り、發誓弘經し告げていはく

昔世尊靈山に法を説き、皆私の見を以て、世尊の正法を蔑にす。蓮長不肖の身たりと雖ども、大誓願を發して法華の正法立んと欲す。この神は世尊に先つこと百萬餘歳既に佛屬を稟給ふ。今この正法の行者に力を戮して、弘通なさしめ給へ。

と、一心に祈念せり



## 第五節 蓮長の歸郷

蓮長、京都より伊勢に出て大廟に詣て、後故山小湊に着けり。蓮長唯今歸國せりと聲に驚き、父の次郎、母梅菊まろぶが如く出て來り、其の恙なき顔を見るより流す嬉しの涙、袂ひぼりて草鞋とき洗足すゝめて、旅の疲れをいたわりたり。此の夜は旅の物語、兩親は一々耳に聞くことに眼は濕ふいたはりの涙知らず、蓮長此の時の心地、一抹の愁雲徂徠せしものあらん。

蓮長は父に伴はれて先づ師の道善を訪へり。道善は恙なき顔に喜びの涙、旅の辛苦を思ひやり、修行にも程こそあれ、老いたる我に久しく物を思はする腹立たしさと、呵るも弟子を思ふの情、たま／＼佛法の語に至れば、蓮長は只だ高野の山高かりき、比叡の峰の寒かりしと語をそらにしたりけり。あゝ蓮長、此の時や、腸寸斷の思ひ、無くんば、あらざるなり。法兄弟の圓密、淨顯、義淨、あなき維僧、稚兒達まで、かはる／＼來て無事を祝す。道善は手の舞ひ、足の踏む所を知らず、庫裏の僧を占換んで、蓮長始め院内の者どもに饗應あれと、指揮のまに／＼膳は出て、ね豆腐の羹、黒煮の蹄、雁煮椎茸、差酢の和布、飯後に出

てぬ菓子、の巻餅、此の山寺の最大饗應、之れに箸乗る蓮長の心、嗚呼心爰にあらざれば、食へども味を知らず、胸に滿てる千尺の涙、之れを饗應す師の御坊、之れと並べる父の次郎、知るべきにやは、蓮長の望みは此の山海の美食にあらざりしことを。

翌日暇を乞うて小湊に歸る、父重忠は席を進め、

「昨日師の御坊の云はるゝには、我れ既に耳順を超えなれば、程なく寺を蓮長に譲るべし。さらば我身の幸福、御身達も老いのたよりを得たるものと語り給ひしを聞きたりき。これまで十數年の長旅途、今日は風邪にも冒されずや、今夜は腹さへいためすやと、朝に門を明けては汝を思ひ、夕に轉延べては汝を懐ふ。日の出でざる日ありとも、汝を思はぬ日とはなく、鳥の啼かざる時ありとも、汝をいたまぬ時とは無し。蓮長、汝よ、今より心をうちつけ、彼の清澄の主となり、人も仰はゞその身の出生、我々夫婦も世の人に善き兒持ちたり幸福者よと云はるべし。さこそあらずや。」

と問ひたりけり。蓮長良時言語無く、叩頭只だ時に咳嗽の涙と共に顔面を徂



徠するのみ。

嗚呼、我子の出生を見るは皆父母の情なり。十数年の最愛の兒をして知らぬ異郷に、苦辛を嘗ましむ。豈に父母の志ならんや。漸くにして歸り來れば誰か此の言をなさざるものぞ。況んや小湊塞村一小漁夫の兒進んで千光山清澄寺の法主たらんとするに於てをや。

然れども蓮長の望みは一身の榮花にあらざりしなり。此の混亂せる佛法の波を回さんとするなり。噫、父母の言に従て孝養を盡さんか。此の混亂せる日本佛教をいかんせん。嗚呼師の言に従ひて清澄の法主たらんか。此の墮落せる日本の同胞を奈何せん。

〔善につけ、惡につけ、法華經を捨つるは地獄の業なるべし。大願を立てん、日本國の位をゆづらん。法華經をすて、觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずんば用ひじとなり。其外の大難風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならん。我れ日本の眼目とならん。我れ日本の大船とならん等とちか

ひし願ひやぶるべからず。

(開目鈔)

"Though they gave the sun in my right hand and moon in my left to bring me back from my under-taking, get will I not pause till the Lord carry my course to victory or till I die for it."

(たとひ右の手に太陽を與へ、左の手に月を與へて、予の企てを止めんとすとも、予は止めざるべし。上帝が予を勝利の道に致すか、さらずばそが爲めに死するまで)

とはアラヒヤの大宗教家マハメットがその伯父アブタリブに止められし時、その之れに答へたるの言辭なりき。東西一轍、千古軌を同ふす。蓮長、此時の涙、あに廣宣、流布の源ならざらんや。嗚呼、蓮長が此の時の情、知るものはたゞ小湊の巖を嚙む。太平洋の破れ波か、抑も清澄の森に泣く。東海の鹽風か。

### 第六節 鎌倉再度の遊學

蓮長故郷を去るや、再び鎌倉に遊べり。鎌倉は將軍の柳營の存する所、天下兵



馬の權集めてこゝにあり時の將軍は藤原頼嗣、執權は北條相模守時頼なり。時頼は聰明敏智能く將軍を補佐せり。故に海内の綱紀大に治まれり。逆長時頼に謁して大に説く所あらんとし。竊に機を窺へり。時に鎌倉に比企大學三郎能本なるものありて、博聞達識の譽一世に高かりき。逆長先づ此の人につきて儒教を研究せんとし。能本が門に入りて其の教を乞へり。能本其の天才なるを知り、大に喜び其の藏むる所の書籍、聖賢の謨典、諸子百家の書類に至るまで其の閱讀を許せり。逆長大に喜び、日を以て夜につぎて此等の圖書を熟讀し、斯くて逆長外典の奥義を極めたり。能本また深く其の鬼才に驚き、大に之れを尊敬し。逆長について佛教の眞理を學び、大に之れを信受するに至れり。

## 第五章 開教時代

### 第一節 清澄山の獅子吼

「如是我聞の上の妙法蓮華經の五字は即ち一部八卷の肝心なり」(報恩鈔)

「妙法蓮華經と申すは法華經の中の肝心、人の神の如し」(上野殿御返事)

「法華經の題目は一切經の神、一切經の眼目なり」(曾我殿御返事)

「華嚴經は八十卷、阿含經は數百卷、大集方等數千卷、大品般若六百卷、涅槃經四十卷、乃至月氏龍宮天上十方世界の大微塵の一切經は妙法蓮華經の所從なり」(内房女房御返事)

「法華一部の功德は只妙法五字の内に籠れり」(聖恩問答鈔)

「南無妙法蓮華經の題目の内には一部八卷二十八品、六万九千三百八十四の文字も漏れずかけず納め候」(六難九易鈔)

「所詮壽量品の肝心、妙法蓮華經こそ十方三世の諸佛の母にて御座候」

(壽量品得意鈔)



佛滅後二千二百〇一年、建長五年四月廿八日、曉鐘梵音を清澄の空に響かし、朝鴉妙聲を千光の天に告ぐるの時、東海的一天、千光山頂の一角、太平洋上朝、嗽燦々として水天悉く紅なるの處、爰に一大獅子吼は起りたり、般々たる其聲、天爲めに震ひ、蕪々たる其音、海爲めに動く、

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

\* \* \* \* \*

「日蓮となる事、自解佛乘とも云つべし、かやうに申せば、利口げに聞ゆれども、道理のさすところさもあらん、經に云く、日月の光明の能く諸の幽冥

を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅すと、此文の心よくよく案じさせ給へ、斯人行世間の五の文字は上行菩薩末法の始の五百年に出現して、南無妙法蓮華經の七字の光明を指し出して、無明煩惱の闇をてらすべしと云事也。」

嗚呼、獅子一たび吼へて、百獸皆な伏す、爰に聖日蓮は生れたり、是れぞ日蓮宗、大法開闢の活式なる、あはれ、二十有一年前、漁夫の兒、善日鷹を迎へたる、旭の森、非情の松、いかにこれをや聞きつらん、

此日午の刻、清澄の堂には老幼男女を以て満たされたり、これを遊長坊が説教を聞かんとて集り來りしなり、此の聽衆の中に當郡の地頭東條左工門景信、若侍下僕を卒る、十數年學に力を研きたる遊長坊、いかなる尊き説教をなすにやと忍やかに來れるあり、

察々たる太鼓の音、般々たる梵鐘の聲、婆羅婆利多耶の眞言、南無阿彌陀佛の念佛、之れに伴はれて、遊長の日蓮は除々として高座に登り、燒香散花、四弘



誓願、剛曉たる御聲に法華經第六の卷を讀み上げたり。温乎たる顔、朗乎たる聲、靜かに説かせらく、

「我れ年來、一切經を見直り、廣く諸宗を學びたり。八宗見ざるなく、十宗聞せざる無し。大集月藏經の第九の卷を見るに釋尊入滅してより五百年の間を解脱の時と云ひ、次の五百年を禪定の時といひ、此千年を正法と云ふ。又次の時を讀誦の時といひ、次の五百年を造塔の時と云ふ。此千年を像法と云ふ。此二千年を終りて後五百年を白法隱没の時と云ふ。是れより一万年を末法と云ふ。今末法に入つて二百年、當生の衆生は本末不善とて本より不耕不耘種を植えざる赤凡夫也。法華經方便品に曰く、未ダ曾テ汝等ニ成佛ヲ得ベキノ道ヲ説カズ。未ダ曾テ説カザル所以ハ觀時ノ未ダ至ラザルガ故ナリ。今ハ正ニ是レ其時ナリ。決定シテ大乘説ク」と。法華經法師品に曰く「我が説ク所ノ諸經、此經ノ中ニ於テ法華最第一ナリ」と。法華經一之卷に曰く「十方佛土ノ中、唯ダ一乘ノ法ノミ有テニモ無ク亦タ三モ無シ」と。觀無量壽經に曰く「佛眼ヲ以テ一切ノ諸法ヲ觀ルニ宣説スベカラズ。所以何ト

ナレハ諸ノ衆生ハ情欲同シカラズ、性欲同シカラザルガ故ニ種々ニ法ヲ説ク。方便力ヲ以テノ故ナリ。四十餘年ハ未ダ眞實ヲ顯サズ」と。今や天下八宗九宗あれども皆な方便の教にして佛の眞實の教にあらざるなり。我れ二十六より三十二に至るまで二十三ヶ年の間、鎌倉、京、叡山、園城寺、高野、天王寺を経て俱舍、成實、律、法相、三論、華嚴、眞言、是等の諸宗を研めたるに皆な世尊本懷の教にあらず。偶々天台のあれば今や眞言と混じて其眞を滅せり。噫、末法の衆生は何の處にか成佛を得べし。然るに法然は撰擇集を筆りて曰く「諸行ハ機ニ非ズ時ヲ失ヘリ。念佛往生ハ機ニ當テ時ヲ得タリ。感應豈ニ唐捐ナランヤ。當ニ知ルヘシ。隨他ノ前ニハ暫ク定散ノ門ヲ開クト雖モ隨自ノ後ニハ遠テ定散ノ門ヲ閉ツ。一タビ開テ以後永ク不閉ハ唯タ是レ念佛ノ一門ナリ。彌陀ノ本願釋尊ノ付囑意ハ此ニ在リ」と。又曰く「夫レ速ニ生死ヲ離レント欲セバ二種ノ勝法ノ中ニ且ク聖道門ヲ開イテ撰ラント淨土門ニ入レ。淨土門ニ入ラント欲セバ正雜二行ノ中ニ且ク諸ノ雜行ヲ抛テ選テ正行ニ歸スベシ」と。



法華經譬諭品に曰く

若し人有テ信セズ此經を毀謗セバ則チ一切世間ノ佛種ヲ斷ズ其人命終  
テ阿鼻獄ニ入ル且ツ是レ一切劫盡キテ更ニ生ズ是ノ如ク展轉シテ無數  
劫ニ至ル

とされば念佛は無間地獄の業因なり方便の念佛を信じて眞實の法華を  
信ぜざれば無間地獄に墮つべきなり嘉祿三年十月十日參議範輔武藏守  
殿永尊豎者の狀に曰く

「此十一日大衆會議シテ曰ク法然房ノ造ル所ノ撰擇集ハ謗法ノ書ナリ天  
下止メ置クベカラズ仍テ在々所々持スル所ノ印版大講堂ニ取上ゲ三世  
ノ佛恩ヲ報ズルガ爲メニ之ヲ燒失セシメ畢ンヌ」  
又云く

法然上人ノ墓所感神院ノ大神人ニ仰セ付ケ破卻セシメ畢ンヌ  
と嘉祿三年十月十五日隆眞法橋の申に云く

「專修念佛ハ亡國ノ本旨タルベキノ文理之レ有リ」

と山門より雲居寺に送るの狀に云く

「邪師源空存在ノ間永ク罪條ニ沈ス滅後ノ今且ツ死骨ヲ刻ヌ其邪類住  
違安樂死ヲ原野ニ賜ヒ成覺薩生刑ヲ遠流ニ蒙ル」

と嗚呼世法の方に云へば違教をなす者帝王の勅勘を蒙り今に御赦免の  
天氣之れ無し心ある臣下萬民誰人か彼の宗に於いて布施供養を展ぶべ  
きや佛法の方に云へば正法誹謗の罪人たり無間地獄の業類なり何輩か  
念佛門に於いて恭敬禮拜を致すべけんや

又た榮西は興禪護國論を著して曰く此禪宗ハ文字ヲ立テズ教外別傳ナ  
リ教文ニ滯ラズ只ダ心印ニ傳フ文字ヲ離レ言語ヲ亡シ直チニ心源ヲ指  
シテ以テ成佛セシムと

凡そ世に流布の教三種を立つ正儒教共に二十七種あり二は道教此に二  
十五家あり三に十二分教天台宗にては四教八教を立つるなり此等を教  
外と立つるか醫師の法には本道の外を外經師と云ふ人間の言には姓の  
つゝがざるを外戚といふ佛教に經論にはなれたるをば外道といふ涅槃



經に曰く

「若シ佛ノ所説ニ順ハザルモノアレバ、當ニ知ルベシ是ノ人ハ是レ魔ノ眷屬ナリ。」

と。大智度論に曰く

「諸法實相ヲ除キ除ノ殘レル一切ノ法ハ盡ク名ケテ魔トナス。」

且つや眞言三部經は大日如來の説か、大日如來の説と云はゞ大日如來の父母と生ぜし所と死せし所とを悉く沙汰し問ふべし。一句一偈も大日如來の父母無し、説所なし、生死の所無し、有名無實の大日如來也。眞言宗は天竺より之れ無し、開元の始め善無畏三藏、不空三藏等天臺大師已證の一念三千の法門を盗み大日經に入れて之を立て眞言宗と號す。然るに弘法は法華經を第三と下し大日經を秘密となし、大日を偏尊して毘盧遮那遍一切處の釋迦佛を誹り等雨法雨の經と本國土の本行を忘る。されば眞言は淨佛國土を亡すものなり。

經に曰く、此經ハ持チ難シ若シ習クモ持ツモノハ我レ即チ歡喜ス。諸佛モ亦タ然リ、是ノ如キノ人ハ諸佛ノ歎ズル所ナリ。是レ則チ勇猛ナリ。是レ則チ精進ナリ。是レヲ戒ヲ持ツト名ク」と。然るに律は二百五十戒、三百戒を算へ持して此大乘の妙戒を持たず。七十一部四百九十六卷、皆な小乗の戒にして成佛の道にあらず。經に曰く「我が壽命ヲ説クヲ聞イテ乃至一念モ信ゼバ其福ヤ彼レニ過ク」と。されば八十万億劫の間、修するより法華壽量品を聞いて一念も信ぜざる者は福無量なり。經に曰く「妙法經力、即身成佛」と。さるに律は小乗の戒に偏して法華究竟常住の本國土妙を棄て娑婆即寂光の淨佛國土を抛つ。されば律は本國土妙の賊なり。

是を以て之を觀れば念佛は無間の業因、禪は天魔の所業、眞言は亡國の教律は國賊の經、これら諸宗は無得道なり。法華一人成佛すべし。

正直に方便を捨て、但た法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱ふる人は煩惱業苦の三道、法身般若解脱の三諦と轉じ三觀三諦即一心に顯れ其人所住の處常寂光土也。一度も妙法蓮華經と唱ふれば一切の佛一切の法一切



の菩薩一切の聲聞一切の梵王帝釋閻魔日月衆星天神地神乃至地獄餓鬼畜生修羅人天一切衆生の心中の佛性を唯一音に喚び顯し奉る功無量無邊なり我が已心の妙法蓮華經を本尊と崇め奉つて我が已心中の佛性南無妙法蓮華經と喚び呼れて顯れ給ふ處を佛とは云ふなり譬へば籠の中の鳥啼けば空飛ぶ鳥の呼ばれて集るが如し空飛ぶ鳥の集れば籠の中の鳥も出てんとするが如し口に妙法を呼び奉れば我身の佛性も呼ばれて必ず顯れ給ふ梵王帝釋の佛性は呼ばれて我等を守り給ふ佛菩薩の佛性は呼ばれて悦び給ふされば若し暫くも持つ者は我れ則ち歡喜す諸佛亦然なり」と説き給ふは此心なりされば三世の諸佛も妙法蓮華經の五字を以て成り給ひしなり三世諸佛出世の本懷一切衆生皆成佛道の妙法と云ふはこれなり是等の趣を能々心得て佛に成る道には我慢偏執の心なく南無妙法蓮華經と唱へ奉るべきものなり南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經とこれぞ本化弘通の基末法下種の始めなる。

嗚呼、晴天の霹靂、静海の激浪、天爲めに裂け、地爲めに破る、憤然たるものあり、呆然たるものあり、笑ふものあり、悲むものあり、狂と罵るものあり、愚と叫ぶものあり、喧々轟々、拳鋒空に飛び、塵煙堂に充つ、地頭の左衛門景信、佛然として道善坊の前に來り、逆長の無禮、此山に置くこそ寺門の恥辱、地頭の不念、その罪や斯よりも重し、然れども此の靈場を汚すの恐れあり、我れ之れを提げ歸らんと、道善坊且つ泣き且つ怖く、惴々焉として言を切つて曰く、公の憤怒固より其の處なるべし、されど逆長は狂氣なり、狂氣の逆長を提げ歸るも何にかせん、願くはこのまゝ、此の山に置かしめ給へ、血治り氣静りたる後、能く云ひ懲すべし、逆長は全く狂氣したるなり、過讀の書、過勞の學、之れに狂氣したるなり、乞ふ乞ふ正氣に回りたる時に説き諭さんと、老眼涙に濕ひて聲猶ほ濫し、漸くにして地頭景信もその言を容れ、不平滿々、清澄の山を下りたり。

道善坊は逆長を招きよせ、老淚拭ひて申すやう。

十二の夏より手に育て、末頼母しき弟子なりと年月待ちしも仇となり、此



寺をさへ譲るべき心地も、今や朽ち果てぬ誰かは東條左衛門殿の刀の錆にせばやとて、此長年を願ひしぞ。今日の心を改めて本の逆長に歸るべし。世に學問狂と云ふものあり、汝もそれにあらざるや。もし正氣にてありもしてなち改めずとあらばせんすべなし。此山には一時とても置くこと叶はず。何國になりとも行き去るべし。只だ願ふは左衛門殿の目にかゝらぬやう心につけて参るべし。とくと心を静め考へて此戒めに悔ひもせば疾くく此坊に歸り來よ。

と諄々説き諭す。聞く逆長の胸のうち、只だ紅涙の迸るを覺ゆるのみ。日は既に斜に入りぬ。千光の峯に歸す村雀、打つ入相の五つの鐘、殘る一つを跡にして、逆長の日遣は恨々として清澄の山を下らんとす。偶々足音聳然、後に起る。願れば法兄の淨願義淨なり。云はく「地頭の怒り尙ほ解けず、此の半腹の辻堂に伏手あり。此を下りては最も危し。我等能き處こそ知れ。乞ふ之に來れ」と。時に暮雲蒼然として起り、怪鳥一聲、清澄の山更に幽なり。

## 第二節 華房の説法

此の郷の地頭も念佛者なり。故に一字の彌陀堂を造營し、開堂供養をなさんとせしも、邊鄙の地導師に立つべき師なし。逆長が南都高野に學びたる碩學なるをさし、その堂供養の導師たらんことを望めり。逆長之れを諾し、その講席にすゝみて曰く

釋迦一代の説法大に分つて二となす。華嚴阿含、方等般若の四十余年の經々は、權經とて時を待つまの權の方便。又た後八年の法華經こそ、如來出世の一大事。これを眞實經と名づくるなり。其は私の義にあらざ。四十二年の説法終り、さて佛の宜ふやう。これまで種々に説法せしは皆方便にして、未だ眞實を顯さずと、さしきつて斷り給ひたる御經はこれなりけりと、無量義經、說法華品を取りいで、未顯眞實とある。其の文をさし示し、其の上彌陀は西方十萬億土他方の佛に在すなる。此の土有縁の釋迦世尊、法華經第二の卷に今此の三界は皆我が有なり。其の中の衆生は悉く我が子なりとあるものを、我が親を捨て他人を尊むを道といふべきか。されはこそ念佛等の御經はあさましくも



四十二年のうち方等部の經なれば、名あつて實なき極樂往生願むかひなき阿彌陀佛、その理も譯ずして念佛開祖の法然御坊煙の様なる阿彌陀佛を捉へ、本佛釋迦をふり捨てよと、人を惑はす地獄の罪業、たとへは家に飼れし狗子の下男奴僕に尾を揺つて、主人を見ては却つて吼ゆる、賤きに狎れ、尊を惡む狗の眞似する諸宗の元祖、この事を天台大師は狗作務に狎れたりと釋し玉ひしぞ。

と説けり、こゝに於て檀越怒り、將に害を加へんとす。適、救ふ者ありて脱れたり。蓮長此の法難を遁れ、これより鎌倉に立ちいて彼の地に於て弘法せんと、心決して小湊に至り、其の志を述べて別離の情に及ぶ。父母聞いて別を惜み、吾等稍に年老ひて再會の期も計り難し、抑も子が志操を觀するに、嚮にもいへし如く、吾子ながら實は大法の王子なり、吾等もまた宗を改め、今より法華經に隨飯せんと、蓮長聞いて大に歡び、久遠世尊本化菩薩を勸請し奉り、妙經を擎け持つて父母の頂に加へ、受持の文を唱ふること三遍、これ本門受戒の始めなり、法號を立て父は妙日、母は妙蓮と呼べり、蓮長之れより父母の法

名の下一字宛をとりて、自ら日蓮と改め、これより尊無過上の立行を開き、佛勅の如く此の法華經を三千界に流布せんとして先づ鎌倉にむかへり。

### 第三節 鎌倉の説法

日蓮鎌倉につき、名越の松葉谷に草庵を結ひ、暫くこゝに住せり、時に華嚴宗の明慧なるものあり、破邪輪三卷を造り、専ら法然が念佛集を折く、その筆力勇猛なり、法然を指して法滅の張本、佛法の怨敵、また狂亂大賊となせり、日蓮これを読み、奇なる哉、今の世にまたかゝる人あり、然れどもこの明慧もまた本門の大乘を知らず、故に之れも亦た五十歩、百歩の論のみと、即ち筆を採つて之れを破せり、守護國家論即ちこれなり、紀年録には「守護國家論」の製作を以て正元元年即ち日蓮三十八歳の時となせり、参考の爲に記す。かくて日蓮社司大伴に紹介を求め、鶴か岡の經藏に入りて經を閲讀せり、此の經藏は建曆元年十月十九日實朝將軍永福寺に於て供養ありし、宋本開元の目錄五千四十八卷の藏經なり。

當時鎌倉は天下の政權のある所、佛法昌盛の地なり、故に日蓮の法敵もまた



従つて多し。先づ光明寺に然阿あり。極樂寺に良觀あり。建長寺に道隆あり。大佛寺に隆觀あつて其の勢泰然として動かすべからず。然れども嚴乎たる日蓮豈に之れを恐れんや。即ち南無妙法蓮華經の七字を高唱せり。夫れよりますます勇猛に大音聲を以て四方に告ぐるに、念佛は無間地獄の業、禪は天魔波旬の徒、眞言は國を亡し、また身を衰ふの邪法なり。律宗は國色の賊、嗚呼無智の豎子この語を信じ、早く念佛を捨て、邪禪を除き、印契を禁じ、戒律を止めよ。我れはこれ如來の使、無上甚深の妙法を説く。この妙法の功力にあける、久遠如來の護持する所、三世諸佛の守護する所、多寶如來の證明する所、上行菩薩の傳來する所、本地與縁の妙法蓮華經。一たびこれを唱ふるときは、成佛の種子を得べく。一たびこれを信するときは、元品無明を斷すべし。今この大法を用ゐずして、後悔なす勿れと、頻りに之れを唱導せり。之れに於て工藤左近吉隆、四條金吾頼基、進士太郎善春、印東氏これをさし、其の説法を尊信し來りて發めて檀越となれり。紀年録によれば四條頼基、進士善春、工藤吉隆等の來りて檀越となりしを、康元元年日蓮三十五歳の時となせり。

此の時一人の寒僧ありて日蓮の草庵を訪へり。日蓮之れを引見するに寒僧三禮して曰く

「我れは叡山に修學なす成辨といふ未熟の僧なり。久しく彼の山に在學して學びたる天台傳教兩大師の書類をもつて、三塔の學者に論談するに法門さらに相合はず。尙ほ弘く其の義理を尋ねしに、慈覺大師は傳教の法弟にてありながら、還つて其の法流を亂したる法敵なりと見定めてその不審を學頭につげしかば、其許は逆長か弟子にはあらぬやと問はれて、其の辨へず。その逆長とはいかなる人ぞと尋ねしかば、これぞ近き頃房州より來りて此の山に學問せしが、慈覺大師を佛敵法敵と罵るゆゑ、そは傳教を知つて未だ慈覺を知らぬなりと言諭しても心解けず。そのまゝ山を退きたり。御坊の問はるゝ處能く其の逆長に似たるはい聞きも嬉しく、その人は何國にありやと尋ねしに、無動寺の尊海といへる僧、その席にありて逆長こそ國にかへり。近き頃は名を日蓮と改めて、鎌倉に見えたれど、風の便にさしけるとさ



し示されて嬉しくも其の師に値は、我が胸の月に限なす雲霧も晴れずやはとて山を下り漸くこゝに尋ね得し」と。

其の真心の喜びは、云はねど色に見えにける。日蓮大に喜び、我が同志を得たりとて、日夜其の側を離さず、其の疑難の條々に一々解釋を與へて教導怠りなかりき。成辨日ならずして本化の宗流を識得し、本門の大戒を受け、改めて法弟となり、其の父の名の祐昭の昭字に日蓮の一字を與へて日昭と號せり。實に建長六年なり。日蓮鎌倉に於てかゝる學匠の法弟を得たるは百万の將軍を得たるより勝れり。日蓮日昭に對つて曰く

「子は我が弟子ながらも我よりひとつ齡たかし、今日本國中に充滿たる念佛眞言禪の諸宗、この諸經中王の法華經の勅命に背き、方便下劣の分際を忘れ、法華の利益を奪はんとす。我れ是より忠勤を抽んで征伐に取かゝり、其の權門の諸宗を退治し、一天四海みな妙法の民となさんとす。然はあれと敵は多勢、我れは唯一人なり。身命を期とすると、も、鷄子をもつて磐石にうち當るより、猶危し。若し我れ討死をもなす

あらば、末法万年の群類を誰かたすくる者あらん。御身けふより心を決し、日蓮大敵と台戦を挑み、いかに成ゆく事ありとも、必ずこれを願みず、信心有縁の味方を圓め、つゞいて旗を揚げられよ。共に討死するも忠、又た惜からぬ身を存命して、再び家を興すこと。却つて拔群の大忠なるぞ、努々遺るゝ勿れ」と。

日昭涙に咽び、身を法の爲に殉せんと誓へたり。此の日昭は日蓮六老僧の第一位にして後に云ふ、大成辨阿闍梨日昭聖人とは即ち之れなり。其の前身は下總國葛飾郡平賀郷の平賀祐昭の一子にして、承久三年を以て生る。十六歳にして出家し、後叡山に登り、奇遇の因縁によつて日蓮の法弟となりしなり。此の頃、池上右衛門大夫宗仲、荏原左衛門義宗、四條三郎左衛門賴基、進士太郎善春等時々來りて教化を慕く。日蓮一日下總に往き、歸途同國飾鹿浦に便船を索む。時に富木五郎胤繼は若宮の邑主なり。鎌倉の直宿にあたり、こゝより船に乗れり。折柄日蓮便船なく汀に停立せしが、胤繼遙に之れを見て、船中の閑話に好敵手を得たりと從者をして日蓮を招かしむ。既にして纜を解くに



及び胤繼日蓮に對ひ、御房は何の宗ぞと、日蓮對へて貧道は未だ宗門を定めずといふ。胤繼聞いて點頭つゝ、日來鎌倉に日蓮といふ奇僧ありて諸宗を折伏した、法華の題目を唱ふと、子もこれを知れりやと、日蓮對へて之れを知れりと、胤繼然らば其の說奈何と、日蓮從容として曰く

「夫れ佛法の本意は、王法を扶けて國家を守護し、風雨順次諸難を穰ひて、一切衆生を救ふにあり。然るに今の世高祖と呼はるゝ者も、成覺世尊の意を知らず、妄にその家々の宗祖に泥みて、時機相應の教に反す。故に却つて國家を亂し、衆生をして暗に迷はしむ。こゝに於てかの日蓮深くこれを歎息し、正法を説いてその邪見を翻さんとするといへども、數年流弊の銷を磨に至らず、還つて佛教の汚名を被り、且つ狂僧と嘲らる。その以如何となれば念佛無間等四箇の邪法を詰ればなり云々と。」

辯舌流るゝが如くなりければ、五郎胤繼聞き終りて忽ち座を避けて、それ御房は日蓮師ならむ。某は入幡若宮の邑に住む。宮木胤繼といふものなり。量ら

ざる縁によりてこの大法を承けたり。他日彼處を過り給はゞ必ず立寄られよと、武州久良岐郡六浦の濱に着船し、互に再會を期して立別れたり。其の年即ち建長六年冬十月に至り、下總國猿島郡能手の人、印東治部左衛門有國、日蓮に見えんことを乞ふ。日昭案内して席に居らしむ。有國恭しく額づきて我れ度々此の地に來り、聖人の説法をきき奉り、その深妙の法晝夜に忘れがたく、國に歸りて妻にも語らひ、一人の男子吉祥といふ麻呂を、徒弟に附んと、遙々此の兒を携へ來りぬ。此の兒の母は法弟日昭の姉なれば、伯父甥といひ、法兄弟宿世奇特の因縁とおほし、願を許させ給へと、日蓮大に悦び深く之れを鍾愛せり。年僅に十歳なり。

日蓮は名越の庵室を根城と定め、日昭はまた後殿の任を帯び、日蓮を扶け、法弟檀越を教化して、専ら別頭の法門を弘通せり。日蓮は日々辻町の東小町往還の路に立ちて、往來の人の足をとゞめ、念佛は無間地獄の業因なり、禪宗は天魔の邪法、眞言は國を亡ぼす大惡法、律は國の賊なりと、大音聲に喚ばり。末法當今の衆生の爲めには南無妙法蓮華經の外たすかるべき正法なしと説



示しければ、僧俗男女堵の如く、眼を怒らし、牙を咬み、惡口過言をするものあり。狂氣者なりと笑ふもあり。或は石瓦礫古履を投するものあり。されども日蓮少しも屈せず。日々辻説法に諸宗惡口の塵を揚げ、僧俗誹謗の響を傳へたり。かくて乙卯の歲も暮れて、康元元年日蓮年三十五歳となれり。日蓮意氣益々勇猛なり。諸民相隨ひ相呼ぶ中に、半はこれに和する者あり。また之れに傾くものあり。また信する者降る者あり。妻は信じて夫に捨てられ、子は唱へて父に捨てられ。或は主に疑はれ、兄に背き、府内大に騷擾せり。折伏弘通のその中に所州天津の領主工藤左近之丞吉隆御所勤番のいとま化導を受けて檀越となる。又た池上右衛門太夫宗仲は代々作事の奉行として將軍家に事へ。武州荏原郡千束の郷を領せしが、春秋兩度鎌倉に出勤のいとま、建長壽福兩山に入りて禪學を修行しけるが、兼て四條金吾頼基は親しき友なりければ、頼基種々に教導して名越に伴ひしが、宗仲一度日蓮に謁し、大に敬服して受戒せり。其の弟兵衛志もともに檀越となる。又た池上の縁家に荏原左衛門義宗といへる人あり。武州荏原を領して中延に居住し。近頃日蓮に

師檀の契を結べり。此の家に先祖甲斐守頼信以來頼義義家三代軍中守護の八幡の神像ありしが、日蓮に謁うて之れが點眼を願へり。後年に及び義宗の子徳次郎を日朗の法弟となせり。九老僧の中朗慶聖人これなり。又た甲州巨摩郡波木井に住める南部六郎實長といふ人あり。性篤實にして思慮明に、深く佛法を信す。初めて日蓮に相見、舊來の權宗を棄て本門の大戒を受けたり。後年身延山の檀越たり。この時また日蓮熊王を得てこれを奴僕となせり。この年(康元元年)二月二十九日雷電夥しく洪水あり。六月七日また大雨鶴岡の社鳴動す。其の翌正嘉元年天變地妖ます。己まらず。二月二十三日大地震動し。日を経て猶ほ止まず。夏に至りて雨ふらず。諸國一圓に旱魃せり。五月十八日大地震あつて民屋を壊つす。八月朔日もまた大地震。二十三日もまた地震し。坤軸も摧うんとす。神社佛閣も丕に破壊し、山嶽は崩れ、大地裂けて、火炎涌出す。九月四日もまた地震し。夫より數十日に動止まず。かく天地の變に遭ひて、稻穀更に登らされは國中一同飢饉して四民食物を失ひ、飢餓に逼る。或る者はこれ偏に日蓮が毒鼓を鳴し邪を奮ふ。天の誠なりとしてこれを憎



み、刀技を企て或は鶴殺せんと計り、或は將軍執権の後宮夫人の女性に訴へ、これを翻けんと謀るといへども、定見なきが故にそれも協はず。また如何とも詮方なし。日蓮は是等の天災地妖もたゞ傍法の誡めなり。早く邪氣を退けずはこれに勝したる大變あらんと公に説き、自若として更に動かず。斯くて正嘉二年二月十四日、日蓮の父妙日居士頓に卒せりと。房州より告げ來れり。日蓮その計に接して天を仰ぎ、地に伏てて絶倒せり。頓て辨開梨日昭を召し、それ孝は百行の基なり。佛も説いて誡めとす。我れ今父の喪に遭うてこれを忽にすべからず。因つて汝を補處位に充つと。而して衆人を顧みて今より後日昭を見ること我れを見るが如くせよ。然らばこゝに難あらじと諭せり。日蓮それより房州に到り、喪を修すること一百日。加ふるに母を慰め、志を竭せり。曾て修喪の暇あるとき、二代大意抄一篇を撰し、一は先考の冥福に薦め、一は門下の新發意に授くと。かくて日蓮鎌倉にかへれり。其の年も暮れて正元元年となりしも、疫疾いまだ止まず。餓死する者道路に充てり。尋いて盜賊火災發り、これを官に訴ふるもの、綿々として腫を列ね。八月頃に至りて

は米穀ますく、拂底して、牛馬巷に斃れ、骸骨路を塞ぐに至れり。又た疫癘行はれて百姓死する者半に過ぐ。また九月二十八日は戌刻に當つて、災惑星、南斗を犯すのみならず、大流星長五丈余、乾より巽に飛ぶ。その聲宛も雷の如し。こゝに於て鎌倉の貴族、大に恐れてこれを慎み、諸宗の僧等壇を設け、經を誦して災を穢ふ。日蓮は之れ全く法華經流布の時節なるを念佛真言の諸宗門、その大法の妨なすを天怒り地罰し給ふに疑あらじ。此の事は房州清澄、南部の薬師寺、下總土橋東漸寺、鎌倉鶴ヶ岡と四度まで一切經藏に入りて、これを考へ置きたり。今一度藏經を開いて證據となるべき諸經の要文を撰はんと。正嘉二年正月六日、鎌倉を立つて駿州岩本實相寺の經藏に赴きたり。實相寺は比叡山横川に屬する天台の寺院なり。其の一切經は智證大師唐土より二部を持ち來り、一部三井寺に納めたるは治承の兵亂に燒失し、一部此の山に傳來す。日蓮此の經藏に入りしに當院の學頭智海法印初め大に敬服し、日蓮に請うて摩訶止觀の講釋を聽けり。日蓮即ち藏經閱讀の間に時々止觀を講論せり。日蓮其の時、強毒の説、末法本化別付嶋の微意、念佛無間等の四



箇の公言、憚る處なく説けり、聽聞するもの甚だ多くして反對するものも多  
く、亦た歸依の心を發するものも多かりき。就中當山に伯耆坊といふ所化あ  
りて、齡十四歳初め播磨二位嚴慶律師の徒弟となり、後推薦せられて三井寺  
に登れり。當時慕詣にて歸來して當山にありしが、日蓮の容貌を拜し、大に隨  
喜の心を起せり。これ白蓮阿闍梨日興なり。日蓮大藏の考證も既に畢りたれ  
ば、伯耆を伴ひて鎌倉に歸り、有國の男吉祥麻呂歳十六になりければ、薙髮得  
度せしめ、諱を日朗字を大國となせり。沙彌伯耆もこの時に衣を更へ剃度し  
て、諱を日興、白蓮と字せり。かくて日蓮は名越なる岩窟の中に在して、立正安  
國論を撰述し、以て北條政府に贈る。日蓮の前途是より益々峻なり。

#### 第四節 第一の諫奏

正元元年は暮れ年號は新になりて文應と云ふ。一月地震ひ、二月延曆寺の僧  
徒三井寺を寇す。三月地震ひ夏洪水あり、山崩れ人壓死す。日蓮愛民の涙愛國  
の血、凝て鎌倉奉行宿谷左衛門尉光則の邸に至る。曰く

「拙僧は名越に住む日蓮といふものなり。近來打ち續く天地の變天、一

代藏經に説く所に合へり。國家將に亡びんとす。妖孽あり。拙僧國土の  
報恩をせんとして聊か此書をなして候。前執權時頼公の賢覽に供へら  
れよ」と。

是ぞ立正安國論にして撰時鈔に

余に三度の高名あり、一には文應元年七月十六日に立正安國論を最明寺  
殿に奏し奉りし時、宿谷の入道に向て云はく、禪宗と念佛宗とを失ひ給へ  
しと申させ給へ。此事を御用るなきならば此一門より事おこりて佗國に  
攻められさせ給ふべし  
とある、即ち是れなる。

光則、取て政所に出仕し、以て此の旨を陳す。是れに於て、時頼乃ち北條一門を  
はじめ、列國の諸士を將軍の前に集め、侍讀學士比企大學三郎能企をして之  
れを讀ましむ。

旅客來り嘆シテ曰ク近年ヨリ近日ニ至ルマデ天變地妖飢饉疫癘遍ク天  
下ニ滿チ廣ク地上ニ進ル。牛馬羆ニ斃レ骸骨路ニ充ツ。死ヲ招クノ輩既ニ



大半ヲ超エ之ヲ悲マザルノ族敢テ一人モ無シ然ル間或ハ利劍即是ノ文ヲ專ニシ西土教主ノ名ヲ唱ヘ或ハ病悉除ノ願ヲ持テ東方如來ノ經ヲ誦ス或ハ病即消滅不老不死ノ詞ヲ仰ヒテ法華眞實妙文ヲ崇メ或ハ七難即滅七福即生ノ句ヲ信シテ百座百講ノ儀ヲ調フ秘密眞言之教ニ因リテ玉瓶ノ水ヲ灑ク有リ坐禪入定ノ儀ヲ全フシテ空觀ノ月ニ澄ム有リ若クハ七鬼神ノ號ヲ書シテ千門ニ押シ若クハ五大ノ形ヲ圖シテ萬戸ニ懸ク若クハ天神地祇ヲ拜シテ四角四界ノ祭祀ヲ企テ若クハ萬民百姓ヲ哀ンデ國主國宰ノ德政ヲ行フ然リト雖モ唯肝膽ヲ摧クノミニテ彌々飢疫逼リ乞客目ニ溢レ死人眼ニ滿ツ臥屍觀ヲ爲シ並尸橋ヲ爲ス觀レハ夫レ二離壁ヲ合シ五緯珠ヲ連ヌ三寶世ニ在シ百玉未タ窮セス此世早ク衰ヘ其法何ソ廢レタル是レ何ノ禍ニ依ルヤ是レ何ノ誤ニ由ルヤ主人曰々獨リ此事ヲ愁テ胸臆ニ憤排ス客來テ共ニ嘆キ屢々談話ヲ致ス夫レ出家シテ道ニ入ル者ハ法ニ依テ佛ヲ期ス也而ルニ今神術モ協ハズ佛威モ驗無シ具ニ當世ノ體ヲ觀ルニ愚ニシテ後生ノ疑ヲ發ス然レバ則チ圓觀ニ仰ヒ

恨ヲ吞ミ方載ニ俯シテ慮ヲ深フス情々微官ヲ傾ケ聊カ經文ヲ披クニ世皆ナ正ニ背キ人悉ク惡ニ歸ス故ニ善神國ヲ捨テ相去リ聖人所ヲ辭シテ還ラズ是ヲ以テ魔來リ鬼來リ災起リ難起ル言ハザル可カラズ恐レザル可カラズ客曰ク天下ノ災國中ノ難余獨リ嘆クニ非ズ衆皆ナ悲ム今蘭室ニ入テ初メテ芳詞ヲ承クルニ神聖去辭シ災難並ヒ難ルハ何ノ經ニ出テタルヤ其證據ヲ聞ン主人曰ク其文繁多ニシテ其證弘博ナリ金光明經ニ云ク其國土ニ於テ此經有リト雖モ未ダ嘗テ流布セズ捨離ノ心ヲ生シテ聽聞スルヲ樂ハズ亦タ供養尊重讚歎セズ四部衆持經ノ人ヲ見ルモ亦タ復尊重乃至供養スルコト能ハズ遂ニ我等及餘ノ眷屬無量ノ諸天ヲシテ此甚深ノ妙法ヲ聞クヲ得ザラシメ甘露ノ味ニ背キ正法ノ流ヲ失シ威光及ビ勢力有ルナク惡趣ヲ增長シ人天ヲ損滅ス生死ノ海ニ墜チ涅槃ノ路ニ乖ク世尊我等四王并諸眷屬及ヒ藥叉等斯ノ如キ事ヲ見其國土ヲ捨テ擁護ノ心無ラン但我等が是王ヲ捨棄スルニアラズ亦タ無量ノ守護國土諸大善神有ランモ皆ナ悉ク捨テ去ラン既ニ捨離レ己ンヌレバ其國



ニ當ニ種々ノ災禍有テ國位ヲ喪失ス可シ一切ノ人衆皆ナ善心無ク唯ダ  
 繫縛殺害瞋諍ノミ有テ互ニ相讒詔シ枉テ辜無キニ及バン疫癘流行シ慧  
 星數出テ兩日並ヒ現シ籬蝕恒無ク黑白ノ二虹不表ノ相ヲ表ハシ星流レ  
 地動キ井ノ内ニ聲ヲ發シ暴雨惡風時節ニ依ラズ常ニ飢饉ニ遭テ苗實成  
 ラズ多ク佗方ノ怨賊有テ國內ヲ侵掠セン人民諸ノ苦惱ヲ受ケテ土地可  
 樂ノ處有ルコト無クン大集經ニ云ク佛法實ニ隱沒セハ鬚髮爪皆ナ長ク  
 諸法亦タ妄失セン當時ニ虛空ノ中ニ大ナル聲アツテ地ヲ震ヒ一切皆ナ  
 遍動センコト猶ホ水上ノ輪ノ如クナラン城壁破レ落下リ屋宇悉ク圮柝  
 ク樹林根枝葉華菓藥盡ン唯ダ淨居天ヲ除テ欲界ノ一切處ノ七味三精  
 氣損減シテ餘リ有ルコト無ケン解脱ノ諸ノ善論當時ニ一切盡キン所生  
 ノ華果ノ味希少ニシテ亦美カラズ諸有ノ井池泉一切盡ク枯涸シ土地悉  
 ク鹹鹵シ敵裂シテ丘澗ト成ラン諸山皆焦然トシテ天龍雨ヲ降サズ苗稼  
 皆ナ枯死シ生者皆死シ盡キ餘草更ニ生セズ土ヲ雨ラシ皆ナ昏闇トシテ  
 日月モ明ヲ現セズ四方皆ナ亢旱シテ數諸ノ惡瑞ヲ現シ十不善ノ業道食

腹癡倍增シテ衆生父ニ於テ之ヲ觀ル事獐鹿ノ如クナラン衆生及ヒ壽命  
 色力威樂減シ人天ノ樂ヲ遠離シ皆悉ク惡道ニ墮セン是ノ如キ不善業ノ  
 惡王ト惡比丘ト我カ正法ヲ毀壞シ天人ノ道ヲ損減ス諸天善神王ノ衆生  
 ヲ悲愍センモノ此濁惡ノ國ヲ棄テ皆悉ク餘方テ向ハン仁王經ニ云ク  
 國土亂レン時ハ先ツ鬼神亂ル鬼神亂ル故ニ萬民亂レ賊來テ國ヲ劫カ  
 シ百姓亡喪シ臣君太子王子百官共ニ是非ヲ生ゼン天地怪異シ廿八宿星  
 道日月時ヲ失ヒ度ヲ失ヒ多ク賊ノ起ル事有ラン亦タ云ク我レ今五眼ヲ  
 以テ明カニ三世ヲ見ルニ一切ノ國王ノ皆ナ過去ノ世五百佛ニ侍カヘシ  
 ニ由テ帝王主ト爲ル事ヲ得タリ是ヲ以テ一切ノ聖人羅漢而モ爲ニ彼ノ  
 國土ノ中ニ來生シテ大利益ヲ作サン若シ王ノ福盡キ時ニハ一切ノ聖  
 人皆爲ニ捨去セン若シ一切ノ聖人去ル時ハ七離必ズ起ラン藥師經ニ云  
 ク若シ刹帝利灌頂王等ノ災難起ン時ニハ所謂人衆疾疫ノ難佗國侵逼ノ  
 難自界叛逆ノ難星宿變怪難日月薄蝕ノ難非時風雨ノ難過時不雨ノ難ア  
 ラン仁王經ニ云ク大王我ガ今化スル所ハ百億ノ須彌百億ノ日月一一ノ



須彌ニ四天下有リ其南閻浮提ニ十六ノ大國五百ノ中國十千ノ小國有リ  
 其國土ノ中ニ七ノ畏ル可キ難有リ一切ノ國王是レヲ難ト爲ス故ニ云何  
 ナルヲ難トナス日月度ヲ失ヒ時節反逆シ或ハ赤日出黒日出二三四五ノ  
 日出或ハ日蝕シテ光リ無ク或ハ日輪一重二三四五輪ニ現スルヲ一ノ難  
 ト爲ス二十八宿度ヲ失ヒ金星彗星輪星鬼星火星水星風星刁星南斗北斗  
 五鎮ノ大星一切ノ國主星三公星百官星是ノ如キ諸星各々ニ變現スルヲ  
 二ノ難ト爲ス大火國ヲ燒キ萬姓燒盡シ或ハ鬼火龍火天火山神火人火樹  
 木火賊火アラン是ノ如ク變怪スルヲ三ノ難ト爲ス大水百姓ヲ漂没シ時  
 節反逆シ冬雨フリ夏雪フリ冬ノ時ニ雷電霹靂シ六月ニ冰箱雹ヲ雨ラシ  
 赤水黒水青水ヲ雨シ土山石山ヲ雨ラシ沙礫石ヲ雨シ江河逆ニ流レ山ヲ  
 浮ヘ石ヲ流サン是ノ如ク變セン時ヲ四ノ難ト爲ス大風萬姓ヲ吹殺シ國  
 土山河樹木一時ニ滅没セン時ニ非ル大風黒風赤風青風天風地風火風水  
 風是ノ如ク變スルヲ五ノ難ト爲ス天地國土亢陽炎火洞然トシテ百草亢  
 旱シ五穀登ラズ土地赫然トシテ萬姓滅盡セン是ノ如ク變セン時ヲ六ノ

難ト爲ス四方ノ賊來テ國ヲ侵シ内外ノ賊起ラン火賊水賊風賊鬼賊アツ  
 テ百姓荒亂シ刀兵劫起スベシ是ノ如ク怪スル時ヲ七ノ難トナス大集經  
 ニ云ク若シ國王有テ無量世ニ於テ施戒慧ヲ修ストモ我カ法ノ滅センヲ  
 見テ捨テ、擁護セズンバ是ノ如ク種ユル所ノ無量ノ善根悉ク皆滅失シ  
 テ其國當ニ三ノ不祥事有ル可シ一ニハ穀貴二ニハ兵革三ニハ疫病ナリ  
 一切ノ善神悉ク之ヲ捨離セバ其王教令スル人隨從セズ常ニ鄰國ノ爲メ  
 ニ侵燒セラレン暴火横ニ起リ惡風雨多ク暴水増長シテ人民ヲ吹漂シ内  
 外ノ親戚其レ共ニ謀叛セン其王久シカラズシテ重病ニ遇フ當シ壽終ノ  
 後大地獄ノ中ニ生セン乃至王ノ如ク夫人太子大臣城主村主將帥郡守宰  
 官モ亦タ復々是ノ如クナラン夫レ四經ノ文朗カナリ萬人誰カ疑ハン而  
 ルニ盲瞽ノ輩迷惑ノ人妄リニ邪說ヲ信シテ正教ヲ辨ヘズ故ニ天下世上  
 諸佛衆經ニ於テ捨離ノ心ヲ生シテ擁護ノ志無シ仍テ善神惡人國ヲ捨テ  
 所ヲ去ル是ヲ以テ惡鬼外道災ヲ成シ難ヲ致ス  
 客色ヲ作シク曰ク後漢ノ明帝ハ金人ノ夢ヲ悟テ白馬ノ教ヲ得上宮太子



ハ守屋ノ逆ヲ誅シテ寺塔ヲ成ス。爾ヨリ來、上一人ヨリ下萬民ニ至マデ佛  
 像ヲ崇メ經卷ヲ尊ニス。然ラバ則チ嶽山南都園城東寺四海一州五畿七道  
 佛經星ノ如ク羅リ堂宇雲ノ如ク布ケリ。鶯子ノ族ハ鷲頭ノ月ヲ觀シ鶴勒  
 ノ流ハ亦タ雞足ノ風ヲ傳フ。誰カ一代ノ教ヲ禰シ三寶ノ迹ヲ廢スト謂ン  
 ヤ。若シ其廢有ラハ委其故ヲ聞ン。主人諭シテ曰ク佛閣毀ヲ連ネ經藏軒ヲ  
 竝ベ僧ハ竹葦ノ如ク侶ハ稻麻ニ似タリ。崇重年舊リ尊貴日ニ新タナリ。但  
 シ法師諂曲ニシテ人倫ヲ迷惑シ王臣不覺ニシテ邪正ヲ辨スル無シ。仁王  
 經ニ云ク諸ノ惡比丘多ク名利ヲ求メ國王太子王子ノ前ニ於テ自ラ破佛  
 法ノ因縁、破國ノ因縁ヲ説ク。其王別ヘズシテ此語ヲ信聽シ横ニ法制ヲ作  
 テ佛戒ニ依ラズ。是ヲ破佛破國ノ因縁ト爲ス。涅槃經ニ云ク菩薩惡象等ニ  
 於テ心ニ恐怖無シ、惡智識ニ於テハ怖畏ノ心ヲ生セヨ。惡象ノ爲メニ殺サ  
 レテハ三趣ニ至ラズ、惡友ノ爲メニ殺サルレハ必ズ三趣ニ至ル。法華經ニ  
 云ク惡世ノ中ノ比丘ハ邪智ニシテ心諂曲ニ未ダ得ザルヲ得タルト謂ヒ、  
 我慢ノ心充滿セン。或ハ阿練若ニ納衣ニシテ空閑ニ在テ自ラ眞道ヲ行ス。

ト謂テ人間ヲ輕賤スル者有リ、利養ニ貪著スルカ故ニ白衣ノ爲メニ法ヲ  
 説テ世ニ恭敬セラル、フヲ爲マフ六通ノ羅漢ノ如クナラン。乃至常ニ大  
 衆ノ中ニ在テ我等ヲ毀ラント欲スルカ故ニ國王大臣婆羅門居士及ヒ餘  
 ノ比丘衆ニ向テ誹謗シテ我カ惡ヲ説イテ是レ邪見ノ人、外道ノ論議ヲ説  
 クト、謂ハン濁劫惡世ノ中ニハ多ク諸ノ恐怖有ラン、惡鬼其身ニ入テ我ヲ  
 罵罵シ毀辱セン。濁世ノ惡比丘ハ佛ノ方便隨宜所説ノ法ヲ知ラスシテ惡  
 口シテ毀辱シ數、指出セラレン。涅槃經ニ云ク我レ涅槃ノ後、無量百歲ニ四  
 道ノ聖人悉ク復タ涅槃セン。正法滅シテ後チ像法ノ中ニ於テ當ニ比丘有  
 ルベシ持律ニ似像シテ少カニ經ヲ讀誦シ飲食ヲ貪嗜シ其身ヲ長養シ袈  
 裟ヲ著スト雖モ猶ホ獵師ノ細視徐行スルカ如ク猫ノ鼠ヲ伺フガ如シ、常  
 ニ是言ヲ唱ヘン我レ羅漢ヲ得タリト。外ニハ賢善ヲ現シ内ニハ貪嫉ヲ懷  
 キ嗔法ヲ受クル婆羅門等ノ如ク實ニ沙門ニ非スシテ沙門ノ像ヲ現シ邪  
 見熾盛ニシテ正法ヲ誹謗セン文ニ就テ世ヲ見ルニ誠ニ以テ然カナリ。惡  
 侶ヲ誑メズンバ豈ニ善事ヲ成サンヤ。



客猶憤テ曰ク、明王ハ天地ニ因テ化ヲ成シ聖人ハ理非ヲ察シテ世ヲ治ム。世上ノ僧侶ハ天下ノ歸スル所也、惡侶ニ於テハ明王信ス可カラズ。聖人ニ非ズンバ賢哲仰ク可カラズ、今賢聖ノ尊重セルヲ以テ龍象ノ輕カラザルヲ知ル。何ソ妄言ヲ吐テ強テ誹謗ヲ成ス。誰人ヲ以テ惡比丘ナリト謂フ。委細ニ聞カント欲ス。主人曰ク、後鳥羽院ノ御宇ニ法然ト云フ者有リ、選擇集ヲ作レリ。則チ一代ノ聖教ヲ破シ偏ク十方ノ衆生ヲ迷ハス。其選擇ニ云ク、道綽禪師聖道淨土ノ二門ヲ立テ、聖道ヲ捨テ、正ク淨土ニ歸スルノ文、初ニ聖道門トハ之ニ就テ二有リ、乃至之ニ準シテ之ヲ思フニ密大及ヒ實大ヲ存ス應シ。然ラバ則チ今ノ眞言佛心、天臺華嚴三論法相地論攝論此等ノ八家ノ意正ク此ニ在ル也。曰、曇鸞法師往生論ノ註ニ云ク、識テ龍樹菩薩ノ十住毗婆沙ヲ案スルニ云ク、菩薩阿毗跋致ヲ求ムルニ二種ノ道有リ、一ニハ難行道、二ニハ易行道ナリ。此中ニ難行道トハ即チ是レ聖道門也、易行道トハ即チ是レ淨土門也。淨土宗ノ學者先ツ須ク此旨ヲ知ルベシ。設ヒ先ニ聖道門ヲムスル人ヲナト雖モ若シ淨土門ニ於テ其志有ラバ須ク聖

道ヲ弃テ、淨土ニ歸スベシ。又云ク善導和尚正雜ニ行ヲ立テ、雜行ヲ捨テ、此行ニ歸スルノ文、第一ニ讀誦雜行トハ上ノ觀經等ノ往生淨土經ヲ除テ已外、大小乘顯密ノ諸經ニ於テ受持讀誦スルヲ悉ク讀誦雜行ト名ツク。第三ニ禮拜雜行トハ上ノ彌陀ヲ禮拜スルヲ除テ已外、一切諸佛菩薩等及ヒ諸ノ世天等ニ於テ禮拜シ恭敬スルヲ悉ク禮拜雜行ト名ツク。私ニ云ク此文ヲ見ルニ須ク雜ヲ捨テ、專ラ修スベシ。豈ニ百即百生ノ專修正行ヲ捨テ、堅ク千中無一ノ雜修雜行ニ執センヤ。行者能ク之ヲ思量セヨ。又云ク貞元入藏錄中ニ、始メ大般若經六百卷ヨリ法常住經ニ終ル迄顯密ノ大乘經、總シテ七百卅七部、二千八百八十三卷也。皆ナ須ク讀誦大乘ノ句ニ攝スベシ。當ニ知ルベシ隨他ノ前エハ暫ク定散ノ門ヲ開クト雖モ隨自後ニハ還テ定散ノ門ヲ閉ク。一ダヒ開ヒテ以後永ク閉チザル者ハ唯ダ是レ念佛ノ一門ナリ。又云ク念佛ノ行者必ス三心ヲ具スベキノ文、觀無量壽經ニ云ク同經ノ疏ニ云ク、問テ曰ク、若シ解行ノ不同、邪雜ノ人等有テ外邪異見ノ難ヲ防カン。或ハ行スルヲ一分二分ニシテ群賊等喚ヒ回ス者、即



別解別行惡見ノ人等ニ喩フ。私ニ云ク又此中ニ一切ノ別解別行異學異見等ト言フハ是レ聖道門ヲ指ス。又最後結句ノ文ニ云ク夫レ速カニ生死ヲ離レント欲セバ二種ノ勝法ノ中ニ且ク聖道門ヲ闍ヘテ淨土門ニ選テ入レ。淨土門ニ入ラント欲セバ正雜二行ノ中且ク諸ノ雜行ヲ抛テ選テ正行ニ歸スベシト。之ニ就テ之ヲ見ルニ曇鸞道綽善導ノ釋釋ヲ引ヒテ聖道淨土難行易行ノ旨ヲ建テ、法華真言總シテ一代ノ大乘六百三十七部二千八百八十三卷一切ノ諸佛菩薩及ヒ諸ノ世天等ヲ以テ皆ナ聖道難行雜行等ニ攝シテ或ハ捨テ或ハ閉テ或ハ闍或ハ抛此四字ヲ以テ多ク一切ヲ迷ハス。剩ヘ三國ノ聖僧十方ノ佛弟ヲ以テ皆ナ群賊ト號シ降テ罵詈セシメ近クハ所依ノ淨土三部經ノ唯除五逆誹謗正法ノ誓文ニ背キ遠クハ一代五時ノ肝心法華經第二ノ若人不信毀謗此經乃至其人命終入阿鼻獄賊文ニ迷フ。於是代末代ニ及ヒ人聖人ニ非ス。各々其術ニ容テ竝ニ直道ヲ忘ル悲イ哉。瞋瞋ヲ拆セス。痛イ哉。徒ラニ邪信ヲ催ス。故ニ上ハ國主ヨリ下ハ士民ニ至ルマデ皆ナ經ハ淨土三部ノ外ニ經無ク佛ハ彌陀三尊ノ外ニ佛

無シト謂ヘリ。仍テ傳教義真慈覺智證等或ハ萬里ノ波濤ヲ涉テ渡ス所ノ聖教或ハ一朝ノ山川ヲ回テ崇ムル所ノ佛像若クハ高山ノ顛ニ華界ヲ建テ、安置シ若クハ深谷ノ底ニ逆宮ヲ起テ以テ崇重シ釋迦藥師ノ光ヲ竝ルヤ威ヲ現當ニ施シ虚空地藏ノ化ヲ成スヤ益ヲ生後ニ被ラシム。故ニ國主ハ郡郷ニ寄テ以テ燈燭ヲ明ニシ地頭ハ田園ニ充テ以テ供養ニ供フ。而ルヲ法然ガ選擇ニ依テ教主ヲ忘テ西土ノ佛跡ヲ貴ビ付屬ヲ抛テ東方ノ如來ヲ闍キ唯ダ四卷三部ノ教典ヲ專ニシテ空ク一代五時ノ妙典ヲ抛ツ是ヲ以テ彌陀ノ堂ニ非レバ皆ナ供佛ノ志ヲ止メ念佛ノ者ニ非レバ早ク施僧ノ懷ヲ忘ル。故ニ佛堂零落シテ瓦松ノ煙老ヒ僧房荒廢シテ庭草ノ露深シ。然リト雖モ各護惜ノ心ヲ捨テ、竝ニ建立ノ思ヲ廢ス。是ヲ以テ住持ノ聖僧行テ歸ラズ守護ノ善神去テ來ルヲ無シ。是レ偏ニ法然ノ選擇ニ依ル也。悲イ哉。數十年ノ間百千萬ノ人魔緣ニ誘カサレテ多ク佛教ニ迷ヘリ。傍ヲ好ンテ正ヲ忘ル善神怒ヲ成サランヤ。圓ヲ捨テ、偏ヲ好ム惡鬼便ヲ得ザランヤ。如カヲ彼ノ萬祈ヲ修センヨリハ此一凶ヲ禁センニハ。



客殊ニ色ヲ作シテ曰ク我カ本師釋迦文淨土三部經ヲ説イテヨリ以來、曇鸞法師ハ四論ノ講説ヲ捨テ、一向ニ淨土ニ歸シ、道綽禪師ハ涅槃ノ廣業ヲ闡イテ偏ヘニ西方ノ行ヲ弘メ、善導和尚ハ雜行ヲ拋テ專修ヲ立テ、慧心僧都ハ諸經ノ要文ヲ集メテ念佛ノ一行ヲ宗トス、彌陀ヲ貴重スルヲ誠ニ以テ然ラン、又往生ノ人、其レ幾クソヤ。就中、法然聖人、幼少ニシテ天台ニ昇リ十七ニシテ六十卷ニ涉リ、竝ニ八宗ヲ究メ、具ニ大意ヲ得タリ、其外一切ノ經論七遍マテ反覆シ、章疏傳記究メ看サルヲ莫ク、智ハ日月ニ齊シク、徳ハ先師ニ越ユ、然リト雖モ猶ホ出離ノ趣ニ迷ヒ、涅槃ノ旨ヲ辨ヘズ、故ニ徧ク頌、悉ク鑒ミ、深ク思ヒ、遠ク慮リ、遂ニ諸經ヲ拋テ專ラ念佛ヲ修シ、其上ニ夢ノ靈應ヲ蒙リ、四裔ノ親疎ニ弘ム、故ニ或ハ勢至ノ化身ト號シ、或ハ善導ノ再誕ト仰カ々、然ラバ則チ十方ノ貴賤ハ頭ヲ低レ、一朝ノ男女ハ歩ミヲ運ブ、爾ヨリ來、春秋推シ移リ、星霜相積メリ、而ルニ悉クモ釋尊ノ教ヲ疎シテ恣ニ彌陀ノ文ヲ譏ル、何ソ近年ノ災ヲ以テ聖代ノ時ニ課セ、強テ先師ヲ毀リ、更ニ聖人ヲ罵レヤ、毛ヲ吹テ疵ヲ求メ、皮ヲ剪リテ血ヲ出ス、昔ヨリ今

ニ至ルマデ此ノ如キ惡言未ダ見ズ、惶ル可シ、慎ム可シ、罪業至テ重シ、科條爭テカ遁レン、對座猶ホ以テ恐レ有リ、杖ヲ携ヘテ則チ歸ラント欲ス、主人笑止シテ曰ク、辛キ惡業ニ習ヒ、臭キ漏則ニ忘ル、善言ヲ聞ヒテ惡言ト思ヒ、謗者ヲ指シテ聖人ト謂ヒ、正師ヲ疑テ惡侶ニ擬ス、其迷ヒ誠ニ深ク、其罪淺カラズ、事ノ起リヲ聞ク委ク、其趣ヲ談ゼン、釋尊說法ノ内、一代五時ノ間、先後ヲ立テ、權實ヲ辨ス、而ルニ曇鸞道綽善導既ニ權ニ就テ實ヲ忘レ、先ニ依テ後ヲ捨ツ、佛教ノ淵底ヲ探ラザル者也、就中、法然ハ其流ヲ酌ムト雖モ、其源ヲ知ラズ、所以ハ何ン、大乘經六百卅七部、二千八百八十三卷、並ニ一切ノ諸佛菩薩及ヒ諸ノ世天等ヲ以テ捨閉、開拋ノ字ヲ置テ一切衆生ノ心ヲ薄ス、是レ徧ニ私曲ノ詞ヲ展ヘテ全ク佛經ノ説ヲ見ズ、妄語ノ至リ、惡口ノ科言ヲモ比無ク責メテモ餘リ有リ、人皆ナ其妄語ヲ信シ、悉ク彼ノ選擇ヲ貴ム、故ニ淨土ノ三經ヲ崇メテ衆經ヲ拋テ極樂ノ一佛ヲ仰テ諸佛ヲ忘ル、誠ニ是レ諸佛諸經ノ怨敵、聖僧衆人ノ讎敵也、此邪教廣ク荒ニ弘マリ、周ク十方ニ遍ス、抑モ近年ノ災難、往代ノ由ヲ以テ強チニ之ヲ恐ル、聊カ先例ヲ



引テ汝カ迷ヲ悟スベシ。止觀第二ニ史記ヲ引テ云ク、周ノ末ニ被髮祖身ニシテ禮度ニ依ラザル者有リト。弘決第二ニ此文ヲ釋スルニ左傳ヲ引テ曰ク初メ平王ノ東遷スルヤ伊川ニ被髮者ノ野ニ祭ルヲ見ル。識者ノ曰ク百年ニ及バズ其禮先ツ亡ヒヌト。爰ニ知ル徵前ニ顯レ災後ニ致ルコトヲ。又タ改籍逸才ニシテ蓬頭散帶ス。後ニ公卿ノ子孫皆之ニ效フテ奴苟相辱ル者ヲ方ク自然ニ違スト云ヒ、樽節兢持スル者ヲ呼テ田舎ト爲ス。司馬氏ノ滅スル相ト爲スト。又慈覺大師入唐巡禮記ヲ案スルニ云ク、唐ノ武宗皇帝會昌元年勅シテ章敬寺ノ鏡霜法師ヲシテ諸寺ニ於テ彌陀念佛教ヲ傳ヘシム。寺毎ニ三日巡輪シテ絶エズ。同ク二年回起國ノ軍兵寺唐ノ界ヲ侵ス。同三年河北ノ節度使忽チ亂ヲ起ス。其後大蕃國更ニ命ヲ拒ミ回鶻國重テ地ヲ奪フ。凡ソ兵亂秦項ノ代ニ同シク災火邑里ノ際ニ起ル。何ニ況ンヤ武宗大ニ佛法ヲ破リ多ク寺塔ヲ滅ス。亂ヲ撥ムルコト能ハズ遂ニ以テ事有リ此ヲ以テ之ヲ推フニ法然ハ後鳥羽院ノ御宇建仁年中ノ者也。彼ノ院ノ御事既ニ眼前ニ在リ。然ラハ大唐ニ例ヲ殘シ吾朝ニ證ヲ顯ス汝疑フコト

莫レ汝怪ムコト勿レ唯ダ須ク凶ヲ捨テ、善ニ歸シ源ヲ塞テ根ヲ截ルベシ。

客聊カ和イテ曰ク未タ淵底ヲ究メサレトモ數々其趣ヲ知ル。但シ花洛ヨリ柳營ニ至ルマテ釋門ニ樞礎在リ。佛家ニ棟梁在リ。然トモ未タ勘狀ヲ進ラセズ。上奏ニモ及バズ。汝賤キ身ヲ以テ輒ク莠言ヲ吐ク其義餘有リ。其理謂レ無シ。主人曰ク予少重タリト雖モ忝クモ大乘ヲ學ブ。蒼蠅驥尾ニ附テ萬里ヲ渡リ碧羅松頭ニ縣リテ千尋ヲ延ブ。弟子一佛ノ子ト生レ諸經ノ王ニ事フ。何ソ佛法ノ衰微ヲ見テ心情ノ哀惜ヲ起サマランヤ。其上涅槃經ニ云ク若シ善比丘法ヲ壞ラン者ヲ見テ置テ呵責シ驅遣シ舉處セズンハ當ニ知ルベシ。是ノ人ハ佛法ノ中ノ怨ナリ。若シ能ク斷遣シ呵責シ舉處セバ是レ我カ弟子真ノ聲聞也ト。余善比丘ノ身ナラズト雖モ佛法中怨ノ實ヲ近レンカ爲メニ唯ダ大綱ヲ撮テ粗々一端ヲ示ス。其上去ル元仁年中延曆興福ノ兩寺ヨリ度々奏聞ヲ經テ敕宣御教書ヲ申シ下シ法然カ選擇ノ印板ヲ大講堂ニ取リ上ク三世ノ佛恩ヲ報センカ爲メニ之ヲ燒失セシ



メ法然カ墓所ニ於テハ威神院大神人ニ仰付ケテ破卻セシム。其門弟隆觀聖炎成覺薩生等ハ遠國ニ配流シ其後未ダ御勸氣ヲ許サレズ。豈ニ未ダ勸狀ヲ進ラセズト云ンヤ。

客則チ和イテ曰ク、經ヲ下シ僧ヲ謗スルコト一人トシテ論シ難シ。然レトモ大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並ニ一切ノ諸佛菩薩及ヒ諸ノ世天等ヲ以テ捨閉闕拋ノ四字ニ載ス、其詞勿論也。文顯然タリ。瓊瑾ヲ守テ其誹謗ヲ成ス。迷テ言フカ、覺テ語ルカ。賢愚辨タズ是非定メ難シ。但シ災難ノ起リ選擇ニ因ルノ由、盛ンニ其詞ヲ増シ彌々其旨ヲ談ズ。所詮天下泰平國土安穩ハ君臣ノ樂フ所、士民ノ思フ所也。夫レ國ハ法ニ依テ昌ヘ、法ハ人ニ因テ貴シ、國亡ヒ人滅セバ佛ヲハ誰カ崇ム可キ法ヲハ誰カ信ス可ンヤ。先ツ國家ヲ祈テ須ク佛法ヲ立ツヘシ。若シ災ヲ消シ難ヲ止ムル、術有ラバ聞ント欲ス。主人曰ク、余ハ是レ頑愚ニシテ敢テ賢ヲ存セズ、唯ダ經文ニ就テ聊カ所存ヲ述ベン。抑モ治術ノ旨、内外ノ間ニ其文幾ク多キ、具ニ舉グベキ難シ。但シ佛道ニ入テ數々愚案ヲ回スニ謗法ノ人ヲ禁シテ正道ノ侶ヲ

重ンセハ國中安穩ニ天下泰平ナラン。即チ涅槃經ニ云ク佛ノ言ハク唯タ一人ヲ除ヒテ餘ノ一切ニ施サバ皆ナ讚歎スベシ。純陀問テ言ハク、云何ナルヲ名ケテ唯除一人ト爲スヤ。佛ノ言ハク此ノ經中說ク所ノ如キ破戒ナリ純陀復タ言ハク、我レ今、未ダ解セズ、唯ダ願クハ之ヲ說キ給ヘ。佛純陀ニ語テ言ハク、破戒トハ謂ク一闍提ナリ。其餘ノ在所一切ニ布施セバ皆ナ讚歎スベシ。大果報ヲ獲ン。純陀復タ問フ一闍提トハ其義云何。佛ノ言ハク純陀若シ比丘及ヒ比丘尼、優婆塞、優婆夷有テ姦惡ノ言ヲ發シ正法ヲ誹謗セシ。是ノ重業ヲ造テ永ク改悔セズ心ニ懺愧無カラシ。是ノ如キ等ノ人ヲ名ケテ一闍提ノ道ニ趣向スト爲ス。若シ四重ヲ犯シ五逆罪ヲ作り自ラテ是ノ如キ重事ヲ犯スト知レ正心ニ初テ怖畏懺悔無ク、有テ發露セズ。彼正法ニ於テ永ク護惜建立ノ心無ク毀管輕賤シテ言ハニ過咎多カラシ。是ノ如キ等ヲモ亦タ一闍提道ニ趣向スト名ク。唯此ノ如キ一闍提ノ輩ヲ除ヒテ其餘ニ施サバ一切讚歎スベシ。又云ク我レ往昔ヲ念フニ閻浮提於テ大國ノ王ト作テ名ヲ仙豫ト曰ヘリ。大乘經典ヲ愛念敬重ス。其心純善ニ



シテ麤惡嫉恚有ルヲ無シ。善男子我レ爾時ニ於テ心ニ大乘ヲ重ンジ婆羅門ノ方等ヲ誹謗スルヲ聞キ己テ即時ニ其命根ヲ斷ズ。善男子是ノ因緣ヲ以テ是ヨ 以來地獄ニ墮セズ。又云ク如來昔シ國王ト 菩薩道ヲ行セシ時爾所ノ婆羅門 命ヲ斷絶セリ。又云ク殺 三アリ。下中上ナリ。下トハ蟻子乃至一切畜生ナリ。唯ダ菩薩示現生ノ者ヲ除ク。下殺ノ因緣ヲ以テ地獄畜生餓鬼ニ墮シテ具ニ下ノ苦ヲ受ク。何ヲ以テノ故 是ノ諸ノ畜生ニ微善根アリ。是故ニ殺ス者具ニ罪報ヲ受ク。中殺ト 凡夫人 ヲ阿那含ニ至ルマデ是ヲ名ケテ中ト爲ス。是ノ業因ヲ以テ地獄畜生餓鬼ニ墮シテ具ニ中ノ苦ヲ受ク。上殺トハ父母乃至阿羅漢。辟支佛畢定ノ菩薩ナリ。阿鼻大地獄ノ中ニ墮ス。善男子若シ能ク一闍提ヲ殺ス事アラン者ハ此三種ノ殺ノ中ニ墮セズ。善男子彼ノ諸ノ婆羅門等ハ一切皆是レ一闍提也。仁王經ニ云ク佛波斯匿王ニ告ハク。是故ニ諸ノ國王ニ付屬シテ比丘比丘尼ニ付屬セズ。何ヲ以テノ故ニ王ノ威力無クレバナリ。涅槃經ニ云ク今無上ノ正法ヲ以テ諸王大臣宰相及ヒ四部ノ衆ニ付屬ス。正法ヲ毀ン者ヲハ大臣

四部ノ衆應ニ當ニ苦治スベシ。又云ク佛ノ言ハク迦葉能ク正法ヲ護持スル因緣ヲ以テノ故ニ是ノ金剛身ヲ成就スルコトヲ得タリ。善男子正法ヲ護持セン者ハ五戒ヲ受ケス威儀ヲ修セスシテ刀劔弓箭鉞槊ヲ持ツ應シ。又云ク若シ五戒ヲ受持セン者アラバ當ニ刀劔器仗ヲ執持スベシ。刀杖ヲ持スルト雖モ我レ是等ヲ説テ名ケテ持戒ト曰ハン。又云ク善男子過去ノ世ニ此ノ拘尸那城ニ於テ佛出世有リ歡喜增益如來ト號ス。佛涅槃ノ後。正法世ニ住スルコト無量億歲ナリ。餘ノ四十年佛法ノ末爾時ニ一ノ持戒ノ比丘有リ名ヲ覺德ト云フ。爾時ニ多ク破戒ノ比丘有テ是ノ説ヲ作スヲ聞テ皆ナ惡心ヲ生シテ刀杖ヲ執持シテ此ノ法師ヲ逼ム。是時ノ國王ヲ名ヲ有德ト云フ。是ノ事ヲ聞イテ己テ護法ノ爲メノ故ニ即チ說法者ノ所ニ往至シテ是ノ破戒ノ諸ノ惡比丘ト極メテ共ニ戰鬪ス。爾時ノ說法者ヲシテ危害ヲ厄ル、コトヲ得セシム。王爾時ニ於テ身ニ刀劔箭槊ノ瘡ヲ被リ體トシテ完キ處芥子ノ如キ許リモ無シ。爾時ニ覺德尋テ王ヲ讚シテ言ク善哉善哉王今眞ニ是レ正法ヲ護ルノ者ナリ。當來ノ世ニ此身當ニ無量ノ法



器ト爲ルベシ。王是時ニ於テ法ヲ聞クコトヲ得己テ心大ニ歡喜シテ尋テ即チ命終テ阿闍佛ノ國ニ生シテ彼ノ佛ノ爲メニ第一ノ弟子トナル。其王ノ將從人民眷屬戰鬪アリシ者、歡喜アリシ者、一切菩提ノ心ヲ退セズ。命終テ悉ク阿闍佛ノ國ニ生ス。覺德比丘卻テ後壽ヲ終テ亦タ阿闍佛ノ國ニ往生スルコトヲ得テ彼ノ佛ノ爲メニ聲聞衆ノ中第二ノ弟子ト作ル。若シ正法ノ盡キント欲スル時有ラハ應ニ是ノ如ク受持シ擁護スベシ。迦葉爾時ノ王トハ則チ我身是レ也。說法ノ比丘ハ迦葉佛是レナリ。迦葉正法ヲ護ラシ者ハ是ノ如キ等ノ無量ノ果報ヲ得ン。是ノ因緣ヲ以テ、我レ今日ニ於テ種々ノ相ヲ以テ自ラ莊嚴シ法身不可壞ノ身ヲ成スルコトヲ得タリ。佛迦葉菩薩ニ告ハク是故ニ護法ノ優婆塞等應ニ刀杖ヲ執持シテ擁護スルコト是ノ如クスベシ。善男子我レ涅槃ノ後濁惡ノ世國土荒亂シ互ニ相鈔掠シ人民飢餓セン。爾時ニ多ク飢餓ノ爲メノ故ニ發心出家スルモノ有ラン。是ノ如キノ人ヲ名ケテ禿人ト爲ス。是ノ禿人ノ輩、正法ヲ護持スルヲ見テ駭逐シテ出サシメ若クハ殺シ若クハ害セン。是故ニ我レ今持戒ノ人ノ諸ノ

白衣ノ刀杖ヲ持テル者ニ依テ以テ伴侶ト爲ルコトヲ聽ス。刀杖ヲ持スルト雖モ我レ是等ヲ説イテ名ケテ持戒ト曰ン。刀杖ヲ持スルト雖モ命ヲ斷スベカラズ。法華經ニ云ク若シ人此經ヲ毀謗セバ一切世間ノ佛種ヲ斷セン。乃至其人命終テ阿鼻獄ニ入ラン。夫レ經文顯然タリ。私ノ詞、何ヲ加ヘン。凡ソ法華經ノ如キハ大乘經典ヲ謗スル者ハ無量ノ五逆ニ勝ル。故ニ阿鼻大城ニ墮シテ永ク出ルノ期無シ。涅槃經ノ如キハ設ヒ五逆ノ供ヲハ許ス。凡ソ謗法ノ施ヲ許サズ。蟻十ヲ殺ス者ハ必ズ三惡道ニ落ッ。謗法ヲ禁ル者ハ定不退ノ位ニ登ル。所謂覺德ハ是レ迦葉佛有德者ハ釋迦文也。法華涅槃ノ經教ハ一代五時ノ肝心也。其禁シテ實ニ重シ誰カ歸仰セザラン。而ルニ謗法ノ族正道ノ人ヲ忘レ剩ヘ法然ノ選擇ニ依テ彌々愚癡ノ盲瞽ヲ増ス。是ヲ以テ或ハ彼ノ遺體ヲ忍ンデ木畫ノ像ニ露レ、或ハ其妄說ヲ信シテ莠言ノ模ニ彫リ、之ヲ海内ニ弘メ之ヲ擲外ニ翫ブ。仰ク所ハ其家風施ス所ハ其門弟ナリ。然ル間或ハ釋迦ノ手指ヲ切テ彌陀ノ印相ヲ結ヒ或ハ東方如來ノ雁字ヲ改メテ西土教主ノ鵝王ヲ居ヘ、或ハ四百餘回ノ如法經ヲ止メテ



西方淨土ノ三部經ト成ス。或ハ四百餘回ノ如來經ヲ止メテ西方淨土ノ三部經ト成ス。或ハ天台大師ノ講ヲ停メテ善導ノ講ト爲ス。此ノ如キ群類其レ誠ニ盡シ難シ。是レ破佛ニ非ズヤ。是レ破法ニ非ズヤ。是レ破僧ニ非ズヤ。此邪義ハ選擇ニ依レハ也。嗟呼悲哉。如來誠諦ノ禁言ニ背ク。哀矣。愚侶迷惑ノ靈語ニ隨フ。早ク天下ノ靜謐ヲ思ハ。須ク國中ノ謗法ヲ斷スベシ。

客曰ク若シ謗法ノ輩ヲ斷ジ若シクハ佛禁ノ違ヲ絶ンニハ彼ノ經文ノ如ク斬罪ニ行フ可キ歟。若シ然ラバ殺害相加ヘ罪業何カ爲ンヤ。大集經ニ云ク頭ヲ剃リ袈裟ヲ著セハ持戒及ヒ毀戒ヲハ天人彼ヲ供養スベシ。則チ我ヲ供養スルニ爲ンヌ。是レ我カ子ナレバナリ。若シ彼ヲ搗打スルコト有レバ爲レ我カ子ヲ打ツナリ。若シ彼ヲ罵辱セハ爲レ我ヲ毀辱スルナリ。料リ知ンヌ善惡ヲ論ゼズ。是非ヲ擇ブコト無ク僧侶爲ルニ於テハ供養ヲ展フ可シ。何ソ其子ヲ打辱シテ忝クモ其父ヲ悲哀セシメン。彼ノ竹杖ノ目連尊者ヲ害セシヤ。永ク無間ノ底ニ沈ミ。提婆達多ク蓮華比丘尼ヲ殺セシヤ。久

ク阿鼻ノ焰ニ咽ブ。先證斯レ明カナリ。後昆最モ恐レアリ。謗法ヲ誠ムルニ似テ既ニ禁ヲ破ル。此事信シ難シ。如何カ意ヲ得ンヤ。主人曰ク客明カニ經文ヲ見テ猶ホ斯ノ言ヲ成ス。心ノ及バザルカ。理ノ通ゼザルカ。全ク佛子ヲ禁スルニ非ス。唯ダ偏ニ惡謗法也。夫レ以前ノ佛教ハ其罪ヲ斬ルト雖モ能仁ノ以後ノ經說ハ則チ其施ヲ止ム。然ラハ則チ四海萬邦。一切ノ四衆。其惡ヲ施サズシテ皆ナ其善ニ歸セバ何ナル難カ。竝ヒ起リ何ナル災カ。既ヒ來ラン。

客則チ席ヲ避ケ襟ヲ刷ヒテ曰ク佛教斯レ區ニシテ旨趣窮メ難シ。不審多端ニシテ理非明カナラズ。但シ法然聖人ノ撰擇現在ナリ。諸佛諸經諸菩薩諸天等ヲ以テ捨閉閣抛ヲ載ス。其文顯然ナリ。茲ニ因テ聖人國ヲ去リ善神所ヲ捨ツ。天下飢渴シ。世上疫癘スト。今主人廣ク經文ヲ引テ明カニ理非ヲ示ス。故ニ妄執既ニ翻リ。耳目數々明カナリ。所詮國土泰平。天下安穩。ハ一人自リ萬民ニ至ルマテ好スル所ナリ。樂フ所也。早ク一闢提ノ施ヲ止メテ。永ク衆僧尼ノ供ヲ致シ。佛海ノ白浪ヲ收メ。法山ノ綠林ヲ截ラバ。世ハ義農ノ



世トナリ國ハ唐虞ノ國ト爲ラン然後法水ノ淺深ヲ斟酌シ佛家ノ棟梁ヲ崇重セン主人悦テ曰ク鳩化シテ鷹トナリ雀變シテ蛤ト爲ル悦イ哉汝闕室ノ友ニ交テ麻畝ノ性ト成リ誠ニ其難ヲ願ミ專ラ此言ヲ信セハ風和ヲキ浪靜ニシテ不日ニ豐年ナラン但シ人ノ心ハ時ニ隨テ移リ物ノ性ハ境ニ依テ改ル譬ヘハ水中ノ月ノ波ニ動キ隙前ノ軍ノ劍ニ靡クガ如シ汝當座ニ信スト雖モ後定ヲ永ク忘レン若シ先ツ國土ヲ安ンジテ現當ヲ祈ラント欲セバ速カニ情慮ヲ回シ忿イテ對治ヲ加ヘヨ所以者何トナレバ藥師經七難ノ内五難忽ニ起テ二難猶ホ殘レリ所以佗國侵逼ノ難自界叛逆ノ難也大集經三災ノ内二災早ク顯レ一災未ダ起ラズ所以兵革ノ災也金光明經ノ内種々ノ災過一一起ルト雖モ佗方ノ怨賊國內ヲ侵掠スル此災未タ露レズ此難未ダ來ラズ仁王經七難ノ内六難今盛ニシテ一難未ダ現セズ所以四方ノ賊來テ國ヲ侵ス難也加之國土亂レン時ハ先ツ鬼神亂ル鬼神亂ルハ故ニ萬民亂ルト今此文ニ就テ具サニ事ノ情ヲ案スルニ百鬼早ク亂レ萬民多ク亡ヒヌ先難是レ明カナリ後災何ゾ疑ハシ殘ル所

ノ難惡法ノ科ニ依テ竝ヒ起リ競ヒ來ラハ其時何爲ンヤ帝王ハ國家ヲ基トシテ天下ヲ治メ人臣ハ田園ヲ領シテ世上ヲ保ツ而ルニ佗方ノ賊來テ其國ヲ侵逼シ自界叛逆シテ其地ヲ掠領セバ豈ニ驚カザランヤ豈ニ騷カザランヤ國ヲ失ヒ家ヲ滅シテ何ノ所ニカ世ヲ遁レン汝須ク一身ノ安堵ヲ思ハ先ツ四表ノ靜謐ヲ禱ルヘキ者歟就中ノ世ニ在ル各々後生ヲ恐ル是ヲ以テ或ハ邪教ヲ信シ或ハ謗法ヲ貴ム各々是非ニ迷フコトヲ惡ムト雖モ猶ホ佛法ニ歸スルコトヲ哀ム何ゾ同ク信心ノ力ヲ以テセバ妄リニ邪義ノ詞ヲ宗ンヤ若シ熱心翻ラズ亦曲意猶ホ存セバ早ク有爲ノ郷ヲ辭シテ必ズ無間ノ獄ニ墮サン所以ハ何ノ大集經ニ云ク若シ國王有テ無量世ニ於テ施戒懲ヲ修スレ我カ法ノ滅センヲ見テ捨テ擁護セズンバ是ノ如ク種ル所ノ無量ノ善根悉ク皆滅失セン乃至其王久シカラズシテ當ニ重病ニ遇フベシ壽終ノ後大地獄ニ生セン王ノ如ク夫人太子大臣城主村師郡主宰官亦タ復タ此ノ如クナラン仁王經ニ云ク人佛教ヲ壞ラハ復タ孝子無ク六親不和ニシテ天神モ祐ケズ疾疫惡鬼日ニ來テ侵害シ災



怪首尾シ連禍縦横シ死シテ地獄餓鬼畜生ニ入り若シ出デ、人ト爲ラバ兵奴ノ果報ナラン響ノ如ク影ノ如シ、人ノ夜替スニ火ハ滅スレモ字ハ存スルカ如ク三界ノ果報、マタ是ノ如シ、法華經第二ニ云ク若シ人信セズシテ此經ヲ毀謗セバ乃至其人命終テ阿鼻獄ニ入ラン、又同第七卷不輕品ニ云ク千劫阿鼻地獄ニ於テ大苦惱ヲ受ク、涅槃經ニ云ク善友ヲ遠離シ正法ヲ聞カズ惡法ニ住セバ是ノ因縁ノ故ニ沈没シテ阿鼻地獄ニ在テ受ル所ノ身形縦横八萬四千由延ナラント、廣ク衆經ヲ披キタルニ專ラ謗法ヲ重ンズ、悲イ哉、皆正法ノ門ヲ出テ、深ク邪法ノ獄ニ入ルコト、愚ナル哉、各惡教ノ網ニ懸リ鎖ヘニ謗教ノ網ニ纏ルコト、此障霧ノ迷、彼ノ盛熾ノ底ニ沈ム、豈ニ愁ヘサランヤ、豈ニ苦シカラザランヤ、汝早ク信仰ノ寸心ヲ改メテ速ニ實乘ノ一善ニ歸セヨ、然ラハ三界ハ佛國ナリ、佛國其レ衰ヘンヤ、十方悉ク寶土ナリ、寶土何ソ壞レンヤ、國ニ衰微無ク土ニ破壞無クンハ身ハ是レ安全ニシテ心ハ是レ禪定ナラン、此詞此言信ス可シ崇ム可シ。

客ノ曰ク今生後生誰カ慎マザラン、誰カ恐レサラン、此經文ヲ披テ共ニ佛

語ヲ受クルニ誹謗ノ科至テ重ク、毀法ノ罪、誠ニ深シ我レ一佛ヲ信シテ諸佛ヲ抛チ三部經ヲ仰テ諸經ヲ閱ス、是レ私曲ノ思ニ非ズ、則チ先達ノ詞ニ隨ヒシナリ、十方ノ諸人モ亦タ是ノ如クナラン、今世ニハ性心ヲ勞シ、來生ニハ阿鼻ニ墮セスコト文明カニ理詳カナリ、疑フベカラズ、彌々貴公ノ慈誨ヲ仰テ益々愚客ノ癡心ヲ開ケリ、速カニ對治ヲ回ラシ、早ク泰平ヲ致シ先ツ生前ヲ安シ、更ニ沒後ヲ扶カラン、唯ダ我カ信ズルノミニ非ズ、又々佗ノ誤リヲ誡メンノミ。

文應元年太歲助之

北條一門は驚けり諸國の侍士は愕きたり。即ち日蓮を召して問ふ。時頼曰く「今度一卷の書を差し出して天下の政事を侮り萬人の信心を惑す事出家沙門の所行にあるべきや。」曰く「周の世に賤婦あり我が機杼を織らずして周の天下の亂れんすんを憂ひぬ。左傳の照公廿四年にあり。觀普賢經に曰く「正法ヲ以テ國ヲ治メ人民ヲ邪枉セザル、是レ仁三懺悔ヲ修スルト名ク。夫れ天晴れぬれば地明かなり。法華を知る者は世法を得べきか。法華經に曰く「我説ク



所ノ諸經此經ノ中ニ於テ法華最モ第一ナリ。又た曰く「若シ信セスシテ此經ヲ毀謗セハ一切世間ノ佛種ヲ斷ズ。其人命終レバ阿鼻獄ニ墮ス。」涅槃經に曰く「若シ佛ノ説ク所ニ順ハザル者ハ當ニ知ルベシ。是ノ人ハ魔ノ眷屬ナリ。」不立文字と云ひ、教外別傳と云ふ、尊公の信じ給ふ禪は天魔の所業なるぞ。然るに法華經に曰く「法華ノ名ヲ受ケ持ツモノハ福量ル可カラズ」と。又た曰く「若シ此經ヲ聞ヒテ名號ヲ宣持セバ德量ル可カラズ」と。又た曰く「此經ハ持チ難シ。若シ暫クモ持ツ者ハ我則チ歡喜ス。諸佛モ亦タ然リ」と。さらば早く、信仰の寸心を改めて速がに實乗の一善に歸し給ふべし。然らば三界は佛國なり、佛國それ衰へんや。十方悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微無く土に破壞無くんば身は是れ安穩、心は是れ禪定なるべし。」

時頼憤然色をなし、「一人の詞を信じて何ぞ三國傳來の諸宗を破らんと。中啓取て立ち揚り、裾うち拂つて入らんとす。日蓮即ち呼んで曰く「日蓮は當帝の父母、念佛者、禪宗、真言師等が師範なり、又主君なり、父に三有あり、法華經、釋尊、日蓮是れなり。法華經は一切衆生の父なり。此父に背く故に流轉して凡夫と

なる。釋尊は一切衆生の父なり、日蓮は日本國の棟梁なり。此事を御用ゐ無きならば自界叛逆として此一門より事起りて佗國侵逼難として此國の人々打殺さるゝのみならず多く生捕りにせらるべし」と。聲雷の如く、鎌倉殿震ふに似たり。近衆扈從、面土の如く仰いて日蓮を見るもの無し。是れぞ天下諫言の第一なる。



## 第五章 法難時代

## 第一節 松葉ヶ谷の法難

日蓮立正安國論を上り、一度副元師時頼に面して大に諸宗を破せしより、鎌倉の一問題となれり。當時執權は禪に歸依せしが日蓮これを破して天魔波旬の徒なりと陋めりたるを以て、排日蓮の聲日一日にして高し。特に北條重時は深く之れを憎惡し、頻りに日蓮を毀謗し、瞋恚の炎胸を焼けり。諸宗の徒も之れをさし、憎惡の念心骨に透り。此等排日蓮の人々相期せずして一致し、こゝに松葉ヶ谷の法難となれり。

當時權勢ある重時なれば、之れに隨伴して事をなさんとするもの甚だ多し。斯くて數百人松葉ヶ谷の草庵に押寄せたり。頃しも八月二十七日まだ子の刻の程なれば、月さへ未だ出てす暗き夜に、かの草庵の前後左右を轟々と押とり捲き、垣を壊し、戸を破る。庵中に於ける人々、這は何事と駭見れば炬火焔々として天を焦しけり。或は弓箭を持ち、兵杖を携へたり。此の夜庵室には人

すくなくして進士太郎善春こゝに宿してありければ、腰刀を引抜き、多勢か中に躍り入り、縦横に斬つてかゝれば迹につゞきて能登坊も、三類の法敵ござんなれと大に奮戦せしも、亂妨不意に起り、殊に敵は大勢なり。押重りて攻入るほどに、この兩人も防ぎ難ね。數多所深痕を負うて心ならずも引退きたり。その間法敵ども草庵に火を放つ。折しも風の烈しくて、炎十方に散亂し、黒烟天を焦しければ、日蓮も遁れてろの傍なる山王宮の石窟に入れり。法敵等日蓮の庵室を出走せるを見て、これを普く索むれども終に得ず。かくて東天將に紅ならんとせしかば、亂兵何れも散遁せり。其の頃鎌倉市中には、日蓮名越にて焼死せりとの風説一般に高かりしかば、富木播磨守は大に心痛し。伶俐なる家臣をつかはして、日蓮の所在を探索せしむ。漸くにして山王堂の山奥にこれを探ねて、秘に下總國若宮の館に往けり。富木五郎大に歡びて崇敬すること他日に倍す。頃て宅の傍に一草庵を造つて、朝暮師弟の禮を竭す。日蓮これを感じ、親ら一尊四菩薩の像を彫りて此處に安置し、法華堂と號せり。今の中山法華經寺これなり。此の富木五郎は後に中山第二世日常上人とな



れり此の時曾谷教信、太田乘明、秋元太郎等法華堂に來り、宗を改めて戒を受  
けたり。曾谷教信後年身延山に登り、剃髮して法蓮日禮と名つけられ。太田乘  
明は嫡子太郎を剃髮せしめて法弟となす。帥の阿闍梨日高これなり。

此の時鎌倉名越の庵室も去ぬる八月燒討の後番匠左官を遣して造營せし  
か、今は漸く落成せしを以て日蓮再び鎌倉に入れり。

日蓮曰く

如何に強敵重るともゆめ／＼退く心無く、恐るゝ心なかれ。縦ひ頸をば鋸  
にて引き切り、胸をひしほを以てつゝき、足にはたしを打て錘を以てもむ  
とも、命のかよはんきは、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ  
死に死するならば、釋迦多寶十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須  
臾の程に飛び來つて、手を取り肩を引きかけて、靈山へ走り給はし、二聖二  
天十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は蓋をさし幡を上げ、我等に守  
護して慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり。あらうれしや／＼  
嗚呼、此の信仰を有す、天下何の事かならざらん、百萬の兵力蓋し、大空の一塵

のみ、況んや諸宗權門の徒をや、再び本化折伏の職は、鎌倉に驛りたり。

## 第二節 伊東の法難

弘長六年五月十二日、日蓮鎌倉琵琶の小路の辻に折伏の時、取手は來りて日  
蓮を捕へぬ。問註所の吟味もなく、由比濱に引き來りぬ。伊豆に流罪の刑に處  
せんとするなり。荏原池上、秋本の檀徒、驚き走つて來るも、既に遅し。日蓮は縛  
せられぬ。兵士、棒打、圍んで人を近寄せしめず。日朗は比企が谷にあり、聞いて  
走り來る。將に纜を解いて船は出でんとす。即ち手に纜を執り、我は日蓮が弟  
子日朗なり、我も共に船を同ふせしめて伊豆に送れ。と呼び泣けり。船人叱聲  
を發し、おのれ青道心、大切の御用船に浪籍なす、不埒の奴と、持たる櫂を振り  
揚げて、纜に縋りし右の手を、力まかせに打ちたりけり。かよはき日朗、腕うた  
れて堪るべき、噫、慘憺、一聲「あ」と叫びしまゝ、磯の濱に倒れたり。

日蓮は船頭に立ち揚り、官人の衆よ、彼は幼少より我が弟子にて、しばしも側  
を離れざるものなり。只だ一言の暇を彼に告げさせよと、此方に向て呼びぬ  
「日朗、日朗」と。慕しき懐しき師の聲、急に一氣を吹きかへして見る。嬉れしや、御



船は未だ出てざりしか。南無妙法蓮華經と合す掌も右は折れ、左手のみ胸に見えたりけり。

日蓮は臉しばたき、

「いかに日朗、日頃の教訓を忘れたるか。今末法に御經を弘むれば杖もてうたれ、流罪になるべし。法華經の金言鏡の如し。廣宣流布疑ひあるべからず。赦免の時、再會せん。此の地と伊豆とは西東、海上遠しと雖も

日の東に登らん時、日朗鎌倉に有りと思はん。日の西山に入らん時、日蓮伊豆にありと知れ。」

念珠摺り、此經難持、若暫持者、我則歡喜、諸佛亦然と船の動くに従ひ、一聲高く一聲低く、嚶々波聲、蕪々たる唱題の聲と相應じ、船は遂に全く見えなくなりぬ。只だ残るものは由比濱の汐風と弟子檀越の悲聲とのみ。

忽ちにして風起り波揚る。漸にして伊豆の岬に到る。船中の官人、日蓮に向つて云ふ、今日は風強くして船行くべからず。あれ見よ、彼處の黒き森こそ伊東の浦なれ。此處より磯傳へ程近ければ歩み行くべし」と。乃ち日蓮を船より下

し岩上に置く。而して船は鎌倉さして去りぬ。

伊豆の川奈に上原彌三郎と云ふ漁夫あり。一日餌物あさらんとて扁舟に棹して伊東の岬に来る。偶々波聲の間に玄題の聲を聞く。棍ぎ寄つて見れば、一僧の魚狙岩の上に座して合掌唱題なせるなり。驚いて舟に入れ、貴僧は何とて此處にあるぞ。これは伊東の狙岩とて汐干なるこそ幸なれ。汐満つれば避くべからざる岩石の滴、危うかりし危うかりしと舌捲いて物語れり。

「我は鎌倉の日蓮と云ふ僧なり、伊豆に流罪せらるゝものなるが、爰に置き去りしは全く我を殺すの内命なり」

と聞きて彌三郎は「我は川奈に住むものにて、日に此岬に漁業して世を渡るものなるが、今宵は母の十三回忌、御僧を救いなば何よりの供養、まづ々來り給はれ」と。幸ひに滄海の一岩、知る者は只だ日蓮と彌三郎と天と海とのみ。

舟は着きぬ。潜かに妻に其の實を告ぐ。乃ち納戸に休ませ之れを匿す。潜むこと三十日。上陸の地、伊東より南二里、今に日蓮崎と云ふ。川奈は之れを去る一



里餘、今に船守山遊慶寺あり、之れ彌三郎が家なりしと云ふ。  
 たま／＼伊東の領主莊司八郎左工衛門朝高、五月中旬より疫病に惱む、醫藥  
 既に効を奏せず、祈念また驗無し、百方道盡きて命旦夕に在り、朝高の親族綾  
 部正清、日蓮を請ず、日蓮伊東和田の邸に至つて枕邊に讀經すると二病俄か  
 に癒ゆ、是れに於て朝高、正清、題目を修行し、日蓮に歸す、此の時海中より釋迦  
 佛の立像現れ、朝高藏す、日蓮に示しければ、日蓮取つて衣の袖に受け、今や末  
 法第五の時、海中の苦を忍んで出現し給ふ、是れ法華弘布の時なりと、喜涙、自  
 我偈を唱ふ、此の像は日蓮一代の隨身佛にして、今に京都本國寺に在り、此の  
 像出現の海邊に海光山佛現寺を建て、朝高の邸は之れを佛光寺と稱して存  
 す、乃ち書を川奈の彌三郎に贈る。

わざと使を以てちまさ、さけほしひ、さんせう、しなく、給候、又つかひ申さ  
 れ候は御かくさせ給へと申上候へと、日蓮心得申べき候、日蓮去る五月十  
 二日流罪の時、その津につきて候いしに、いまだ名をもさ、よびまゐらせ  
 ず候處、船よりあかりくるしみ候さとしろに感にあたらせ給候し事いか

なる宿習なるらん、過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが今末法に  
 船守の彌三郎と生れかはりて日蓮をあわれみ給歟、縦ひ男はさまあるべ  
 きに女房の身として食をあたへ洗足てうづ、其外さもこと感なる事、日蓮  
 ろしらす不思議とも申ばかりなし、殊に卅日あまりありて内心に法華經を  
 信じ日蓮を供養し給事いかなる事のよしなるや、かゝる地頭万民日蓮を  
 にくみねたむ事、鎌倉よりもすきたり、見るものは目をひらき聞く人はあ  
 たむ、殊に五月の比なれば米もとほしかるらん、に日蓮を内々にてはく、  
 み給ひし事は日蓮が父母の伊豆の伊東かわなと云所に生れかわり給歟、  
 法華經第四云及清信士女供養於法師云云、法華經を行せん者をば諸天善  
 神等或は男となり或は女となり形をかへさま／＼に供養してたすくべ  
 しと云經文也、彌三郎殿夫婦士女と生れて日蓮法師を供養する事疑なし、  
 さきにまいらせし文につぶさに書て候し間、今は不委、ことに常地頭の病  
 惱について祈禱申べきよし仰候し間、案にあつかひて候然れども一分信  
 仰の心を日蓮に出し給へば法華經へそせうとこそ思候へ、此時は十羅刹



女も争か力を合せ給はざるべきと思候て法華經釋迦多寶十方の諸佛並天照八幡大小の神祇等に申て候。定めて評義ありてそしるしをは顯し給はん。よも日蓮をは捨させ給はじいたきかゆきとの如くあてかはせ給んと思候しに、つゝに病惱なをり海中うろくつの中より出現の佛體を日蓮に給る事、此れ病惱の故也。さためて十羅刹女のせめなり。此功德も夫婦二人の功德となるべし。我等衆生無始よりこのかた生死海の中にありしか法華經の行者と成て無始色心本是理性妙境妙智金剛不滅の佛身とならん事あにかの佛にかはるべきや。過去久遠五百塵點のそのかみ唯我一人の教主釋尊とは我等衆生の事也。法華經の一念三千の法門常住此説法のふるまい也。かゝるたうとら法華經と釋尊にてをばせども凡夫は知る事なし。壽量品に云令顛倒衆生雖近而不見とは是也。迷悟の不同はしやうの四見の如し。一念三千の佛と申すは法界の成佛と云事にて候。雪山童子の前に來りし鬼神は帝釋の變作なり。尸毘王の所へにけ入りし鳩は毘首羯磨天ぞかし。斑足王の城へ入りし普明王は教主釋尊にてまします。肉眼

はしらず佛眼は此を見る。虚空と大海とは魚鳥の飛行する跡あり。此等は經文に見たり。木像即金色金色即木像なり。あぬるだが金は少魚なり死人となる。釋摩男が掌にはいさごも金となる。此等の不可思議、凡夫即佛なり。佛即凡夫也。一念三千我更成佛是也。しからは夫婦二人は教主大覺世尊の生れかはり給て日蓮をたすけ給歟。伊東とかわなの道の程は近くは候へども心はとほし。後のためにふみをまいらせ候。人にかたらずして心得させ給へ少しも人しるならば御爲あしかりぬべし。むねのうちをきて語り給事なかれ。穴賢穴賢南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

弘長元年六月廿七日

日蓮

船守彌三郎許遣之。

江川太郎左衛門吉久、伊豆韭山に歸りて居る。乃ち尋ねて來り供養す。遂に其の邸を寺とす。今の本立寺是れなり。鎌倉に在りては日蓮の無事にして伊東にあると聞き、人を馳せて衣服、糧食を贈る。日朗は鎌倉に在り、日夜由比が濱に出で、伊東の方に向ひ、師を追慕して饋經す。一夜波間に一木流來る。即ち



取て日蓮の像を彫み、之れに事ふることを師に事ふるが如し。此の像、今猶ほ東京堀之内妙法寺に在り。一たび之れを拜せば威風凛々、轉た當年を想はしむ。弘長二年の冬は來りぬ。鎌倉山の風寒くして木々の梢に雪いと白し。爰に北條重時は五月の中旬より病を起して十一月三日といふに逝きぬ。其の子長時及び時宗、連夜夢に襲はれ、病ならざるに五體麻痺して自由ならず。憐々焉恐々焉たり。僧を召んで祈禱せしむ。思へらく、是れ日蓮を流したる佛罰なりと。乃ち十一月十一日赦免狀を認む。かくて年も暮れて弘長三年とはなりぬ。三年夏五月廿二日赦免狀は伊東に來れり。日蓮即ち朝高、正清、其の他の信徒に別を告げ鎌倉にぞ歸り來れる。弟子、信徒、喜んで泣くものあり。信徒は勸めぬ。既に關東は法雨に濕ひたり。之れより外に折伏を止め、内に信徒を堅うし給へ」と。日蓮答ふ。

「未法は強毒のはじめなり。折伏を捨て、何かせん。法華折伏、破權門理の金言なれば、終に權門權教の輩を一人も無く、實め落して法王の家人となし。天下萬民諸乘一佛乘と成つて、妙法獨り繁昌せん時、萬民一

同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹風枝をならさず、雨壤を碎かず。代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術、人法共に不老不死の理、顯れん時を御覽せよ。現世安穩の證、疑あるべからざるなり。」

と、一難を経る毎に豪氣一倍來る。折伏の劔は是に於て愈銳なり。

### 第三節 小松原の法難

秋は來りぬ。雁行一字を點してうたゝ懷郷の情に堪えず。日蓮心に慈母を慕ひ、日朗日澄を従へ、小湊の實家に至る。家に入らんとす。聲喧し、賊よ、樂よと。入れば慈母の病にありしが、今や藥効無く不歸の旅に門出したるなり。あゝ斷腸聲は涙と共に胸より出てぬ。

〔日蓮に侍る〕

と、あゝ散りし花枝にかへらず、覆りし水は盆に來らず。慈母は遂に歸らずならんとす。讀經三昧、介抱寢食を忘る。幸なるかな。慈母は蘇生したり。

〔孝は高なり、天は高かけれども、孝よりは高からず。孝は厚なり、地厚かけれど



も孝より厚からず

(開目鈔)

「聖賢の二類は孝の家より出たり。何に況んや佛法を學せん人。知恩報恩なかるべしや」

(開目鈔)

「たとひ親は物に覺えずとも惡ざまなる事は云とも聊かも腹を立てず怒れる顔を見せず、親の云事に一分も違へず、親にまさき物を與ふべしと思ふて、せめてやるもかにくば一日に二三度笑みて向へ」

(南部氏書)

之れを讀んで泣かざる者は人の子にあらず、之れを思うて泣かざる者は人の子にあらざるなり。忠臣は孝子の門より出づ、佛帝に忠なる日蓮の如き者は、孝子の門より出でざらんや。父母に孝ならざるもの、あに一切衆生を救はんや。父母に孝ならざるもの、豈に國を治め世を経るを得んや。

かくて日蓮は爰に介抱に物語に思はず、月日をかさね、弘長の三年も暮れて、文永の元年とはなりぬ。因りて清澄の舊師道善坊に教養の恩を報いんとて、花房の蓮華寺に入つて此よしを清澄に告ぐ。道善大に喜び、紫竹の杖に腰を掛け、險しき坂をたどりてぞ來り見る。老淚斑々、しばらく言ふ能はず。日蓮見

てたゞ涙千行。

是より先、駿河國庵原郡松野の邑主に松野六郎左衛門と云ふものあり。日蓮に歸依して檀越となる。其の子に松千代と云ふあり。巖山に登りて台家の僧となる。國に歸りて岩本實相寺に遊び、學頭智海に遇つて鎌倉に日蓮あるを聞く。即ち行いて師弟の契をなす。是れ即ち六老僧の一人たる蓮華院日持聖人その人にして、後ち北海に渡りて海外布教を企て、錫を朝鮮に飛ばせり。智海の弟子伯耆坊も既に來つて弟子となれり。是れ即ち日興聖人其の人なり。安房國男金村に小林民部實信と云ふ者あり、一子藤十郎歳十一なるを引き連れて來り、弟子となす。是れ即ち延山第二世の日向聖人其の人なり。爰に安房國天津の領主に工藤左近之丞吉隆と云ふ者あり。日蓮に歸す。その華房にあると聞き、使を遣して日蓮を請ず。時に文永元年十一月十一日なり。日蓮は請に應じ、吉隆の邸に趣く。日朗、日澄、鏡忍、乘觀、歸依の男女十餘人を率ゐ、高聲に玄題を唱へ、霜に荒れたる巖徑を経て松林鬱鬱たる原野に出づ。此の所を小松原と云ふ。



一難は起りたり。箭飛び、劔閃く。日蓮を斬らんとするなり。日蓮を殺さんとす  
るなり。鏡忍、左藤次、乗觀等、物の用に立つもの僅かに四五人。日蓮に怪我あら  
せじと力を盡して死戦す。馬に跨つて一武士は現れたり。縦横に砂を蹴て指  
揮す。砂煙濛々たり。雨箭霏々たり。鏡忍坊は遂に倒れぬ。左藤次また射らる。乗  
觀また危うし。工藤吉隆は馳せ來れり。二人の武士を率ゐて來れり。馬上の武  
士、弓を吉隆に放つ。箭は外れたり。吉隆馬上の武士に向て放つ。兇徒十餘人。走  
つて吉隆を圍む。劍は雨の如く箭は霰の如し。無慘。吉隆は倒れぬ。馬上の武士  
は吉隆に眼もかけず。鬪然として日蓮の前に來れり。此の方は徒歩。彼方は馬  
上。二尺七寸の大刀を真向に振りかざし。日蓮目がけて打ち斬つたり。火は出  
てぬ。又念珠に當りしなり。危いかな。日蓮は斃れんとすなり。時に夕風颯然と  
して起り、白雪降り出で、日は全く小松原に暮れぬ。

そも此の馬上の武士は宗旨建立の時より恨を吞んで待ち待ちし念佛  
の信者。地頭の東條左衛門景信なり。景信の日蓮が華房より天津に至ると聞  
くや、念佛の徒、朗黨をかり集つめ、小松原に伏せて日蓮を要撃したるなり。

此の地に今寺あり。小松原鏡忍寺と云ふ。

かくて東條景信は此の時顔に微傷を負ひしが、其の疵漸次爛れ出し惣身全  
く腫れ爛れたり。熱は起りぬ。五肢は痛みぬ。呻吟し咆哮す。妻子も近寄るべか  
らず。惡臭室に満つ。親族も入るべからず。遂に七顛八倒の中に歿せり。里人以  
て佛罰となす。

かくて日蓮は小松原の難を逃れ、山路を雪夜にたどり、市ヶ坂と云ふ所の道  
路の洞穴に潜む。雪益々降つて疼痛愈々甚し。適々老婆あり。腰に箆して來る。  
見る。日蓮の額に刀創あり。流血淋漓たり。大に驚き其の被る所の綿朝を取り  
之れを供ふ。既にして日朗日澄は探り來れり。吉隆が父行光亦た來る。乃ち日  
蓮を請じて天津の館に到る。

#### 第四節 元使の來朝

文永二年八月十七日相模武藏地大に震ふ。十二月四日彗星現る。三年正月彗  
星また現はる。六月地震ふ。四年五月日蝕す。鎌倉の人士驚くこと限り無し。將  
軍家は掃部頭範元、晴茂、國繼等の司天曆學の輩をして之れを卜はしむ。皆な



凶變の兆を以て答ふ。幕府愈々たり。

蒙古は來れり。蒙古は來れり。元の世祖忽必烈、亞細亞を征服し、歐洲を征服し、霸を東歐西亞に唱ふ。勢を以て日本を呑まんとす。其の國の至元三年、其の臣黑的を使し、書を日本に贈る。實に文永五年一月なり。幕府乃ち之れを京都朝廷に奉ず。其の書に曰く

上天ノ命ヲ眷クタル大蒙古國皇帝、書ヲ日本國王ニ奉ス。朕、惟ルニ古ヨリ小國ノ君、境土相接セバ、尙ホ務メテ信ヲ拂ジ、時ヲ修ム。況ンヤ我祖宗天ノ明命ヲ受ケ、區夏ヲ奄有シ、遐方異域威ヲ畏レ、德ニ懷ク者、悉ク數フベカラズ。即位ノ初メ、朕ハ高麗無辜ノ民、久シク鋒鏑ニ瘡ヲ以テ、即チ兵ヲ罷メ、其疆域ヲ還シ、其旋倪ヲ反サシム。高麗ノ君臣咸ク載テ來朝ス。義ハ君臣ナリト雖モ、歡ハ父子ノ若シ。王ノ君臣ヲ計ルニ亦タ己ニ之ヲ知ル。高麗ハ朕ノ東藩ナリ。日本ハ高麗ニ密邇ス。開闢以來亦中國ニ通ゼントス。朕ガ躬ニ至テ一乗ノ使以テ和好ヲ通ズル無シ。尙ホ恐クハ王國之レヲ知テ、審ニセザランカラ。故ニ使ヲシテ、書ヲ持シ、朕カ志ヲ布告セシメントス。冀クハ今日

リ以往、間ヲ通ジ、好ヲ結ビ、以テ相親睦セン。是レ聖人カ四海ヲ以テ家ト爲ス。相通好セズンバ、豈ニ一家之レ理ナランヤ。以テ兵ヲ用キルニ至テハ、夫レ孰レカ好ム所ゾ。王其レ圖レ。不宣

これぞ日蓮が去文永五年後正月十八日、自西戎大蒙古國可襲日本之由、牒狀を渡す。日蓮の去文應元年如勘立正安、正安國論、于今少も不違符合しぬ。此書は白樂天の樂符にも越え、佛の未來記にも不劣。末代の不思議、何事か是に過ぎんと云ひしものなる。

京鎌倉の議論紛々たり。遂に其の書を以て無禮なりとして返翰せず。其の使者を追ふ。

是れより先、日蓮の天津の館を出づるや、下總に行きて海東郡鼻和の眞言の寺に泊す。之れを改宗せしめ、寺を蓮乘寺と名づく。下野に出て、藤原の里を經、宇都宮に至る。城主下野守景綱、日蓮に歸す。後ち其の寺を邸とす。今の長宮山妙正寺即ち是れなり。時に慈母蘇生してより四年、遂に逝きぬ。日朗、日澄、工藤行光、佐久間重貞、小林實行等、日蓮に隨ひ唱題他事無く、葬送を了へぬ。日蓮



は此の所に百日の讀經をなし房州を立て復た上總國に向ひ垣生郡にかゝらんとす。雨降り出てたり茂り合ふ椎木の間には辻堂あり雨を避けて入ればこゝは傳教大師の開基にて大悲山竺森寺とて觀世音を安置す。日蓮乃ち

うきに降る、泪の雨にぬれじとて、  
けふ竺森を身に着るかな

と此の所に一夜を明す。夜は明けたり東方紅を呈す。時に黒田の人、高橋五郎時光と云ふ者あり、此の堂に来る。日蓮を迎へて其の家に至る。藻原の邑主齋藤兼綱また日蓮を請し改宗して檀越となる。よりに鎌倉に歸らんとし途に若宮の里に至り富木胤繼を訪ふ。迎へられて供養を受く。文永四年を若宮の邸に送りて五年の春は來りぬ。古河の邑主千葉某日蓮に歸して其の子を弟子となす。日頂聖人即ち是れなり。日蓮喜んで日頂を伴ひ空にたなびく霞の雲、下總を出て、鎌倉名越の庵にぞ歸り來りける。是の時に當りて元使の鎌倉に來れるを聞く。日蓮遂に憂國の情、禁ずる能はず、即ち誓して奉行宿谷先則に送る。

其後書絶エテ申サス不審無極候。抑去ル正嘉元年己丁八月二十三日戌亥尅大地震、日蓮諸經ヲ引イテ之ヲ勘フルニ念佛宗ト禪宗等ノ御歸依有ルノ故ニ日本ノ守護諸善大神、膜恙ニ依リ起ヌ所ノ災ナリ。若シ此對治無キ者ハ他國ノ爲メニ此國ヲ破ル可キノ由勘文一通之レヲ撰ブ。正元二年庚申七月十六日御邊ニ付シ奉リ、故最明寺入道殿ニ之ヲ進覽セリ。其後九ケ年ヲ經、今年大蒙古國牒狀之有由風聞等云云。經文ノ如クンバ彼國ヨリ此國ヲ賣ムル事必定也。而シテ日本國中、日蓮一人西戎ヲ調伏ス可キノ人タリ兼ネテ之ヲ知り、論文之ヲ勘フ。君ノ爲メ國ノ爲メ神ノ爲メ佛ノ爲メ内奏ヲ經ラルベキ歟。委細ノ旨ハ見參ヲ遂ゲ之ヲ申スベシ。恐々謹言。

文永五年八月二十一日

日蓮

宿谷左衛門入道殿

日蓮益々憂國の情に堪へず、即ち誓を執權時宗に贈る。

謹テ言上セシメ候、抑正月十八日西戎大蒙古國牒狀到來スト、日蓮先年諸經要文ヲ集メ之ヲ勘ヘタルコト立正安國論ノ如ク少シモ違ハズ符合シヌ。



日蓮ハ聖人ノ一分ニ當レリ未萌ヲ知ルカ故也。然ル間重ネテ此由ヲ驚シ奉ル。急ニ建長寺壽福寺極樂寺多寶寺淨光明寺大佛殿等ノ御歸依ヲ止メ。不然重テ又四方ヨリ責メ來ルベシ。速カニ蒙古國ノ人ヲ調伏シテ我國ヲ安泰ナラシメ給ヘ。彼レヲ調伏セラレシ事。日蓮ニ非レハ協フベカラズ。諫臣國ニアレバ則チ其國正シク。爭子家ニアレバ其家直シ。國家ノ安危ハ政道ノ直否ニ在リ。佛法ノ邪正ハ經文ノ明鏡ニ依ル。失レ此國ハ神國也。神ハ非禮ヲ稟ケズ。天神七代地神五代ノ神々其外諸天善神等ハ一乘擁護ノ神明ナリ。然レモ法華經ヲ以テ食トナシ正直ヲ以テカトス。法華經ニ云ク諸佛教世者大神通ニ住シテ衆生ヲ悦ス爲メノ故ニ無量ノ神力ヲ現スト。一乘棄捨ノ國ニ於テハ豈ニ善神怒ヲ成サマランヤ。仁王經ニ云ク一切聖人去ル時七難必ズ起ルト。彼ノ吳王ハ伍子胥カ詞ヲ捨テ、吾カ身ヲ亡シ、桀紂ハ龍比ヲ失テ國位ヲ喪ス。今日本國既ニ蒙古國ニ奪レントス。豈ニ歎カザランヤ。豈ニ驚カザランヤ。日蓮カ申ス事御用キ無クンバ定テ後悔之レ有ルベシ。日蓮ハ法華經ノ御使也。經ニ云ク則チ如來ノ使ヒ如來ノ所遣

トシテ如來ノ事ヲ行スト。三世諸佛トハ法華經也。此由方々ヘ之ヲ警シ奉ル。一所ニ集メ此評論有テ御報ニ豫ル可ク候所詮ハ萬祈ヲ抛テ諸宗ヲ御前ニ占シ佛法ノ邪正ヲ決シ給ヘ。洞底ノ長松未ダ知ラズ良匠ノ誤リ關中ノ錦衣ヲ見ハサルハ恐人ノ失ナリ。三國佛法ノ分別ニ於テハ殿前ニ在リ。所謂阿闍世陳隋桓武是レ也。敢テ日蓮カ私曲ニ非ス只偏ニ大忠ヲ懷ク故ニ身ノ爲メ之レヲ申サズ神ノ爲メ君ノ爲メ國ノ爲メ一切衆生ノ爲メニ言上セシムル所也。恐々謹言。

文永五年<sub>辰戌</sub>十月十一日

日蓮

嗚呼。一比丘にして日本の勢家北條執權に書を贈る。豈に治安に妨害ありと云はざらんや。其の處に非れば其の人ありと雖も其の言を用ゆず。小人朝に頭を聚めて遺賢野に在り。噫。今も昔もかわらぬこそ痛ましけれ。建長寺道隆に贈れり。

夫レ佛開軒ヲ竝ヘ。法門室ニ拒ル。佛法ノ繁榮ハ身毒支那ニ超過シ僧寶ノ形儀ハ六通ノ羅漢ノ如シ。然リト雖モ一代諸經ニ於テ未タ勝劣淺深ヲ知



ラズ併テ禽獸ニ同ジ。忽チ三德ノ釋迦如來ヲ抛テ佗方ノ佛菩薩ヲ信ズ。是レ豈ニ逆路伽耶陀ノ者ニ非ズヤ。念佛ハ無間地獄ノ業。禪宗ハ天魔ノ所爲。眞言ハ亡國ノ惡法。律宗ハ國賊ノ妄説ト云云。爰ニ日蓮去ル文應元年ノ比。勘之書ヲ立正安國論ト名ケ。宿屋入道ヲ以テ故最明寺殿ニ奉リヌ。此書ノ所詮ハ念佛眞言禪律等ノ惡法ヲ信スル故ニ天下災難頻リニ起リ剩ヘ佗國ヨリ此國ヲ賣破ル可ノ由之ヲ勘ヘタリ。然ルニ去正月十八日牒狀到來スト日蓮カ勘ヘタル所ニ少シモ違ハス符合セシム。諸寺諸山ノ祈禱威力滅スル故歟。將又惡法ノ故ナル歟。鎌倉中ノ上下万人。道隆聖人ヲハ佛ノ如ク之ヲ仰ギ良觀聖人ハ羅漢ノ如クシテ尊ム。其外壽福寺多寶寺淨光明寺長樂寺大佛殿ノ長老等ハ我慢心充滿未得謂爲得増上慢ノ大惡人ナリ。何ゾ蒙古國ノ大兵ヲ調伏セシムベケンヤ。剩ヘ日本國中ノ上下萬人悉ク生取ニ成ル可ク今世ニハ國ヲ亡シ後世ニハ必ズ無間ニ墮セン。日蓮カ申ス事御用ヒ無クンバ後悔之レ有ルベシ。此趣鎌倉殿宿屋入道殿平左衛門殿等ヘ之ヲ進狀セシメ候。一處ニ寄リ集リテ御評議有ル可ク候。敢テ日蓮カ

私曲ニ非ス只經論ノ文ニ任ス處也。具ニハ紙面ニ載セ難シ併テ對決ノ時ヲ期ス。書ハ言ヲ盡サス言ハ心ヲ盡サス。恐々謹言。

文永五年 辰十月十一日

日蓮

進上建長寺道隆聖人

また極樂寺良觀に贈れり。

西戎大蒙古國簡牒ノ事ニ就テ鎌倉殿其外ヘ書狀ヲ進メ令メ候。日蓮去ル文應元年ノ比。勘ヘ申セシ立正安國論ノ如ク毫末計リモ之ニ相違セス候。此事如何。長老忍性速カニ嘲哂ノ心ヲ翻シ早ク日蓮房ニ歸セシメ給ヘ。若シ然ラズンバ輕賤人間者與白衣說法ノ失。脱シ難キ歟。依法不依人ハ如來ノ金言ナリ。良觀聖人ノ住處ヲ法華經ニ説ヒテ曰ク。或有阿練若納衣在空閑ト阿練若ハ無事ト翻ズ。爭カ日蓮説奏スル條住處ト相違セン。併ナカラ三學ニ似タル矯賊ノ聖人也。僭聖慢上慢ニシテ今世ハ國賊。來世ハ那落ニ墮落セン。必定セリ。聊カモ先非ヲ悔エハ日蓮ニ歸スベシ。此趣キ鎌倉殿ヲ始メ奉リ建長寺等其外披露セシメ候。所詮本意ヲ遂ケント欲セハ對決



ニ如カズ。即チ三藏淺近ノ法ヲ以テ諸經中王ノ法華ニ向フハ江河ト大海ト攀山ト妙高トノ勝劣ノ如クナラン。蒙古國調伏ノ秘法定メテ御存知有ル可ク候歟。日蓮ハ日本第一ノ法華經ノ行者也。蒙古退治ノ大將タリ。於一切衆生中亦爲第一トハ是レ也。文言多端理ヲ盡ス能ハズ。併テ省略セシメ候。恐々謹言。

文永五年 辰戌 十月十一日

謹上極樂寺長老其觀聖人

日蓮

あゝ好んで此の書を致さんや國の亡滅を思へばなり。是れに於て門弟信徒に贈る。

大蒙古國ノ簡牒到來ニ就テ十一通ノ書狀ヲ以テ方々へ申セシメ候。定メテ日蓮弟子檀那流罪死罪一定ナラン耳。少シモ之ヲ驚クコト莫レ。方々へ強言申スニ及バズ。是レ併カラ強毒ノ故也。日蓮庶幾セシ所ナレハ各々用心有ル可シ。少シモ妻子眷屬ヲ憶フコトナカレ。權威ヲ恐ル、コトナカレ。今度生死ノ縛ヲ切テ佛果ヲ遂ゲシメ給へ。鎌倉殿、宿谷入道、平左衛門尉、彌源太建

長寺、壽福寺、極樂寺、多寶寺、淨光明寺、大佛殿、長樂寺、仍テ十一通ヲ書テ諫訴セシメ候ヒヌ。定テ子細有ル可シ。日蓮カ所ニ來テ書狀等披見セシメ給へ。恐々謹言。

文永五年 辰戌 十月十一日

弟子檀那中

日蓮

此の師にして此の弟子檀那あり。俛首振尾、媚を檀家權門に嚮々の宗教家たるもの須く、嗚死して可なり。

蒙古の小中大夫秘書監張良弼は來れり。時に文永八年なり。此の年春より雨降らず。麥苗全く枯れんとす。僧行敏、日蓮を惡み、罵つて書を日蓮に贈る。日蓮答ふ。行敏等大に怒り北條執權に讒訴す。遂に日蓮は問注所に召ばれたり。詰問あり。安國論の事を以て答ふ。

復た九月十二日朝、立正安國論を手にして平左衛門が邸に至る。即ち立正安國論の旨を陳して歸る。北條一門は評定所に會しぬ。日蓮上を蔑にし下を惱し、佛法に事よせて國を亂す者也。其の罪輕からず。以て斬に處すべしと評



定所に於て遂に議は決しぬ。實に文永八年九月十二日なり。

### 第五節 龍口の法難

時は申の刻、日蓮正に松葉ヶ谷に在て説教の最中なり。平の左衛門が郎黨三百餘人、哄聲擧げて松葉ヶ谷を襲ふ。日蓮即ち立像の釋迦、法華經を手に取るより早く懐にす。兵士其の經を奪ひ取て日蓮を打つ。これぞ日蓮が

余に三度の高名あり、二には去る文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向て曰く、日蓮は日本國の棟梁なり、手を失ふは日本國の柱を倒すなり。只今に自界叛逆難とて、同士訴し、佗國侵逼難とて、此國の人々打殺るゝのみならず、多く生捕りにせらるべし。建長寺、壽福寺、極樂寺、大佛長樂寺等の一切念佛者、禪僧等が、寺塔をばやきはらひて、彼等が頸を由比が濱にて切らずば、日本國必ずほろぶべしと申し候ひ畢ぬ。

と筆せしものなる。

日蓮は遂に縛せられたり。長刀連三百人いと嚴めしく取り圍み瘦せたる馬

に薦延き、此の上に日蓮は投げ乗せられたり。武藏前司朝直之を下知し、魚町の四辻を出て小町通に引き回す。嗚呼、本化の大士は強盜殺人のそのの如し。若宮小路に出て鶴ヶ岡赤橋の前、烏居の邊に至る。日蓮は突如として落つるが如く、馬より下る。警固の武士は驚きたり。呆然其の手を失す。日蓮即ち叫んで曰く

各々喧しくし給ふ勿れ。日蓮最後に臨んで八幡大菩薩に云ふ所あらんと欲す。八幡大菩薩、眞神か邪神か。昔し和氣清麿首刎ねられんとしたるとき、天に月と現れ、傳教大師、宇佐八幡に法華經を講ぜし時、紫の袈裟を希施せしと聞く。今日蓮は日本第一の行者なり。今生に三災七難を攘ひ、未來に無間地獄を助けん爲めに演る法門なり。大聖世尊靈山に於いて法華經末法に廣る時、天照八幡は行者を守護すべきこと三度も誓ひしにあらずや。今日蓮頸切られん時は釋尊に對して日本國の八幡は邪神なりと言上すべし。

と云ひ畢てまた馬に乗る。長谷の小路を渡り、御靈の社の前に至りし時、熊王



四郎を召し四條金吾殿の宅は此詞の比なるぞ疾く行きて我最期を告げよと。金吾來り見て大に驚く。日蓮徐ろに云へらく

「日蓮貧道の身に生れて父母の孝養も心にたらず國恩を報ずべき力も無し、今度頸を法華經に奉り其の功德を父母に回向し其餘をば弟子檀那等にはふくべし、各々なげかせ給ふべからず」

と。金吾涙をおさへ、死出の旅途を送り奉ちんと馬の口に縄りて行く。馬は極樂寺の切通を過ぎて七里濱に出づ。南は海波漫々たる相模灘、北は連山相並ぶ稻村山、吹き來る秋風、凜として刀の如し。されど北條の迷夢は未だ斷せられざるなり。空にかゝる十二月の月は皎として鏡に似たり。されど北條の盲眼は未だ明かならざるなり。

此の沿道の村落に獨り住みなす老婆あり、常に大士に歸依す。今日しも日蓮が由比濱に引かるゝと聞き驚くこと限りなく、何とか供養しまつらんと、用ひ残りし赤豆粒煮て赤飯を作らんとす。既にして夜稍々深く人聲あり、見れば松火提灯、煌々天を焦さんばかりなり。赤豆は未だ煮ぬず、狼狽また狼狽偶

々よし重陽の節句、赤飯に祝ひ残りし胡麻鹽あり、即ち握りし飯に胡麻鹽を加へ、鍋蓋の裏うちかへし載せてぞ轉ぶがまゝに歩み出づ。日蓮喜んで之れを受く、これぞ九月十二日御首繼餅とて日蓮宗にて胡麻の餅を供する由來なる。

龍口に來りぬ、四顧平砂渺々、圍らすに柵を以てす。柵の外には日朗、日進、日興、日向、四條金吾、池上宗仲、荏原の檀徒、歸依の老幼、唱仰の男女、唱題の聲、嘘咳の音、磯うつ波に相應ず。依智三郎直重、三尺二寸の名刀、蛇胴丸を引きひん抜き、日蓮の背後にぞつ立ちたり。篝火炎々、蛇胴の名劍を照し、風光最も凄凉。直重俄かに小腰を屈め、涙を揮ひ、日蓮御坊よ、御身は大徳の沙門なりと聞く、強盜夜討の罪もなく、謀叛殺害の科も無く、唯だ題目を弘むるが故、諸宗の誹謗にかゝつて唯今命に及ぶ、此の直重、齡既に五十なり。暮命免れがたしと雖ど、此の老の身を以て貴僧に刃を加へ奉らんこと、後世の咎、苛責の獄をいかにせん。今より御坊、念佛無間の言をやめ、其の題目を棄て去らば奉行に陳して我か身を以て御身に替へん。殺生の罪、僧を殺すを重しと聞く、今世の樂は夢の



中の夢未來の業苦を如何にせん。世上に罪無き御身なり何ぞ御救なかるべきや」と。懇々の言、肺腑より出て、涙落ちて日蓮の膝に在り。日蓮答ふ。日蓮は法華經の爲め身を捨てんこと常に願ふ所なり。徒らに朽ちん身を法華經の御爲めに捨進らせん事、あに石に金を換ふるにあらずや」と。法華經に云く。無有生死若退若出亦無在世及滅世者。又云く。爲度衆生故方便現涅槃。嗚呼遠觀し來れば白刃固より一片の紙屑のみ。豈に動くべけんや。動かざるなり。遂に直重は決せり。刀を上段にかまへぬ。あゝ蛇胸丸の名劍は今や末法救世の大士を汚さんとするなり。危いかな。舟に乗つて馬を走らしむ。死を去ると一寸。

龍口當年虎口難、

龍光影裡泰山安、

道維猶在晴砂上、

一片秋霜月下寒、

(元政上人)

蛇胸の名劍も金剛不壞の妙體は斬る能はざるなり。平左衛門は馬を走せて

鎌倉に注進す。日蓮斬るべからずと。鎌倉にても亦た赦免狀を發し一士をして馬に鞭て龍口に趣かしむ。金澤洗の川邊にて相合ふ。赦免狀と申告狀、取替へ渡して共に馬を戻して去る。法華經に云く。彼ノ執ル所ノ刀杖、尋テ段々ニ壞ル」と。嗚呼、それはれの謂ひか。

時に鎌倉より下知あり。曰く。日蓮は相摸國愛甲郡依智郷本間六郎左衛門重連の邸に預くべしと。

是の時に當りて日昭は名越の菴室にあり。出て、某所に潜む。鎌倉より雜兵來る。松葉ヶ谷の草菴を毀たんとすなり。日朗庵室に在り。即ち捕はる。側に十二三ばかりの小童あり。名を日進と云ふ。走つて鎗る。日朗師を縛するならば我をも縛せと手を背にして動かず。日朗臂を以て避けんとす。背かず。嗚呼、此の師あつて此の弟子あり。七百年の今日に於いて之れを思ふ。暗涙斑々袖を濕さずんばあらざるなり。雜兵遂に共に縛して去り。鎌倉土牢に投ず。

九月は過ぎぬ。十月となりぬ。蟋蟀獄底に聲悲しく。凄風獄窓に音寒し。夜半の霜曉の鐘、宿谷が土牢に籠められたる日朗の心情や如何。



手簡來れり、懐しき師の君より來れり、凍れる手は手簡を取りぬ、封切る、噫、落  
 涙、あゝ、悲涙、枕爲めに凍つて冷ます、冷なり。

日蓮は明日佐渡國へまかるなり、今夜の寒さに付ても牢の内のありさま  
 思ひやられて痛はしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部、色心二法、共にあ  
 そばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をたすけ給べき御身也、法華經  
 を餘人のよみ候は口ばかり言ばかりはよめども、心はよまず、心はよめと  
 も身に讀まず、色心二法共にあそばされたるこそ、貴く候へ、天諸童子以爲  
 給使、刀杖不加、毒不能害と説かれて候へば、別の事はあるべからず、簡をば  
 出させ候は、いとく、來り給へ見たてまつり見えたてまつらん、恐々謹  
 言。

文永八年辛未十一月九日

日蓮

筑後殿

あゝ、情緒纏綿、千歳の下、人をして合掌瞑目、知らず南無妙法蓮華經と唱へし  
 む。

是より先日蓮の龍口を出て、本間の邸に來るや、警固の武士十人ばかり日  
 蓮の前に來り手をつき頭を垂れ、皆昨夜の罪を謝し念佛を止めんことを契  
 ふ、珠數を切るものあり、合掌するものあり、共に題目を唱へつゝ來れる平左  
 衛門の後を追ひ鎌倉さして去る。

今夜庭前に月に向て讀經す、落星あり梅樹にかゝる、今に星下の靈蹟と云ふ  
 即ち是れなり、鎌倉より下知あり、六郎左衛門重連が預りとして佐渡に流す  
 べしと、乃ち日蓮は依知を發せり、上人自ら筆して

九月十二日御勘氣を蒙て今年十月十日佐渡國へまかり候也  
 となせるもの即ち是れなり。

### 第六節 佐渡の法難

二十一日越後國三島郡寺泊に着す、廿七日海上波穩なるが如し、乃ち見送の  
 者を悉く歸へし、單身佐渡に渡る、船は角田籠に至らんとす、時に暴風起る、船  
 舶簸揚し、渾沔鞞鞞、逆浪天を蹴り、怒濤空に躍る、舶は覆らんとするなり、舟人  
 聲を擧げて叫ぶ、皆な顔色無し、小松原頭の劍、伊東の難龍口の刃、松葉ヶ谷の



火、一難既に去て一難また来る。今や聖日蓮は佐渡が沖の魚腹に葬られんとするなり。噫、天の偉人を遇する、何ぞ夫れ冷かなるや。

鎌倉を出てしより日々に強敵重るが如く、有と在る人は念佛の持者なり。野に行き山に行くもひたすら草木の風に随てそよめく聲も敵の我を責むるかと思え、漸く國にも著きぬ。北風の習なれば冬は殊に風はげしく、雪深し、衣薄く、食乏し、根を移され、橋の自然に根と成れるも身の上につき知られたり。栖には尾花荆宣生ひ溢れる野中の五、三昧原に朽破れたる草堂の上は雨漏り壁は風もたまらぬなり。晝夜耳に聞ふるものは枕にさゆる風の音と朝暮眼に遮る者は遠近の道を埋むる雪、霰なり、現身に餓鬼道を経、寒地獄に落ちぬ。彼の蘇武が十九年の間、胡國に留められて雪を食とし、李陵が巖窟に入て六年、箠を著て過ごしけるも我身の上なり。

とは實に聖日蓮の筆したる三昧堂の光景なり。此の所はこれ死人を棄つる三昧原、四顧茫茫、寒草徒らに亂れ、裂塔片、碎累々として其の主を知らず、陰風地を捲いて冷氣骨を透し、夜漫に長うして鬼火燃ゆ。時に北海の怒濤雲を起

し、風伯寒を射て肌爲に裂く、積雪は軒を没し、堅氷は鬚にあり、目を擧げて言笑すれども誰と共にか歡をなさん、身に隨ふものは立像の釋尊と、一卷の法華經が訪るものは北海の濤聲と、一痕の残月か、食ふに物無く、寐ぬるに聲無し。數旬の歷程、角の岬の颶風、身は飢えぬ、骨は瘦せぬ、握て食ふものは、噫、北海の白雪か、袈裟は切れぬ、衣は破れたり、臥して被るものは、噫、一枚の破蓑か。

聖日蓮曰く

今、日蓮末法に生れて妙法蓮華經の五字を弘めてかゝる責に遇へり、佛の滅後二千餘年、日蓮の外、法華經の故にかくまで身を苦しめたる者ありとも覺えず。日蓮本國の萬人は悪まば悪くめ、釋迦多寶十方の諸佛にだに譽められまらせば、其面目よろこび身にあまれり。

と。氣魄凛々、天爲に狭く、地爲めに小なり。

初め日蓮が角の岬の颶風に遇ふや、傳へ云ふ棹取つて波に題目を記す、船直ち静り、風止めりと。二十九日佐渡國雜太郡小倉に宿し、十一月一日重連の下知を以て此塚原三昧堂には追放せられたるなり。



爰に一難は起りたり、念佛門の兇徒あり、外道の日蓮彌陀如來の大怨敵、諸万人の惡智識窮かに之れを殺しなば千僧供養のそれにも勝らんと。知らざるなり、日蓮は立像の釋尊に向て讀經三昧に入れり、雪は益々深く夜いよ／＼更けぬ、日蓮は食せざる五日五夜、雪を以て濕したる讀經の聲、噫、慘憺、嗟、呼、凄涼、兇徒は破塔の蔭に窺ひたり、流星光底長蛇現れんとす、あゝ危いかな、累卵の如し、殆いかな、あゝ朽索に似たり、縶の犬はます／＼、堯を吠へ、妬の客は愈々由を刺す。

兇徒は思ひぬ、たかの知れたる瘦道心、眞二つになすは掌を反すよりも易し、一先づ法門を糺し返答窮するに於てなすとも何ぞ晚からん」と、堂内に押し入りたり、呼べり、我は念佛の行者なり、諸宗無得道法華一人成佛とそも其證據いづこにある」と、倉卒の難門、日蓮騷はがず、

「道雪に没し夜星なき時、來りて法を問はるゝは是れや如來の使なるべし、さても御身の頼む淨土の三部、彌陀經の其の中に舍利佛尊者其の經に得道無くして法華經第二の會座にして妙法蓮華經を以て本

光如來となり給ひしとぞある。その上、觀經彌陀四十八願の其の中にも正法を誘ふものは救じと彌陀如來に契ひしにあらずや、かゝるを知らざるか、はしたなき行者かな

と諄々説いて教へたり、兇徒は刀を地に抛ち、頭を垂れ膝屈して問ふこと數回、之れに答ふるに流るゝが如し、遂に兇徒は謝せり、懺悔せり、而して願ひぬ、「徒弟になし給はれ」と、嗚呼本覺の眞心は己心の中に存す、日蓮を斬らんとせし邪惡の劍今は變じて切る己が煩惱、雪に頭を擦り埋め、徒弟たらんことを願ふ數次、妻は夫の歸りの遅さを案じ探り來て之れを見る、また聞いて念佛の珠數を切る、是れに於て兇徒の夫妻は法華の樂園に入りぬ、此の改宗の門徒こそ遠藤武者盛遠四世の孫、遠藤左衛門爲盛とてさる罪ありて佐渡に流され髪を剃て夫妻共に念佛の徒となりしなれ、之れより爲盛夫婦、日に夜に薪を運び食を送り、日蓮を塚原に供養して日もまだ足らず、夫婦は法名を受けぬ、夫を阿佛坊日得といひ、妻を千日尼といふ、法華經に曰く、若人欲加惡力杖及瓦石、則遣變化人爲之衛護と信なるかな、信なるかな。



一難はまた生じたり。佐渡に住する諸宗の僧徒、日蓮の化導をうらみて之れを殺さんと計るなり。事洩れて本間重連の警むる所となり。法戦を開いて之れを賈むることせり。正月十六日、數百の僧徒は三昧堂に集りたり。越後、越中、出羽、奥州、信濃、佐渡、念佛あり、眞言あり、天台あり、經を手にし論を肩にし、法門を以て日蓮を賈め屈せんとするなり。日蓮聞きて朗黨を率ゐ、鋸かに戒むる所あり。眞言亡國の證を詰る者あり、龍樹の大論九卷を以て之れに答ふ。念佛無間の故を難する者あり、善導の死を以て之れに答ふ。千羊の皮は一狐の腋に如かず。諸宗の僧徒は全く説き破られたり。呆然たる者あり、叩頭謝する者あり。泣く者あり、叫ぶものあり。怒て去る者あり。重連大に感じ聲を立て、呼べり。法門に塞りたる者は懺悔せよ。聖人の徒弟となれ。さなくば疾く歸るべしと。かくて重連も立ち歸らんとす。

日蓮は呼びぬ。何日頃鎌倉へ上り玉ふや。七月頃、日蓮曰く、御身疾く鎌倉に歸られよ。鎌倉殿は我が言を用ゐざるにより、今や合戦起りたらんと。上人何をの給ふぞ。今や天下泰平にして弓は袋に大刀は鞘と云ひ捨て畢て立ち去り

けり。

二月十八日早船は來れり。曰く、京都に戦ありと。亦た曰く、鎌倉に戦ありと。重連は驚きたり。塚原に走りぬ。日蓮の前に跪きぬ。謝して云ふ。上人の御言全く符合しぬ。これにては蒙古の來襲、疑あるべからず。さらば念佛無間も一定ならんと。遂に宗を改めて全く日蓮に歸依す。日蓮、重連に向ひ教へて云へらく。

日蓮は幼若なれども法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし。僅かの日照大神、正八幡など申すは此國には重んずれども梵天帝釋、日月四天王に對すれば小神ぞかし。されど此社人などをあやまちぬれば只人を殺す七人半など申すぞかし。大政入道、隱岐法皇等の亡び玉ひしは是れ也。是はそれにも似るべくも無し。教主釋尊の御使なれば天照大神、正八幡宮も頭を傾け手を合せ地に伏し玉ふ事也。法華經の行者をば梵釋左右に伴ひ玉へり。日月前後を照し玉ふ。かゝる日蓮を用ふるとも悪く敬はゞ國亡ふべし。何に況んや數百人に惡まれ二度



までも流されぬ此の國の亡びん事疑無し且つ誠めて國を助け玉へ、日蓮が控ふればこそ今までは安穩にありつれども法に過れば罰は當るなり又此度も用ゐずんば大蒙古國より打手を向けて日本國を亡ぼさるべし。

と重連懇に暇を告げ郎黨率ゐて鎌倉にぞ越きたる

是れより先日朗鎌倉土牢に在て常に師の君を懐うて泣く師よりの手簡出しては讀み讀みては拜す牢守も遂に心を動かし奉行宿谷光則に告ぐ光則竊かに日朗を牢より出しそこの物與へて佐渡に日蓮を訪ふことを許す日朗飛ばんばかりにうち喜び日夜兼行佐渡に日蓮を拜すかくてまた鎌倉に歸れり。

時は二月なり梅も咲かんずる頃なりしも寒風なほ肌を裂くばかりにて雪いまだ脛を没す此の北海の雪の中或るは凍え死ぬる事もやあらん一の不思議を言ひ殘さんと氷筆呵して一書をなす開目抄即ち是れなり。

日興熊王四郎の二人は尋ね來れり其の恙なきを見て喜び瘦せはてたる御

姿を見てまた涙にくれぬ日興は鎌倉なる内亂のさまを語れり自界叛逆難の事實として現れたるを告げぬまた之れを見て改宗したる者多きを告げぬ。

此の時に當り鎌倉より下知あり曰く日蓮を雜太郡一之谷に移すべしと近藤次郎清久守護所の下知を承けて家を造り四月七日日蓮を迎へて供養す今の御松山實相寺即ち是れ也。

念佛の門徒は復た日蓮を害せんとす即ち鎌倉に行いて許ふ日蓮毎日高山に登り天下に變災を降せと咒ふと頑冥なる鎌倉政府は命を發しぬ流人日蓮に親しみ交るは重罪なりと噫政府の俗吏昔もまた頑冥不戻の動物たるに過ぎざりしか。

鎌倉より僅かに施物は來れり師弟分ちて露の命を維す偶々本間重連は歸り來りぬ日蓮を渴仰すること深く日々の布施絶ゆること無し念佛の惡徒等遂に爲す能はずして已みぬ。

年は文永の十年時は四月の空櫻花散じ盡して杜鵑梢に啼く爰に卯月廿有



五日縁陰深き處、一大聖典は維せられぬ。是を如來滅後五百歲始觀心本尊抄となす。是れより先、文永九年七月八日大漫茶羅は維られぬ。號して佛滅後二千二百二十餘年一閻浮提内未曾有之大漫茶羅となす。これぞ第二の宗旨建立とも云つべし。否、日蓮法華妙宗は實に此の時に於て成立したるなり。日蓮曰く、

佐渡の國へ流され候ひし、已前の法門は、只だ佛の爾前經と、おぼしめせ

(三澤抄)

と、深いかな、崇いかな、知らざるべけんや、悟らざるべけんや。

## 第七章 隱退の動機

### 第一節 赦免狀到來

東風一たび動いて、雪北海に消え、鷺兒三たび歌つて、花塚原に笑ふ。文永は十一年春は來りぬ。配所の日蓮今は歸依信心の者多く、朝に法雨に潤いて、老男喜ひ、夕に妙華に遊んで、幼女樂しむ。爰に一大快報は塚原に來りぬ。三昧堂今夜の月色新にして、また喜ぶに似たり。是れを赦免狀の到來となす。法華經に曰く、天諸童子、以爲給使、刀杖不加、毒不能害も、夫れそもく之れの謂ひか。是より先、二月八日の夜、執權北條時宗夢に童子あり、告げて日蓮聖人を赦さずば、北條一門滅亡すべしと云ふを見る。驚き覺めぬ。憂々仲々、夜は明けて、東天紅を染む。時に奉行平左衛門頼綱の出仕あり。時宗即ち且眞の出仕其の故を問ふ。奇夢を以て答ふ。時宗復た驚き告ぐるに、奇夢の事を以てす。四つの太鼓は鳴れり。評定衆奉行それく出仕して、館に在り。奇夢は遂に評定せられぬ。而して日蓮赦免と定り、下知狀は認められたり。



奉行宿谷央則之れを受け歸りて其の由を日朗に告ぐ。日朗は喜びぬ。下知狀  
 頸に宿谷の牢を出て、足は全く空に飛べり。日夜兼行、雙鞋三百里、山高く海  
 荒る。漸くにして三月七日、佐渡に木湊に着けり。かくて日は峻坂に暮れて鳥  
 兒梢に鳴く。方角を失しぬ。道知るべからず。草鞋ちぎれたり。行くべからず。身  
 疲れ心痛む。五歩に一息。十歩に一休。杖に倚て歩むこと數歩。石に躓いて倒る。  
 杖折れ足傷く。石にすがつて呼べり。御師は何處に在らず。日朗に待ると喉は  
 渴きぬ。聲は枯れぬ。呼べども答ふる無し。叫べども來るなし。答ふるものは夫  
 れ山彦の聲か。來るものは後山の山風か。天地蒼然たるの間、一點の紅火は認  
 められたり。自ら日朗の聲に従つて來るものゝ如し。紅火は近けり。一僧あり  
 炬火を手にして來る。此僧は日朗を見たり。日朗は此の僧を見たり。僧は驚き、  
 日朗は喜ぶ。僧の右手は日朗の肩にあり。日朗の左手は僧の左手を握る。僧語  
 無く。日朗言無し。只だ見る。兩僧の顔面に涙の滂沱たるを。是れ即ち日朗の  
 最遊坊を病辱に訪いしその歸途なりしなり。日朗即ち日朗を負ふて行く。  
 二十年來御側を離れざりし日朗は來りぬ。伊東流罪の時、隨い行かんことを

願いて漁夫に手を折られたるの日朗は來りぬ。龍口斬刑の時、捕へられて鎌  
 倉土牢にありし日朗は來りぬ。落涙千行、嘯啼百出。塚原の野、今言無く。三昧堂  
 内、只だ涙あるのみ。  
 赦免狀は出されたり。塚原の野、俄かに花開いて。唱題の聲、三昧堂に充つ。  
 一夜明けぬ。日蓮は日興を率ゐ行いて。新穂の守護所に至り。本間重連に渡す。  
 重連即ち封を切る。

日蓮法師御勘氣事有御免之由所被仰下也。早々可被赦免之由候仍執達如  
 件

文永十一年二月十四日

行 兼 在列

行 平 在列

光 綱 在列

左衛門入道殿

是れに於て諸方に暇を告げ、鎌倉にぞ歸れる。檀徒信女雲の如く迎ひ出でた



り、玄題の旗鎌倉の天に翻り、唱題の聲鎌倉の地を動かす。小町夷堂橋の北詰に御庵室は巍然として建てられたり。

## 第二節 最後の諫奏

日蓮は北條の館に召されぬ。上段には執權時宗、左右相並んで一門列國の大、小名、整然として綺羅星に似たり。平左衛門頼綱前に進み日蓮に向て懇篤の挨拶あり。曰く「聖人前々よりの詞、一々符合す。此上は彼の大蒙古は何頃か此國を討つべきや。」日蓮何頃とは定めがたけれども今年を出でざるべし。されど大蒙古を調伏せん事、眞言師には仰せ付けらるべからず。若し大事を眞言師調伏するならばいよくいそひて此國亡ぶべし」と。時宗更に日蓮に向て云へらく「念佛無間等の法門、道理なることなるべし。されど世之を聞いて喜ばず、今より之を罷め、館の西、新に愛染堂を建て、真田一千町を寄附して、天下安泰の祈願所と仰がん。」日蓮即ち拒む。曰く「諸宗無得道の法門は、大慈大悲の根元なり。天下の存亡唯だ此一事にあり。身は随へらるゝ事ありとも心は随へらるべからず」と云ひ畢て去る。時に文永十一年四月八日也。

時宗遂に感激して已まず、宗門弘通の宗牒を書し使をして之を渡さしむ。其の狀に曰く、

頃年許多兵法之威力御威最深、三國無比類妙宗、後代難有僧、何宗比之、日本國中弘宗門事、不可有妨也。

文永十一年五月二日

日蓮上人

城左兵衛 奉

日蓮之れを見、長大息を洩して曰く「我が言を用ゐずして徒らに此の狀を賜ふは世を憚り人を懼るゝなり。眞實の事に非ず。唯だ我が大法に諂るのみ。古語に「諫ムベクシテ諫メザル之レヲ尸位ト謂ヒ、退ク可クシテ退カザル之レヲ懷寵ト云フ。尸位懷寵ハ國ノ佞人ナリ。」三たび諫めて用ゐられず、身を退くは先賢のならひなり。何なる山中にも籠つて命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外は他事なし。

嗚呼、順縁は圓より化導すべし、逆縁また化導すべし、然れども既に之れを善と信じて改めず、是れ眞理に忠なるものにあらざるなり。執權の地位を以て



して一比丘日蓮に従ふ。是れ改むる能はざる所以なり。されども日蓮は如來の使なり。佛勅を奉じて來りしなり。佛勅に従ひ大法に服す。是れ即ち大善の人なり。善として改むる能はず。日蓮に向て三國比類なき妙法と云ふ。之れ大法に倣るものにあらずして何ぞ。

倭人北條時宗。是に至て度すべからず。身を山林に遁れんとするもの實に是れ其の所なり。日蓮の遁世。豈に一般厭世家のそれと同日に論ずべけんや。

### 第三節 身延の隱退

身延山の麓。溪流岩を嚙んで走るの所。こゝに一草堂成れり。柱僅かに十二本。四面各三間。茅以て葺き。竹以て椽となす。中央に須彌壇を作り。本尊を安んず。妙香常に芳しく。法花毎に色鮮かなり。日蓮大に喜んで居し。自ら此風景をものすらく。

鹹に身延の山の栖はちはやふる神もめくみを垂れ。天下りまします心無の賤の男賤の妻も心をとゝむべし。哀を催す秋の暮には草の庵に露深く。擔にすたくさゝかにの糸玉を連き。蜂の紅葉いつしか色深くしてたえ々々。

に傳ふ懸樋の水に影を移せば。名にしをふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ。又後には峨々たる深山聳へて梢に一乗の果を結び。下枝に鳴蟬の音。漲く前には湯々たる流水湛へて。實相眞如の月浮び。無明深重の闇晴れて。法性の空に雲も無し。かゝる砌なれば庵の内には晝は終日に一乗妙典の御法を論談し。夜は夜もすがら要文誦持の聲のみす。傳を聞く釋尊の住み給ひけん。靈鷲山を我朝此砌に移し。置きぬ。霧立つ風はげしき折々も山に入りて。薪をこり露深き草を分けて。深谷に下て。芹をつみ。山河の流もばやき岩瀬に菜すゝき。袂しほれて干しわぶる思は昔の人九が詠ける和歌の浦にもしほ垂れつゝ。世を渡る海士もかくやと思ひやる。

身延山は甲斐國巨摩郡に在り。波木井六郎が邸の西北に當る。北には白根か嶽。天に聳え。南は鷹取山空に仰ぐ。西に七面山。東に天子嶽。北に流るゝは早川なり。南に走るは波木井川なり。富士川東に馳せ。大白川西に走る。此の四川の分界嶺は即ち身延山なり。

初め聖日蓮の隱退を決するや。五月十二日。檀信の徒に暇げ。甲州身延波木井



六郎實長の邸をさして鎌倉を出づ、時に歳五十三なり、酒白、車返、富士の大宮を經、富士郡内房に至る。一老尼あり、日蓮に歸依し一室を淨めて供養す、其の夜流水潺湲として、月影を弄び、風景全く畫を絶す、日蓮即ち詠あり

うつぶさにふす夜のあまり寐られねば

月を身延に起きかへるかな

五月十七日甲州相俣を過ぎ、波木井氏の家に到る。六郎實長、地割圖して一寺を建てんとす、日蓮辭して庵室を求む、即ち三間四面の草堂、即ち是れなり。一日、天氣快晴、兩三の弟子を伴ひ、荆棘を拂つて山嶺に登る。一天雲なく、東方遙かに房州の山を見る、懷郷の情やるかたなく、讀經聲を濕して亡親を追慕す。此に古蹟今に存し、思親閣を立て、其の昔を紀す、嗚呼、出づる時は天を碎き地を破る、入る時は草眠り蟲臥す、予が上人を崇拜して、深夜暗涙を致すも、の實に此の所に在り。

聖日蓮曰く

一人ノ悲母堂ニ有リ朝ニ出デ、主君ニ詣シ夕ニ入テ私宅ニ返リ營ム所

ハ悲母ノ爲メ、存スル所ハ孝心耳、而ルニ去ル月下旬ノ比、生死ノ理ヲ示サシガ爲メニ、黃泉ノ道ニ趣ク、此ニ貴邊ト歎テ云ク、齡ハ既ニ九旬ニ及ビ子ヲ留メテ親ヲ去ル、一次第タリト、雖モ、債々事ノ心ヲ按ズルニ去テ後來ル可カラズ、何レノ月日ヲ期セン、慈母國ニ無シ、今ヨリ以後ハ誰ヲカ拜ス可キ、離別忍ヒ難キノ間、舍利ヲ頸ニ懸テ足ニ任セテ、大道ニ出デ下州ヨリ甲州ニ至ル、教主釋尊ノ御寶前ニ母骨ヲ安置シ、五體ヲ地ニ投テ合掌シテ、兩眼ヲ開キ、尊容ヲ拜シ、歡喜身ニ餘リ、心ノ苦ミ忽チ息ム、我頭ハ父母ノ頭、我足ハ父母ノ足、我カ十指ハ父母ノ十指、我口ハ父母ノ口ナリ、譬ヘバ種子ト果子ト身ト影トノ如シ。

あゝ父母に孝ならずして、あに世に忠ならんや、上人の延獄に登りて房州の天に泣きしもの實に其の所なり。

\* \* \* \* \*

投、湯、鑊、拯、祥、毛、  
宗祖九年猶忍苦、  
終、向、雲、山、深、處、逃、  
吾、儕、一、日、豈、鮮、勞、



若研香海記函業  
別有風教可道基

欽家須彌山  
明忍父母摩斯高

(元政正人)

\* \* \* \* \*

秋去て冬は來りね朝鮮海峽波荒し蒙古は來れり元兵は來れり對馬に來れり元軍一万五千高麗軍八千都督使便方獲將たり十月十四日壹岐を侵し守護代平經高等戰死す元兵亂害至らざる無く島民を殺し姪婦を姦す腥風吹き血雨降る經高の臣宗三郎僅かに身を以て遁れ筑前博多に告ぐ大宰府大に驚き京に使して大に九州の兵を召す少貳景資鎮西奉行大友賴泰戸次重秀菊地隆泰赤星有隆等十万二千餘人出て戰ふ漸く之を拒く年は變りぬ年號を改めて建治となす此の正月元軍高麗と謀り禮部侍郎杜世忠兵部中郎何文著計議官都魯丁來る大宰府之れを鎌倉に送る時宗怒て斬る十二月時宗令して西海山陰山陽南海諸道の戰艦を修めしむ六年は過ぎぬ  
弘安四年となれり筑海の颶風波を上げて黒し蒙古來れり元兵來れり五月

廿一日壹岐對馬を襲ひ島民を殺すこと三百有餘島民力盡き老幼山に匿る乳兒土に泣き病女天に叫ぶ少貳資時龍造寺松浦彼杵千葉高木の諸士共に兵數万を率ゐ壹岐瀬戸の浦に防ぐ資時戰死し敵兵筑前志賀島に戰ふ鎌倉の援兵は來れり少貳景資大友藏人菊地武房赤星有隆葉室高善龍造寺季時等來り應ず傳へて報有り賊兵長門に至ると又た報有り安藝を略すと京師の人心鼎の沸けるが如く鎌倉の人士また恟々たり日蓮の信徒法子は喜べり曰く法華經の現罰なり上人の安國論實に符節を合せたるが如しと日蓮聞いて憂ふる所あり即ち一書を贈る其の狀に曰く

小蒙古ノ人、大日本國ニ寄セ來ルノ事、我カ門弟并ニ檀那等ノ中ニ若シ他人ニ向テ將タ又タ自ラ言語ニ及フ可カラズ、若シ此旨ニ違背セハ門弟ヲ離ル可キ等ノ由存知スル所也、此旨ヲ以テ人々ニ示スベク候也。

弘安四年 辛巳 六月十六日

人々御中

是れに於て將軍惟康數度忠諫せる正法の行者日蓮の念力を借らんと欲し、



自ら身延山に至る。傳へて云ふ、日蓮乃ち以て國恩に報ぜんと欲し大曼荼羅を書し與へしと。京師の騷擾は地を天になすが如く龜山天皇遂に「朕が身を以て國難に當らん」と仰せらるに至りぬ。宸翰書し給ひて伊勢の大廟に祈らる。是れに於て「敵國降仗」の祈禱は全國の神社佛閣に起れり。護摩の煙は天を焦し、清めの御幣は空に滿つ。

時は閏七月一日、曉天俄かに颶風を起し浪怒り海荒る。左副都元帥阿帖木兒以下溺死するもの數を知らず。魚兒餌に過ぎて海上に浮ぶ。元兵遁れ歸るもの稀れなり。

是に於て歸依の人はますく、殖ぬぬ。參詣の人居るに處無く、遂に六丈四方の堂は營まれたり。身延山久遠寺即ち是れなり。

#### 第四節 池上の入滅

日蓮は日本國人王八十五代後堀河院御宇貞應元年壬午安房國長狹郡東條郷の生れ也。佛滅後二千一百七十一年に當る也。八十六代四條院天福元年己亥十二歳にして清澄寺に登り道善御房に於て學文。延應元年亥十八歳に

して出家し其後十五年が間一代聖教惣して内典外典に亘て残り無く見定め生年三十二歳にして建長五年丑癸四月廿八日念佛は無間の業なりと見出しけるこそ時の不祥なれば如何にせん。此法門を申さは誰か用うべき。返て怨となるべし。人を恐れて不申ば佛法の怨と也。大阿鼻地獄に墮すべし。經文には末法に法華經を弘むる行者あらば上行菩薩の示現也と思ふべし。言はざる者は佛法の怨也と云説給へり。經文に任せて云ならば日本國は皆一同に日蓮が敵となるべし。釋迦佛は娑婆に入千度生れ尸毘王とありし時は鳩の命にかはり薩埵王子とありし時は飢たる虎に身を與へ雪山童子たりし時は半偈の爲めに身を投げ賢勢鹿とありし時は千頭の鹿王と成て我身を獵師に射られて姪胎の鹿を助け、三千大千世界に我身命を捨置給はざる處無し。此功德は皆な一切衆生の中には法華經を信ずる人々に與んと誓給ふ。我不愛身命の法門なれば命を捨て、此の法華經を弘めて日本國の衆生を成せしめん。纒の小島の主君に恐れて是をいはずんば閻魔の責をば如何せん。國主の用ひ給ふ禪、天魔なる山、鎌倉殿の



用ゐ給ふ眞言の法亡國の由、極樂寺の良觀房國賊なる由、淨土宗の無間大阿鼻獄に墮つべき由、一一に記し立正安國論を作り宿谷の禪門を使として見參に入れ奉る。此は生年三十九の年文應元年甲辰歲也。日蓮が申立て法門を一偈一句も答る人一人も無し。上下一同に惡み嫉て讒奏申すに依て生年四十弘長元年辛亥の歲五月十二日には伊豆國伊東の莊へ配流し伊東の八郎左衛門尉の預て三箇年也。同三年癸癸二月廿二日救免せらる。如來現在猶多怨嫉況滅度後の法門なれば日蓮此法門の故に怨まれて死せんことは決定也。今一度舊里へ下て親き人々をも見ばやと思て文永元年甲子十月三日に安房國に下て卅餘日也。同十一月十一日には安房國東條の松原と申大道にて申酉の時計に數百人の念佛者の中に取籠られ日蓮は但一人物の要にあふべき者は三四人候しかども射る箭は雨のふるが如く打太刀は電光の如し。弟子一人當座に打殺され候。又二人は大事の手負候。自身計り射れ打れ候しかども如何候はん。打漏され候てかまくらに登り西明寺殿の見參に入奉しに御祈禱申べき由有しかども日蓮云建長寺、極

樂寺等の念佛者禪宗等が堂塔を燒拂ひ彼等が頸を由井が瀆にて悉く切失なはるべく候然らずんば只今此日本國の人々他國より賣られ同士打して自界叛逆難あるべし。かまくら中の持齋の僧を御供養候事は但々牛を飼せ給てこそ候へと申たりしかば日蓮房は西明寺殿を牛飼と申候と讒奏申に依て文永八年辛未九月十二日には頸の座に登り相摸の龍口へ遣はさる今は幸と思ひしかば五郎の宮の前にて馬引熊王丸を使として四條左衛尉に知らせしかはかちはだしにて馬の口に取付て踏すがら啼悲んで事實にならば腹切んとせし者をば何の世にかは忘るべく候。法華經に命を進らせ日蓮より前に腹を切んと思ひきりし事をば釋迦佛先づ知食して候也。既に頸切れんとせしが其夜は延候て相摸の依智へ流され本間の六郎左衛門が預り明る十三日夜ふけ方に不思議現ず。大星下て庭の梅の枝に懸る。死罪を宥られ流罪に行はる。佐渡國へ遣はさる。十月十日相摸の依智を立て同廿八日佐渡國へ著ぬ。本間六郎左衛門殿の後見の家より北に探原と申て死人を送る三昧原の野邊にかきもなき草堂に落著ぬ。